一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 22

鳥取県日野郡日南町

新屋小タイ田遺跡（にいやこたいだいせき）
新屋川添遺跡（にいやかわぞえいせき）

２０２０．３
一般財団法人　米子市文化財団

序

近年の公共事業及びその他開発の縮小に伴い、埋蔵文化財の調査も減少傾向にあります。長年にわたり米子市内の発掘調査を行ってきた当財団では、平成20年度に実施した南部町での清水川六反田遺跡での調査以降、鳥取県西部地域全域を視野に入れた埋蔵文化財の発掘調査に取り組んでおります。

このたび、国土交通省三次河川国道事務所から依頼を受けて調査を実施した「新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。新屋小タイ田遺跡の調査では、古墳時代の建物跡、水路状遺構、道路状遺構を検出し、新屋川添遺跡では、中世の建物跡、石敷遺構等を検出しています。

この報告書が、今後さまざまな分野で広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査に当たって多くの皆様にご指導、ご助言、ご協力いただきましたことを心より感謝申し上げます。

令和２（2020）年３月

一般財団法人　米子市文化財団

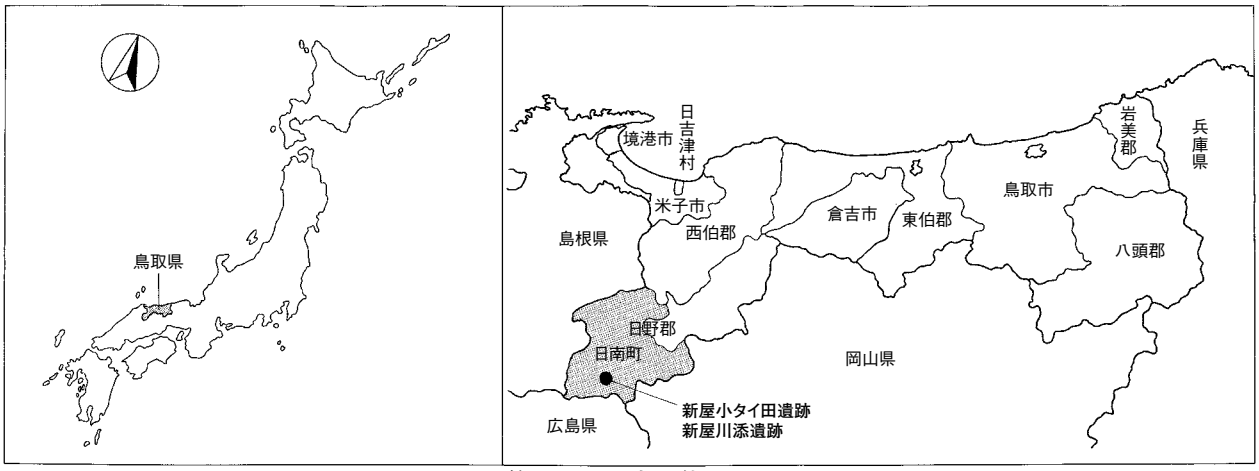
理　事　長　　杉　原　弘一郎

例　　言

1．本書は国土交通省三次河川国道事務所の依頼を受けて、一般財団法人米子市文化財団が平成28年度に実施した、一般国道183号鍵掛峠道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書の図中の方位は公共座標北で、レベルは海抜標高を示す。
3．本書に記載した第２図の地形図は平成11年調整日南町地形図1/5,000「28・29」を、第３図の地形図は国土地理院発行の1/25,000地形図「多里（平成10年発行)」、「道後山（平成13年発行)」をそれぞれ複写・加筆して掲載している。
4．本書の執筆及び編集は（一財）米子市文化財団　埋蔵文化財調査室が行った。
5．発掘調査によって出土した遺物は、日南町教育委員会が保管している。
6．現地調査および報告書作成にあたり、下記の方々の他、多くの方々からご指導、ご助言をいただいた。以下に明記して感謝いたします。
中原　斉（鳥取県文化財局長)、日南町教育委員会、米子市文化振興課（敬称略）

凡　　例

1．遺物実測図のうち、須恵器(一部除く)は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
2．遺跡の略称は、新屋小タイ田遺跡を「NYKTD」、新屋川添遺跡を「NYKZ」とした。また、参考資料として掲載した新屋道ノ上大フケ遺跡を「NYMUOF」とした。
3．遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器が1/4、鉄器類が1/2・1/3・1/4、石器類が1/1・1/4、銅銭が1/1、杭・柱が1/4・1/8である。
4．本文、挿図及び写真図版中の番号は一致する。
5．柱穴・柱穴状小穴はＰと表記し、遺構の規模は（長辺×短辺－深さ）である。



第１図　日南町位置図

目　　次

序
例言・凡例
目　次・挿図目次・挿表目次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査の体制 …… 2
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　新屋小タイ田遺跡の調査
　第１節　新屋小タイ田遺跡の調査概要 …… 7
　第２節　新屋小タイ田遺跡の堆積 …… 14
　第３節　新屋小タイ田遺跡の遺構について …… 14
　　１　竪穴建物 …… 14
　　２　掘立柱建物 …… 23
　　３　土器溜り …… 23
　　４　土坑 …… 23
　　５　河川状遺構 …… 27
　　６　水路状遺構 …… 27
　　７　道路状遺構 …… 32
　第４節　新屋小タイ田遺跡の遺構外遺物について …… 34
第４章　新屋川添遺跡の調査
　第１節　新屋川添遺跡の調査概要 …… 43
　第２節　新屋川添遺跡の堆積 …… 43
　第３節　新屋川添遺跡の遺構について …… 43
　　１　溝状遺構 …… 43
　　２　掘立柱建物 …… 43
　　３　柱列 …… 47
　　４　石敷遺構 …… 52
　第４節　新屋川添遺跡の遺構外遺物について …… 53
第５章　まとめ …… 64
第６章　理化学的分析
　第１節　新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡における放射性炭素年代測定 …… 67
　第２節　樹種同定 …… 71
写真図版

挿図目次

第１図　日南町位置図 …… i
第２図　新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡
　　調査位置図 …… 1
第３図　周辺遺跡分布図 …… 4
第４図　新屋小タイ田遺跡調査区設定図 …… 7
第５図　新屋小タイ田遺跡西区土層断面図１ … 8
第６図　新屋小タイ田遺跡西区土層断面図２ … 9
第７図　新屋小タイ田遺跡東区土層断面図 …10
第８図　新屋小タイ田遺跡遺構配置図 ……11
第９図　Ｅ１区最終地形測量図 ……12
第10図　竪穴建物１平面および断面図 ……13
第11図　竪穴建物１出土遺物拡大図 ……13
第12図　竪穴建物１出土遺物実測図１ ……13
第13図　竪穴建物１出土遺物実測図２ ……14
第14図　Ｅ２区最終地形測量図 ……15
第15図　竪穴建物２平面および断面図 ……17
第16図　竪穴建物２遺物出土状況図 ……18
第17図　竪穴建物２出土遺物実測図１ ……18
第18図　竪穴建物２遺物出土状況拡大図１ …19
第19図　竪穴建物２遺物出土状況拡大図２ …20
第20図　竪穴建物２遺物出土状況拡大図３ …20
第21図　竪穴建物２出土遺物実測図２ ……20
第22図　Ｅ３区最終地形測量図 ……21
第23図　柱穴状落込み出土遺物実測図 ……21
第24図　掘立柱建物１平面および断面図 ……22
第25図　掘立柱建物２平面および断面図 ……22
第26図　Ｅ４区最終地形測量図 ……24
第27図　土器溜り出土遺物実測図１ ……24
第28図　土器溜り平面図 ……25
第29図　土器溜り出土遺物実測図２ ……25
第30図　土坑１・２平面および断面図 ……26
第31図　河川状遺構平面及び断面図 ……27
第32図　水路状遺構平面図 ……28
第33図　水路状遺構杭立面図 ……29
第34図　水路状遺構断面図 ……29
第35図　水路状遺構検出杭実測図１ ……29
第36図　水路状遺構検出杭実測図２ ……30
第37図　水路状遺構検出杭実測図３ ……31
第38図　道路状遺構平面および断面図 ……33
第39図　遺構外出土遺物実測図１ ……35
第40図　遺構外出土遺物実測図２ ……36
第41図　遺構外出土遺物実測図３ ……37
第42図　遺構外出土遺物実測図４ ……38
第43図　遺構外出土遺物実測図５ ……39
第44図　新屋川添遺跡土層断面図 ……44
第45図　新屋川添遺跡遺構配置図 ……45
第46図　溝状遺構平面及び断面図 ……46
第47図　掘立柱建物１平面および断面図 ……47
第48図　柱列平面および断面図 ……48
第49図　柱列柱実測図１ ……49
第50図　柱列柱実測図２ ……50
第51図　柱列柱実測図３ ……51
第52図　柱列柱実測図４ ……52
第53図　石敷遺構１および石列平面図 ……54
第54図　石敷遺構１平面および立面図 ……55
第55図　石敷遺構１出土遺物実測図 ……55
第56図　石敷遺構２平面および立面図 ……56
第57図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測
　　図１ ……57
第58図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測
　　図２ ……58
第59図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測
　　図３ ……59
第60図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測
　　図４ ……60
第61図　新屋道ノ上大フケ遺跡出土遺物実
　　測図 ……65
第62-1・2図　暦年較正結果……69・70

挿表目次

第１表　新屋小タイ田遺跡新旧遺構対照表 … iv
第２表　新屋川添遺跡新旧遺構対照表 …… iv
第３表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第４表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡竪穴建物）……16
第５表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡柱穴状小穴）……21
第６表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡土器溜り）……26
第７表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡水路状遺構）……32
第８表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡遺構外１）……39
第９表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡遺構外２）……40
第10表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡遺構外３）……41
第11表　遺物観察表
（新屋小タイ田遺跡遺構外４）　……42
第12表　遺物観察表（新屋川添遺跡柱列）…49
第13表　遺物観察表
（新屋川添遺跡石敷遺構１）……56
第14表　遺物観察表
（新屋川添遺跡遺構外１）……61
第15表　遺物観察表
（新屋川添遺跡遺構外２）……62
第16表　遺物観察表
（新屋川添遺跡遺構外３）……63
第17表　遺物観察表
（新屋道ノ上大フケ遺跡）……66
第18表　測定試料及び処理 ……67
第19表　測定結果 ……68
第20表　新屋川添遺跡における樹種同定結果
……71

第１表　新屋小タイ田遺跡新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴建物１　P2	竪穴建物１　P3	竪穴建物１　P3	竪穴建物１　P4	竪穴建物１　P4	竪穴建物１　P5
掘立柱建物１　P1	P69	掘立柱建物１　P2	P71	掘立柱建物１　P3	P75
掘立柱建物１　P4	P81	掘立柱建物１　P5	P76	掘立柱建物２　P1	P73
掘立柱建物２　P2	P90	掘立柱建物２　P3	P88		

第２表　新屋川添遺跡新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
掘立柱建物　P1	P31	掘立柱建物　P2	P34	掘立柱建物　P3	P33
掘立柱建物　P4	P12	掘立柱建物　P5	P13	掘立柱建物　P6	P22
掘立柱建物　P7	P28	柱列　P1	P32	柱列　P2	P11
柱列　P3	P10	柱列　P4	P30	柱列　P5	P7

第１章　調査の経緯

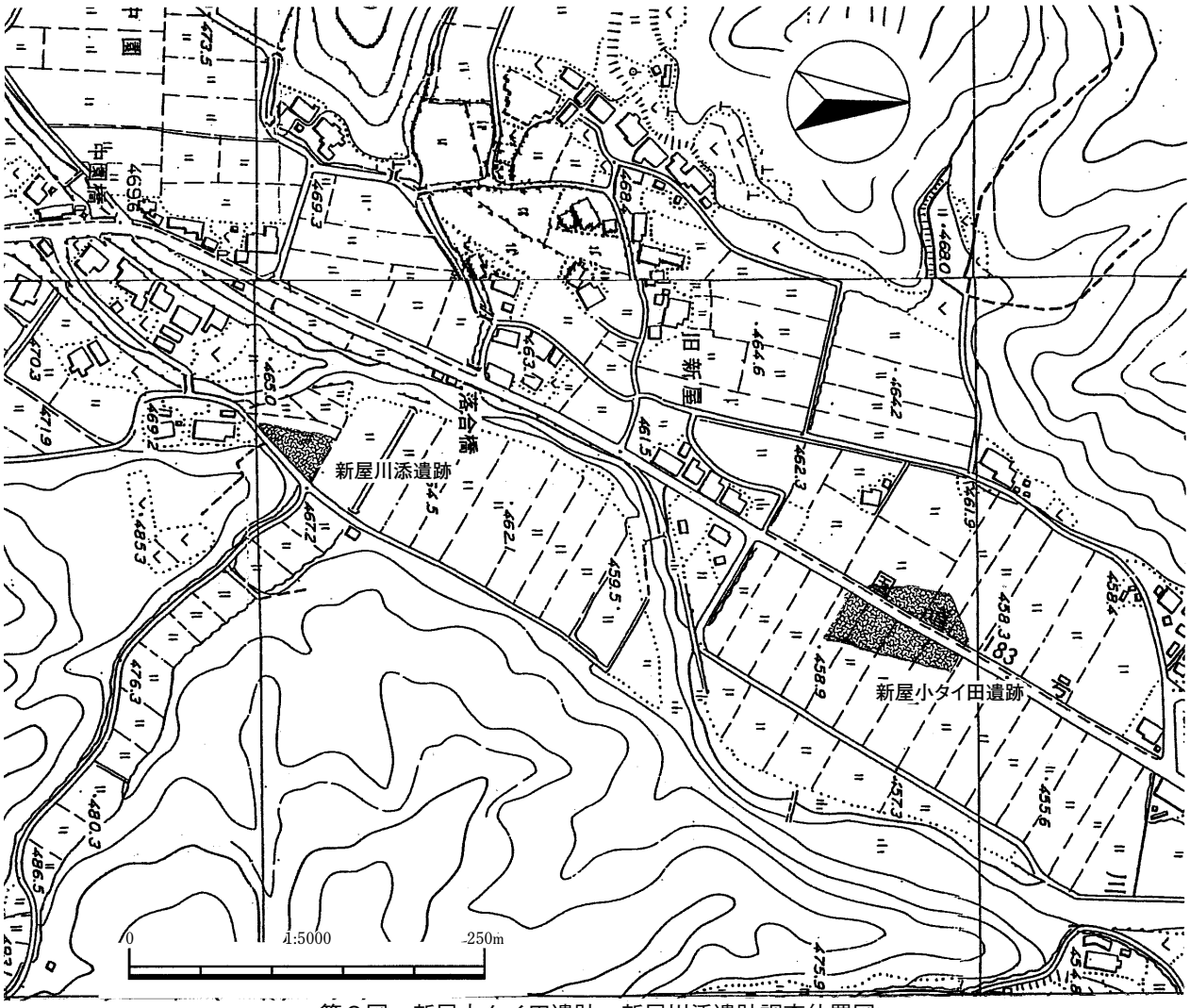
第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、国土交通省三次河川国道事務所が計画する一般国道183号鍵掛峠道路工事によって埋没する埋蔵文化財の記録保存を目的として行った調査である。

本件については、平成27年度に日南町教育委員会が試掘調査を行った結果、遺物の包含層が確認され、国土交通省と日南町教育委員会との協議の結果、日南町教育委員会では発掘調査の対応ができないことから、当財団が調査を行うこととなったものである。現地調査は、平成28年７月25日から平成28年12月13日まで行った。現地調査終了後に基礎整理を行ったが、本格的な整理作業および報告書作成は令和元年度に行い、同年度末に報告書を刊行した。

第２節　調査の経過

調査面積は、新屋小タイ田遺跡約3,120㎡、新屋川添遺跡約1,040㎡の計4,160㎡である。調査地が２ヶ所に分かれていたため、面積の広い新屋小タイ田遺跡から調査を始めた。新屋小タイ田遺跡は中央を



第２図　新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡調査位置図

国道183号線が走り、東西に分断していたため、試掘調査の結果を受け、堆積土が深く、遺構の様相がわかり難いと思われる西側部分から調査を行った。西側の調査は、排土を調査区外に搬出することができないため、場内処理を余儀なくされ、排土を振分けながら行うことにした。東側の調査は、調査区の南側に排土置場を設置したうえ、水田の畦畔に沿って排水パイプが走っていたため、畦畔を除去することができず、調査地の北側水田から一面毎に調査を完了させていった。新屋川添遺跡の調査は、調査地の北側に排土置場を設定したため、調査地の南側から行った。詳細についてはそれぞれの項で述べる。いずれの遺跡の調査も、遺物の取り上げはトータルステーションで行い、遺構の測量は、メッシュ測量とトータルステーションによる測量を併用して行った。

現地調査は、平成28（2016）年７月25日から新屋小タイ田遺跡の西側から重機による表土掘削を開始し、７月27日から作業員による掘削を開始した。８月下旬には新屋小タイ田遺跡の東側を重機による掘削を開始し、西側と並行して順次作業員による掘削を行った。10月末には、ほぼ新屋小タイ田遺跡の調査を終え、11月には新屋川添遺跡の調査を開始した。平成28（2016）年12月４日に現地説明会を開催し、現地調査は平成28（2016）年12月13日まで行った。

調査の結果、新屋小タイ田遺跡では竪穴建物、掘立柱建物、土器溜り、土坑、水路状遺構、道路状遺構を、新屋川添遺跡では、掘立柱建物、柱列、石敷遺構、溝状遺構をそれぞれ確認した。また遺物では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄器、石器等が出土した。

第３節　調査の体制

・調査主体　一般財団法人米子市文化財団
　　理　　事　　長　杉原弘一郎
　　常　務　理　事　先灘　達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）
・調査担当　埋蔵文化財調査室
　　室　　長　小原　貴樹
　　次長兼統括調査員　平木　裕子
　　嘱　託　職　員　秦　　美香
　　非 常 勤 職 員　田中　昌子

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

今回調査を行った新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡のある新屋地区は、日南町の南西端に位置し、南にある鍵掛峠を越えると、すぐに広島県庄原市との県境である。現地は、標高450～465mの谷の盆地平坦部に位置する。

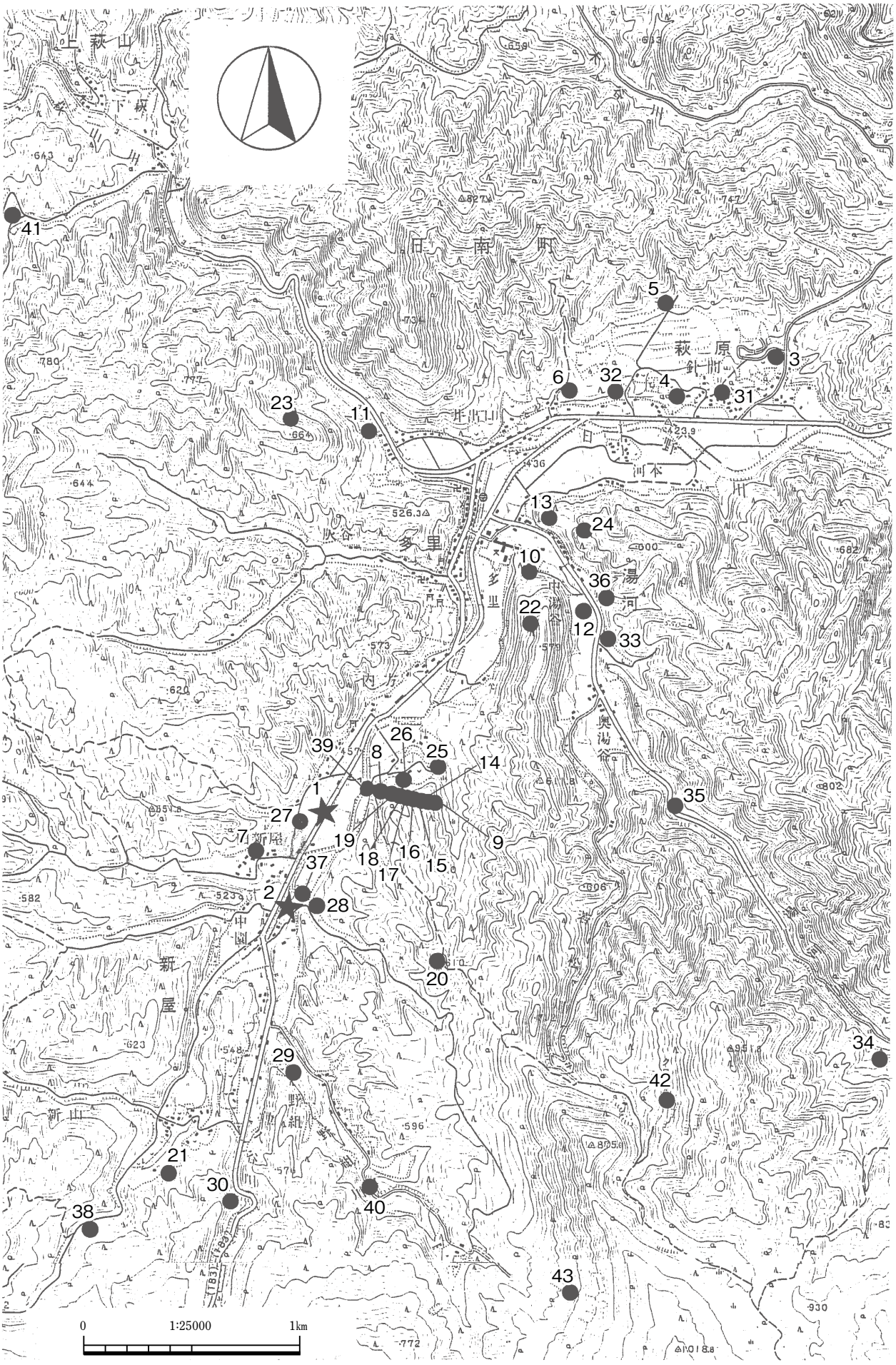
日南町は、鳥取県の南西部に位置し、西を島根県、南西を広島県、南は岡山県に接する。北は峠を越え西伯郡南部町である。四方を高い山に囲まれ僅かに広がる平野をぬうように日野川が流れ、その沿岸に集落が点在する。東西25㎞、南北23㎞、総面積約340.96㎢、人口は約4,600人、世帯数約2,200戸である。町内を流れる主な川には日野川、石見川、印賀川があり、それぞれの河川域は地形・地質と共に異なった特徴を持つ。日野川は、鳥取県の三大河川のひとつで、三国山に源を発し、町内を横断するように流れ、日本海に注ぐ。上流は、第三紀層を浸食し多里盆地を形成し、今回の調査地はこの盆地に位置する。下流では古生層を深く浸食しＶ字谷を形成している。石見川は、大倉山南東麓に源を発し、生山で日野川に合流する。印賀川は、阿毘縁の大谷に源を発し、流れは比較的緩やかで、菅沢地区では深く浸食し、北石霞渓を造る。

町内最古の岩石は、三郡変成岩で、町の中央部に分布している。今回調査を行った南部にはかんらん岩が見られ、そのほとんどは蛇紋岩化している。この岩体中には、クローム鉱床を胚胎しているものがある。稲積山周辺には小規模なはんれい岩がみられる。調査地の周辺をみてみると、多里から三国山にかけて北東より細長く南西方向に延びる岩体で、新屋では新三紀系の多里層に覆われている。多里層は、礫岩、砂岩、泥岩の互層からなり、層厚は約150mと推定されている。

多里神社裏山・赤岩・中園～野組付近・新屋西方の丘陵地帯に見られ、礫は径10㎝前後の亜円礫が大部分である。この上に径30㎝～50㎝のノジュール（化石団塊）を基底部にはさみ、粗粒砂岩層がのっている。

多里層の最も大きい露頭は、旧新屋の日野川対岸の「赤岩」と言われる高さ10m以上の崖である。

今回の調査地である新屋地区は、日南町の最西南端に位置し、稲積山、道後山、三国山、窓山等の山に囲まれた標高約450～465mの谷部に形成されたわずかな平坦地に位置する。新屋小タイ田遺跡は、標高約450mの谷部の平坦地の中央部を走る国道183号線沿いの水田地で、東側には日野川が流れる。新屋川添遺跡は、そこから南に約400mの国道からやや東に入った道後山から派生する小支群の一つの尾根麓の標高465mの水田地に位置し、西側に日野川が流れる。この地区では昭和56（1981）年から圃場整備が行われている。新屋地区周辺では多里古墳群、家の奥鈩床たたら・野組たたら・正士たたらなどの生産遺跡の存在は知られていたが、今まで発掘調査が行われておらず、詳細は分かっていない。本格的な調査としては、同じく一般国道183号鍵掛峠道路工事に伴い平成27年度に調査された新屋石浦ノ空遺跡での調査に続く調査となる。町内では、県が進める地域高規格道路江府・三次線工事による調査が、平成11年から霞地区において行われている。



第３図　周辺遺跡分布図

第２節　歴史的環境

日南町は、明治21年に公布された市政、町村制によって10か村で誕生したが、大正時代には７か村となる。昭和になると合併の気運が盛り上がり、昭和30年には５町村となり、昭和34年の新市町村建設促進法によって、５町村が合併し現在の日南町となる。

日南町における旧石器時代の人類の営みの痕跡は、まだみつかっていない。しかしながら、大山山麓での柳刃形尖頭器の採取、隣接する岡山県野原でのナイフ形石器の発見があることから、当該地においても、営みがあった可能性は十分考えられる。

日南町において最も古い痕跡としては、近年調査が行われた宮内蛇巻遺跡で縄文時代早期の押型文土器が出土している。また、これよりやや時代は下るが、折渡遺跡でも縄文時代早期の押型文土器が出土しているほか、福万来、福塚では、縄文時代後期の土器が見つかっている。そのほか、印賀で石棒・石鏃、宝谷で石斧、福万来で石匙、大倉山山麓で石鏃・石斧等の石器も見つかっている。人間の生活の場としての痕跡としては、新屋石浦ノ空遺跡（29）で確認された縄文時代晩期の住居跡が最も古い痕跡である。

弥生時代になると、丸山大洞遺跡で、竪穴建物１棟と、テラス状遺構が見つかったほか、矢戸鍵取免遺跡では、貼石墳丘墓が見つかっている。注目すべきは、前者で出土した土器が備中北部・美作周辺で出土している土器と類似し、後者では、吉備系の弥生土器がみつかっていることから、岡山県との交流が伺える。霞要害跡では、弥生時代後期の竪穴建物、掘立柱建物が確認され、ここでも吉備系土器が出土している。そのほか、生山桜原遺跡では、前期の壺、福万来、笠木、茶屋等では石器や土器などが採取されていることから、集落があった可能性は伺える。

古墳時代になると、日南町においても古墳が造られるようになり、古墳や横穴墓の数は百を超え、そのほとんどは円墳や横穴墓といった古墳時代後期のものである。このうち、日南町内で確認されている前方後円墳は、印賀20・24号墳、丸山神社古墳、福万来10号墳、霞17号墳の５基で、特に印賀24号墳は、全長27mを測り、日野郡最大規模を誇る。近年の発掘調査によって、霞17号墳が古墳時代前期末から中期前半の前方後円墳、印賀７号墳・神戸上東ノ原１号墳で、５世紀頃の須恵器が出土して中期の円墳と、古墳時代後期以外の古墳も確認されている。今回調査を行った新屋地区周辺では、多里古墳群（７～20）や新屋１号墳（21）などが確認されている。

第３表　周辺遺跡一覧表

1	新屋小タイ田遺跡	2	新屋川添遺跡	3	荻原所在弥生土器出土地	4	萩原遺跡
5	萩原所在遺跡	6	長澤所在遺跡	7	多里001号墳	8	多里002号墳
9	多里003号墳	10	多里004号墳	11	多里005号墳	12	多里006号墳
13	多里007号墳	14	多里008号墳	15	多里009号墳	16	多里010号墳
17	多里011号墳	18	多里012号墳	19	多里013号墳	20	多里014号墳
21	新屋001号墳	22	湯谷城跡	23	亀尾山城跡	24	多里所在城遺跡
25	下橋上遺跡	26	上橋上遺跡	27	新屋道ノ上大フケ遺跡	28	桜ヶ谷遺跡
29	新屋石浦ノ空遺跡	30	新屋所在古墓	31	荻原山鉄山	32	もりか原たたら
33	湯谷山鉄山所	34	出立山鉄山所	35	出立山野たたら	36	鈩谷尻たたら
37	家の奥鈩床たたら	38	正土原たたら	39	新屋所在遺構確認地	40	野組たたら
41	明谷たたら	42	若松鉱山跡	43	広瀬鉱山跡		

副葬品については、田の原古墳から圭頭式大刀の柄頭、金巻きの鞘、金銀環のほか大量の土器が出土し、丸山２号墳では、鉄刀や轡・杏葉等の馬具が出土している。また、名土古墳では珠文鏡が出土したほか、印賀古墳群では、26基もの古墳が確認され、人骨・耳環・鉄剣や鉇等の鉄器が供献された箱式石棺が出土している。

一方、古墳時代の人々の生活の場は、あまり確認されておらず、神福中野遺跡で竪穴建物と掘立柱建物が１棟ずつ確認されているほか、今回調査した新屋小タイ田遺跡で竪穴建物と掘立柱建物が確認されているが、いずれも古墳時代末頃の集落である。

律令時代には、日南町は伯耆国日野郡に属し、『和名抄』の日野郡阿太・葉侶・神戸の三郷が町域にあたると推定される。『延喜式』によると伯耆国は古来より鉄の生産地として有名であると記され、鉄製産は奈良時代まで遡り、当地においても、神福中野遺跡で奈良時代の鍛冶工房跡と思われる竪穴建物が確認されている。また、矢戸鍵取免遺跡では、平安時代の段状遺構や柱穴群が確認されている。

中世に入ると、日南町においても城館が築かれるようになる。現在町内では、40ヵ所あまりの城館が確認されているが、そのほとんどは山城であり、その中でも生山にある亀井山城は、郭・石垣・堀切・竪堀等が残存し、天正年間に吉川広家が在城した後、山名和泉守景行が在城したとされる。また、調査地周辺の多里にある亀尾山城跡（23）は、山の稜線に沿って多くの平坦地や堀切が造られ、居館跡の平地もある。尼子の属将の居城で、後に宮中務少輔盛忠・盛祐の居城となる。盛祐没後は、荒木和泉守長右衛門が城主となる。慶長五年吉川広家が、岩国転封とともに廃城となる。多里大ノ坂に亀尾城主の墓と伝わる殿様墓は、高さ三尺で、天正十八年八月七日の銘が刻まれ、中央には絵像がある。

湯河にある湯谷城跡（22）については、平坦地や堀切が造られているが、詳細は不明である。日南町には、多くの山城の存在が確認されているが、新屋周辺には前述の二城のほか、中湯谷集落北の山にある多里所在城跡（24）の三城のみ確認されている。

日南町の山城は山陽と山陰を結ぶ主要街道沿いに築かれ、有事の際の砦となりうる城として重要な役割を担っていたと考えられる。

また印賀には、「正平十二年」の南朝方の銘を刻んだ宝篋印塔がある。この時期は、楠正成、名和長年、新田義貞らは戦死し、後醍醐天皇も崩ぜられていた。南朝方に属していた伯耆の守護山名時氏は、京都・美作方面に出兵していた。その際の兵士たちが、生前に死後の安楽を祈った逆修の塔と言われている。

近世になると日野郡一帯では、「たたら」と呼ばれる山砂鉄を原料とする製鉄が盛んに行われるようになる。日南町でも百ヶ所を超える「たたら」跡が確認され、鍛冶屋や鉄穴谷などの製鉄関連の地名も多くみられる。新屋地区周辺においても、20ケ所弱の「たたら」の痕跡が確認されている。

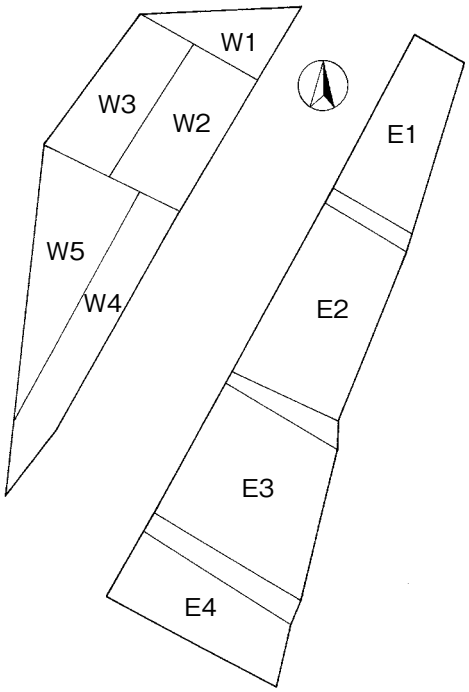
その他には、大倉山で慶長年間に亀井氏が銀山を採鉱した記録が残るほか、萩原から木谷間でも銀を採掘していたようである。大倉山南麓では、鉛・亜鉛が採取されていた。

明治になって、若松鉱山・廣瀬鉱山・日野上鉱山にクロームが発見され操業が始まるが、輸入鉱石に押され、現在は休止している。

第３章　新屋小タイ田遺跡の調査

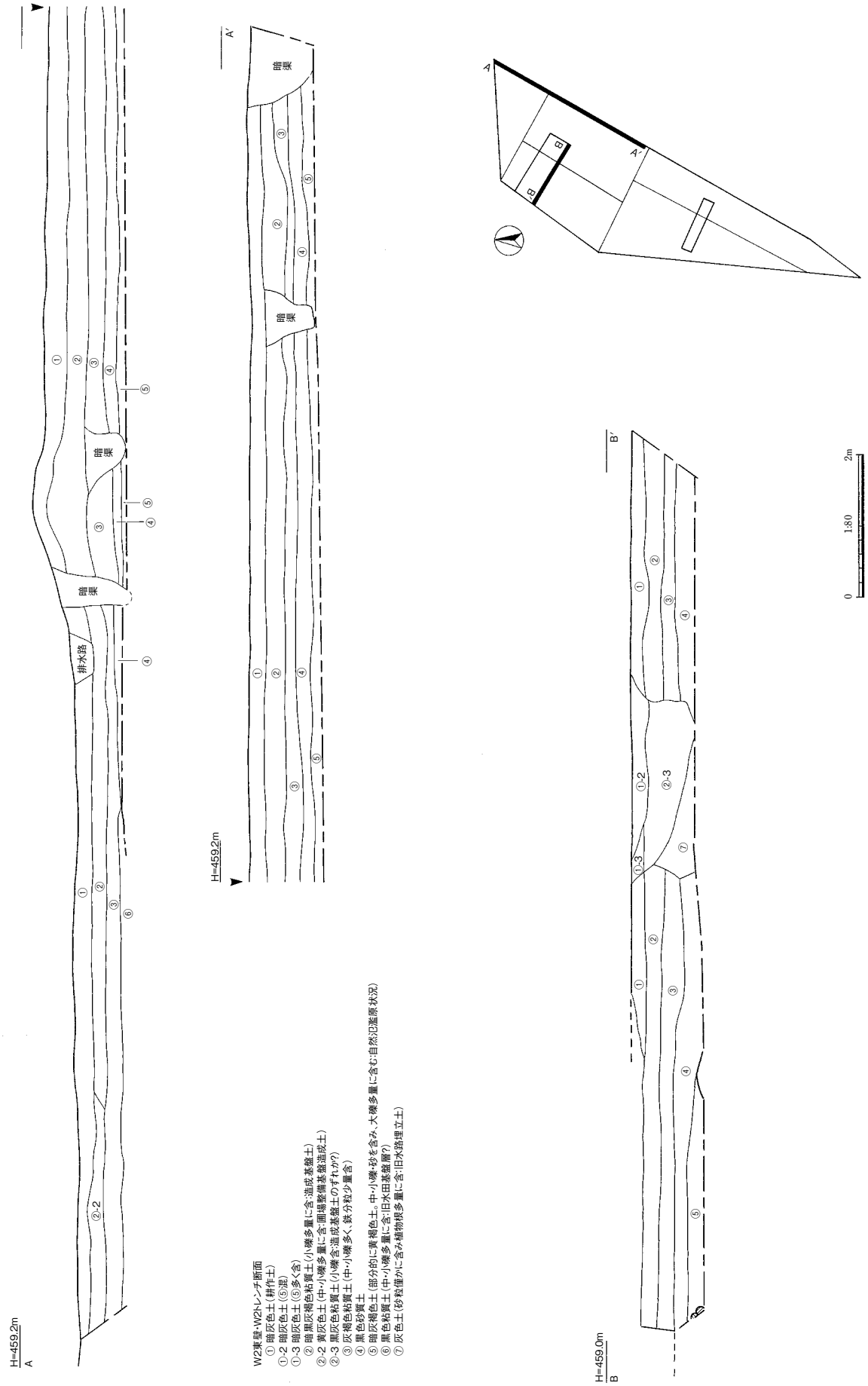
第１節　新屋小タイ田遺跡の調査概要

新屋小タイ田遺跡は、調査地の中央を走る国道183号線によって東西にわかれていたため、国道の西側をW区、東側をＥ区とした。調査地は元々水田であったため、畦畔によっていくつか区画されていた。調査は、この水田の区画を利用して区割をして行った。W区は水田３面あったが、排土を場内処理する必要性と、遺物等の取上げを考慮し、北側の狭い区画をＷ１区とし、中央と南側の水田２面分の区画はさらに東西に区割を行い、中央区画東側をＷ２区、西側をＷ３区、南側区画の東側をＷ４区、西側をＷ５区とした。調査は、Ｗ２区・Ｗ３区と、Ｗ４・Ｗ５区との間に高低差があったため、まずＷ３区に排土置場を設置し、Ｗ１区とＷ２区から調査をはじめた。Ｗ１区・Ｗ２区では遺構は確認されず、遺物もＷ１区では小片がわずかに出土したのみであった。Ｗ２区で出土した遺物については、そのほとんどが小片で、形のわかる遺物も磨滅していたり、時期差がみられることから、流れ込みの遺物と考えられた。この結果を受け、Ｗ３区も同じような状況であると考えられることから、Ｗ３区の調査は、まずトレンチによる確認調査を行うことにした。この結果、遺構は確認されず、出土した遺物も、Ｗ２区同様流れ込みと考えられたため、効率を図るため全面発掘はせず、トレンチでの確認作業のみとした。Ｗ４区・Ｗ５区では、表土を除去した後、周囲に断面観察を兼ねた排水用の溝を掘った。試掘調査の結果、鉄滓層が確認されていたが、表土を除去し、精査した状態で両区の中央部を跨って、鉄分の沈着した面がみられた。このことから、両区の南側から、全体を面下げ行い、鉄分の沈着範囲を確認した後、断面観察しながら掘下げを行った。鉄分沈着部分の調査と並行して、沈着部分南側全面と、沈着部分北側のＷ４区を一層づつ掘下げを行った。鉄分沈着部分の調査が終了した時点で、南側と北側Ｗ４区では、遺構の検出はなく、遺物もほとんど出土しなかった。このため、沈着部分北側Ｗ５区にいついてはＷ３区同様、トレンチを設定し掘下げ確認した上、遺構はないと判断し、全面調査はおこなわなかった。

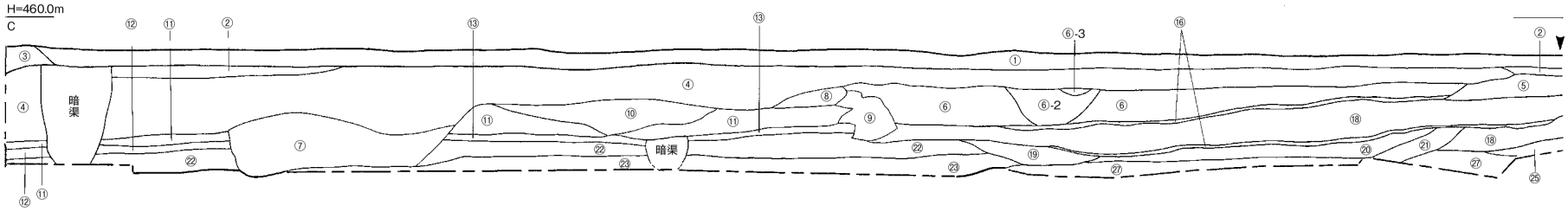


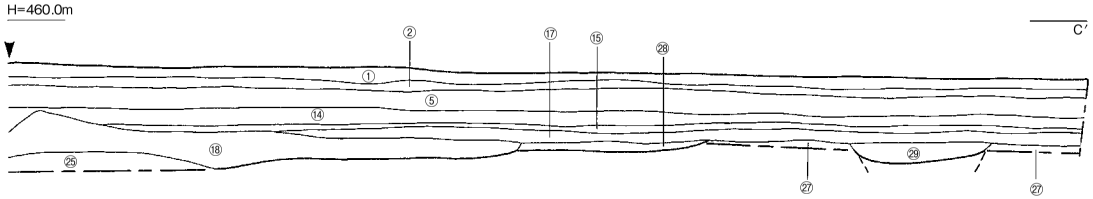
第4図　新屋小タイ田遺跡調査区設定図

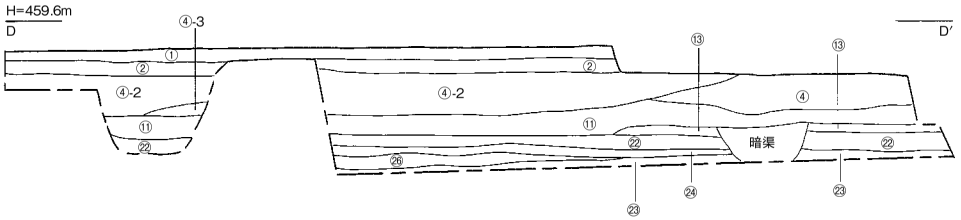
Ｅ区はW区の結果を受け、遺物の出土量が少ないと想定し、遺物の取上げは原則点取りとしたため、細かく区割を行わず、水田1枚毎に北側からＥ１区、Ｅ２区、Ｅ３区、Ｅ４区とした。しかし、それぞれの区画を区切る畦畔に沿って、調査区の東側にある水田への入水パイプが設置され、このパイプを保護するため畦畔を取り除くことはできなかった。そのため、Ｅ４区の南側に設置されていた排土置場までの人力での排土運搬が困難になり、排土は人力によって各区の隅にため、それを重機よって排土置場まで運搬する方法をとった。以上のことから、一区画の調査を最終面まで完了させ、次の区画に移行して調査を行う方法となり、Ｅ１区から順次行うこととした。



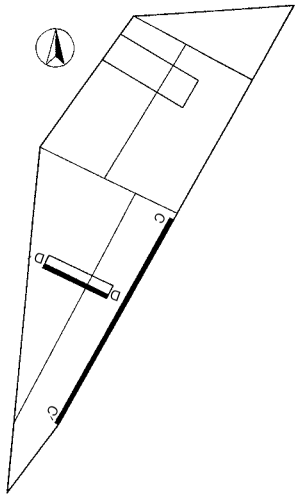
第5図　新屋小タイ田遺跡西区土層断面図１





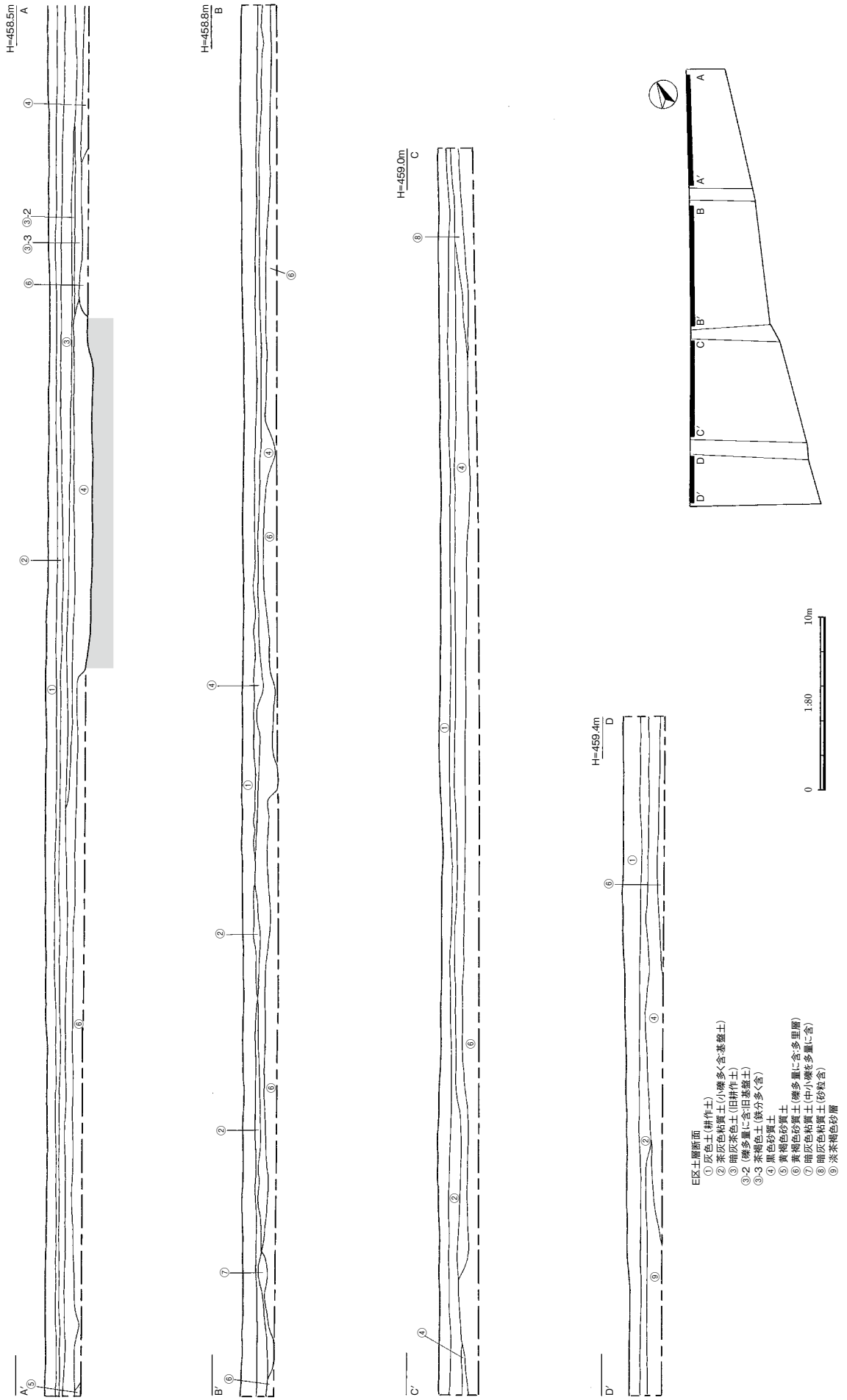


W4区東壁・W4・W5トレンチ土層断面
① 暗灰色土（砂質含:現耕作土）
② 暗茶褐色土（小礫多量に含:現水田基盤土）
③ 暗灰色土（中礫多量に含:大畔造成土）
④ 暗黒褐色土（大・中・小礫多量に含:基盤整備造成土）
④-2 暗灰色粘質土（整備造成土）
④-3 黄褐色粘質ブロック層
⑤ 暗茶灰色土（粘質・鉄分多く含）
⑥ 白灰色礫層（中・小礫密に含）
⑥-2 白灰色礫層（⑥-1より礫やや少ない）
⑥-3 黄色砂層（鉄分含）
⑦ 灰色粘質土（木片・草・中・小礫多量に含:旧水路埋立土
⑧ 暗灰色粘質土（小礫含:埋土基盤整備暗渠）
⑨ 黄色砂質土（水路砂）
⑩ 茶褐色土（中礫・黄色砂・暗灰粘質土含:水路氾濫堆積
⑪ 暗灰色粘質土（旧水田耕作土）
⑫ 暗茶褐色土（砂粒含:旧水田基盤土）
⑬ 灰色土（緑色小礫多量に含む:旧水田基盤土）
⑭ 暗黒褐色土（粘質:旧水田耕作土）
⑮ 灰黄色土（緑色小砂粒含:旧水田基盤土）
⑯ 黄茶色鉄分層（鉄分沈着層）
⑰ 暗灰色砂層（粘質土を含）
⑱ 黒灰色礫混じり土（粘質黒色土に中・小礫含）
⑲ 白灰色砂礫層（微小・小礫埋層）
⑳ 暗灰色砂質土（中・小礫含）
㉑ 黄色砂（小礫含）
㉒ 黒色砂質土
㉓ 灰褐色砂層（大・中・小礫含）
㉔ 白灰色砂粒土（固く締り、小礫含:旧基盤土）
㉕ 灰褐色粘質土
㉖ 黒色砂質土（⑥に近い）
㉗ 灰褐色砂層（多里層上部）
㉘ 黒色砂質土
㉙ 黒色礫層（旧河川の流路か?）



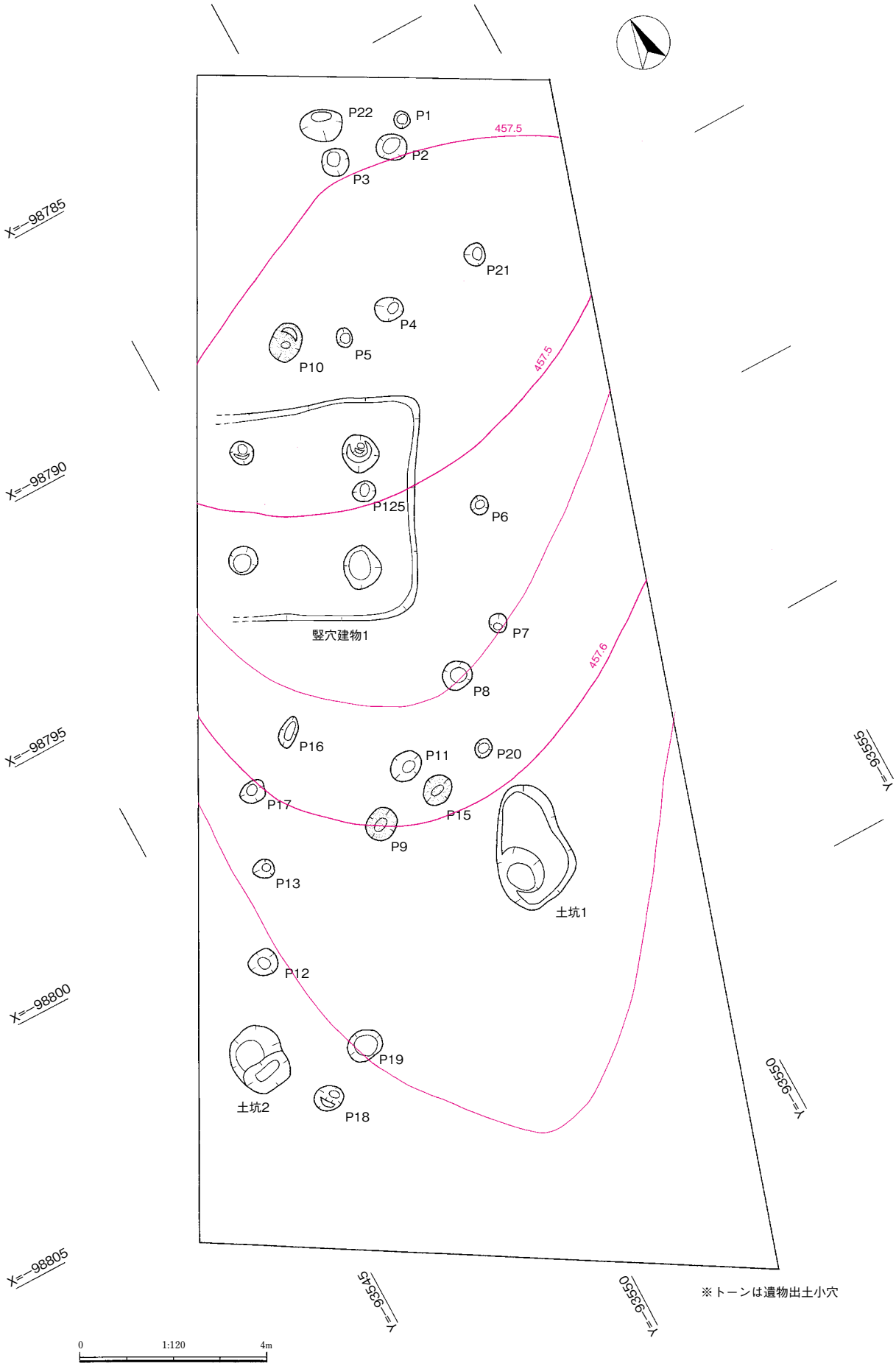
0 1:80 2m

第6図　新屋小タイ田遺跡西区土層断面図2

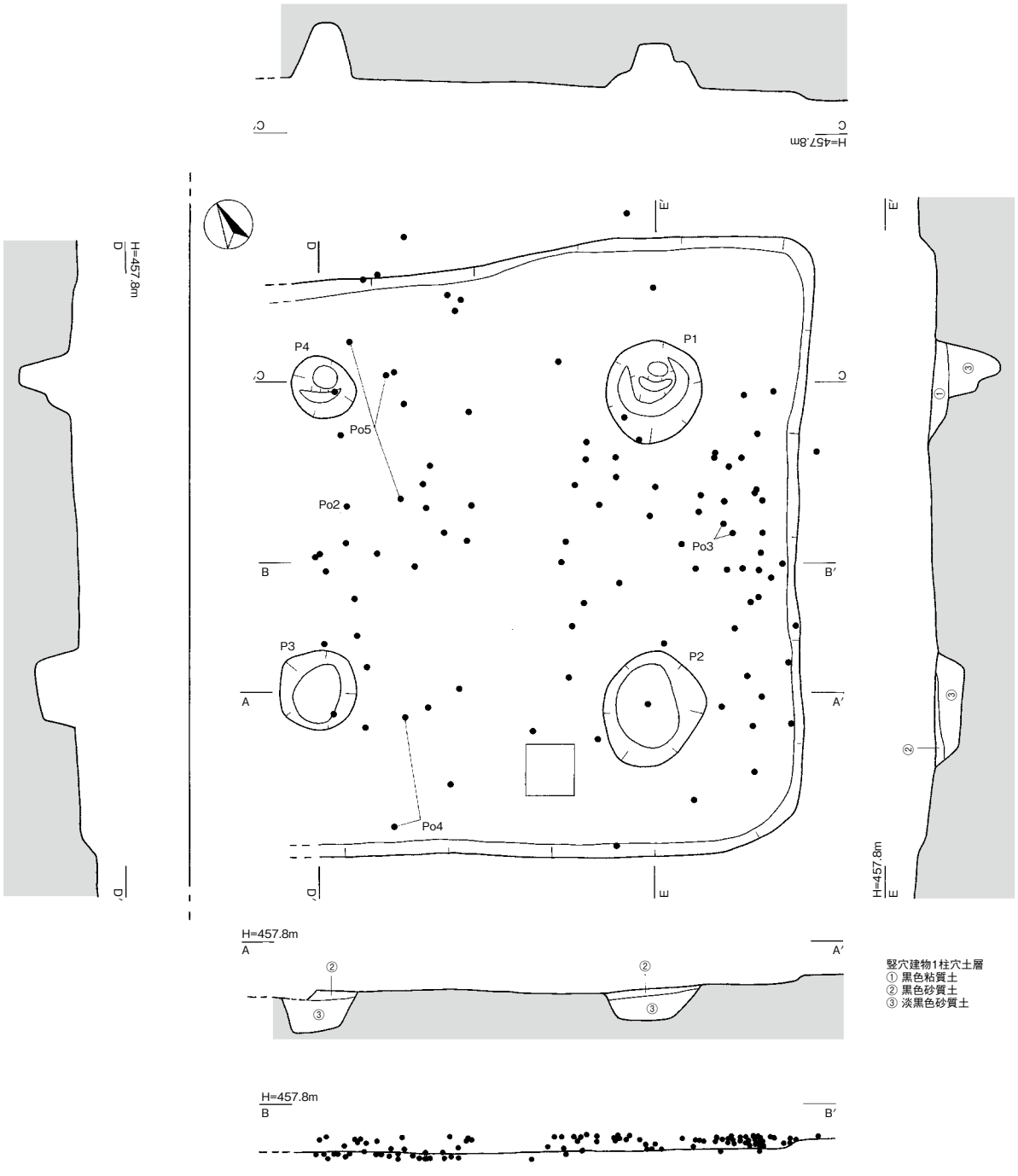


第7図　新屋小タイ田遺跡東区土層断面図

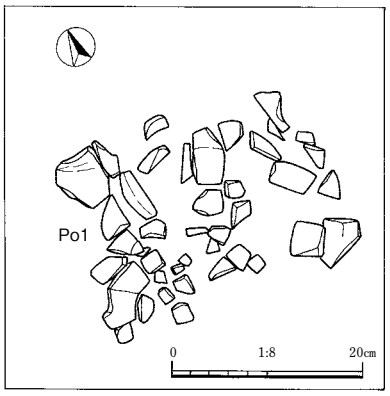
第8図　新屋小タイ田遺跡遺構配置図



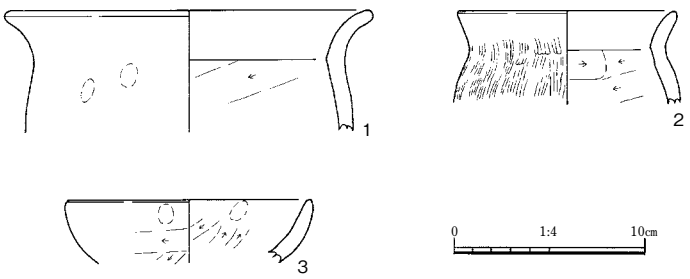
第9図　Ｅ１区最終地形測量図



第10図　竪穴建物１平面および断面図



第11図　竪穴建物１出土遺物拡大図



第12図　竪穴建物１出土遺物実測図１

第２節　新屋小タイ田遺跡の堆積（第５～７図）

新屋小タイ田遺跡W区の堆積は、１区・２区は約１m掘下げたところで多里層といわれる最下層となる。堆積状況は全層がほぼ水平な安定した状態を示し、①・②層は水田耕作土とその基盤土、③層は鉄分を含んだ灰褐色粘質土で小・中礫を含む、④層は黒色砂質土で、③・④層から遺物が出土している。

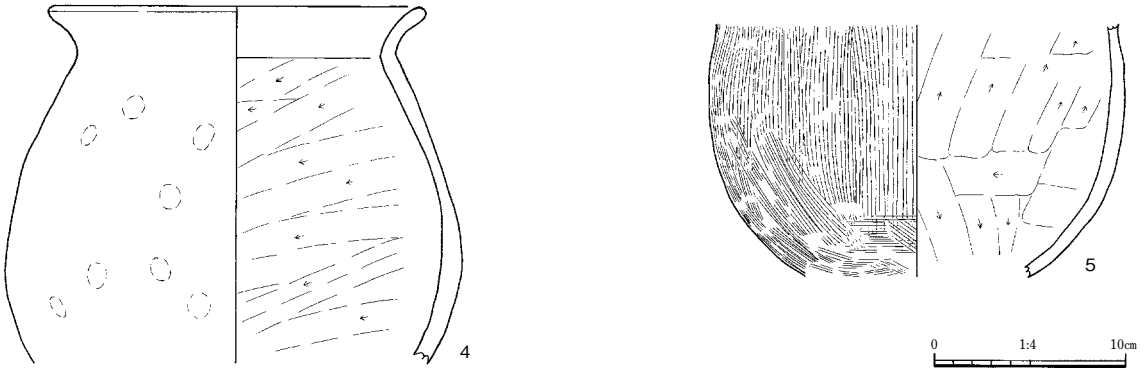
一段高くなった４区・５区では、深いところで約1.6mを掘下げた。Ｃ－Ｃ′を見ると、中央より南側は、現水田耕作土と旧耕作土の層で全層が安定した水平な堆積状況を示すが、中央部から北側にかけては、現水田耕作基盤土の下で、砂層や礫層の混じった水路状遺構に伴う氾濫状況を示す堆積状況がみられる。水路状遺構の北側にあたるＤ－Ｄ′も、Ｃ－Ｃ′中央より南側同様、現水田耕作土と旧耕作土の層で全層が安定した水平な堆積状況を示している。

新屋小タイ田遺跡Ｅ区の堆積は、圃場整備の影響か全区域でほぼ同じような堆積状況を成す。W区と異なり堆積は非常に薄く、約40㎝程度で最下層の多里層と呼ばれる礫を多量に含む層となる。層序も単純で、現水田耕作土、基盤土、黒色砂質土の３層からなり、黒色砂質土面で遺物を検出し、多里層上面で遺構を確認した。

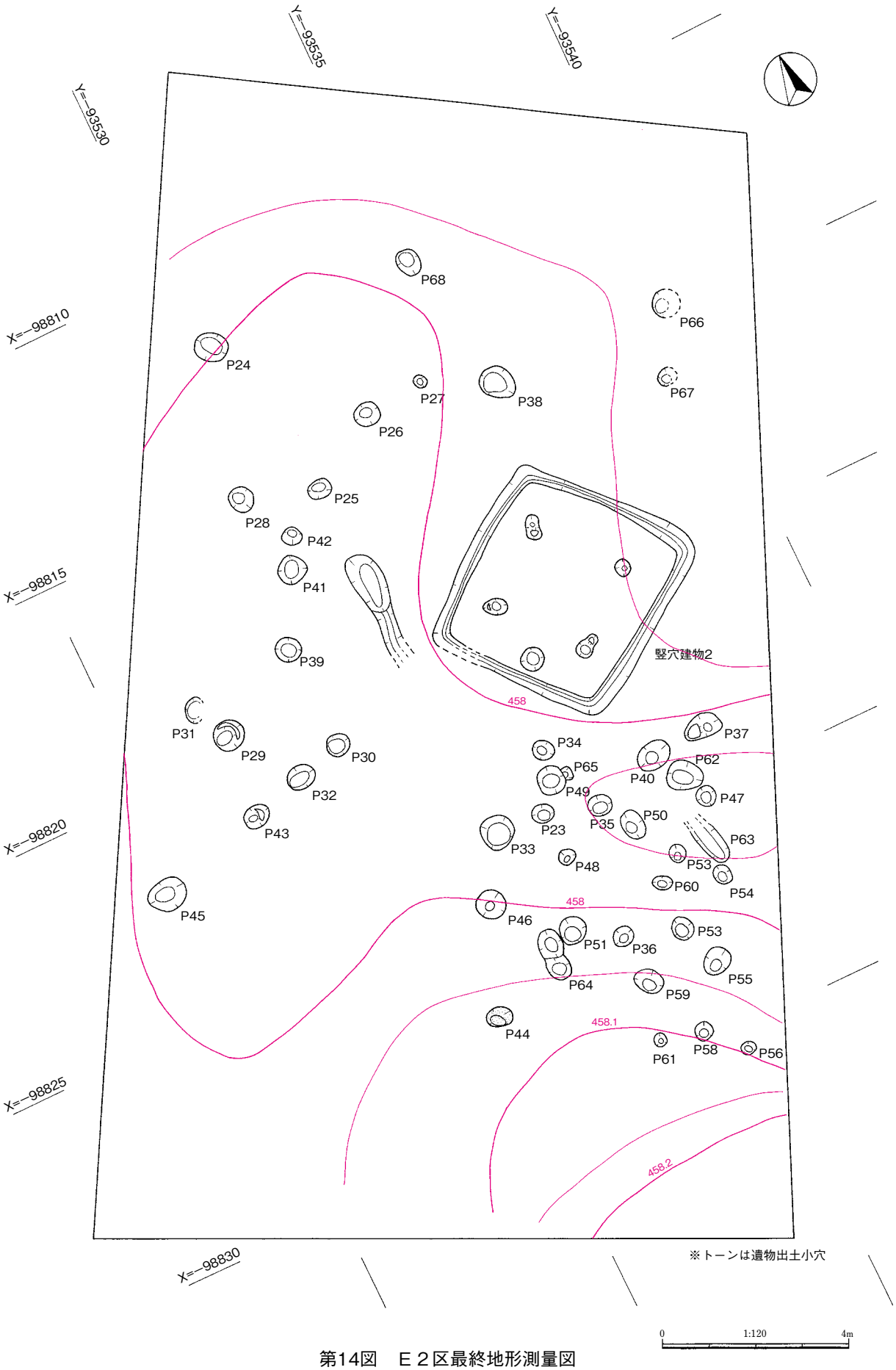
第３節　新屋小タイ田遺跡の遺構について

１　竪穴建物　Ｅ１区・Ｅ２区で１棟ずつ確認した。いずれも水田の耕作等によって、上面はかなり削平を受けていた。

竪穴建物１（第10～13図）　Ｅ１区の中央やや南西部で検出した。西側は現用水路下にかかるため調査が行えなかったが、南北幅4.8m、東西幅4.0mを検出した。主軸はN30°Ｅ方向で、床面の標高は、457.7m、床面積は16.7㎡が残る。検出した三方の壁高は、最大３～６㎝しか残っていなかった。床面には4本の柱穴の痕跡を確認した。柱穴の規模は北東隅より時計回りにＰ１（80㎝×75㎝－50㎝）、Ｐ２（90㎝×80㎝－27㎝）、Ｐ３（60㎝×60㎝－32㎝）、Ｐ４（50㎝×50㎝－42㎝）で、各柱穴間はＰ１－Ｐ２間2.6m、Ｐ２－Ｐ３間2.6m、Ｐ３－Ｐ４間2.4m、Ｐ４－Ｐ１間2.6mである。遺物は床面より、土師器の甕（Po１、Po２、Po４、Po５）、土師器坏（Po３）が出土した。これらの遺物より、本遺構の時期は７世紀前半と考えられる。



第13図　竪穴建物１出土遺物実測図２



第14図　Ｅ２区最終地形測量図

竪穴建物２（第15～21図）　３Ｅ２区の中央やや南東部で検出した。北東部側は暗渠排水路による攪乱のため一部壁面は残っていなかったが、床面で検出した溝から、幅4.5mのほぼ正方形を呈すると思われる。主軸はN40°Ｗ方向で、床面の標高457.4m、床面積は14.6㎡である。検出した壁高は最大約30㎝が残る。床面壁際に最大幅20㎝、最大深さ５㎝の溝が巡り、4本の柱穴の痕跡を確認した。柱穴の規模は北隅より時計回りにＰ１（55㎝×30㎝－30㎝）、Ｐ２（40㎝×35㎝－30㎝）、Ｐ３（56㎝×38㎝－30㎝）、Ｐ４（54㎝×35㎝－43㎝）で、各柱穴間はＰ１－Ｐ２間2.2m、Ｐ２－Ｐ３間2.0m、Ｐ３－Ｐ４間2.15m、Ｐ４－Ｐ１間2.0mである。また、南西壁側中央部床面で55㎝×48㎝－22㎝のＰ５を検出したが、用途は不明である。床面には遺物のほか、炭化材が数点検出された。床面にはほとんど焼けたような痕跡は見られないが、火災にあって建物が崩れたものと考えられる。

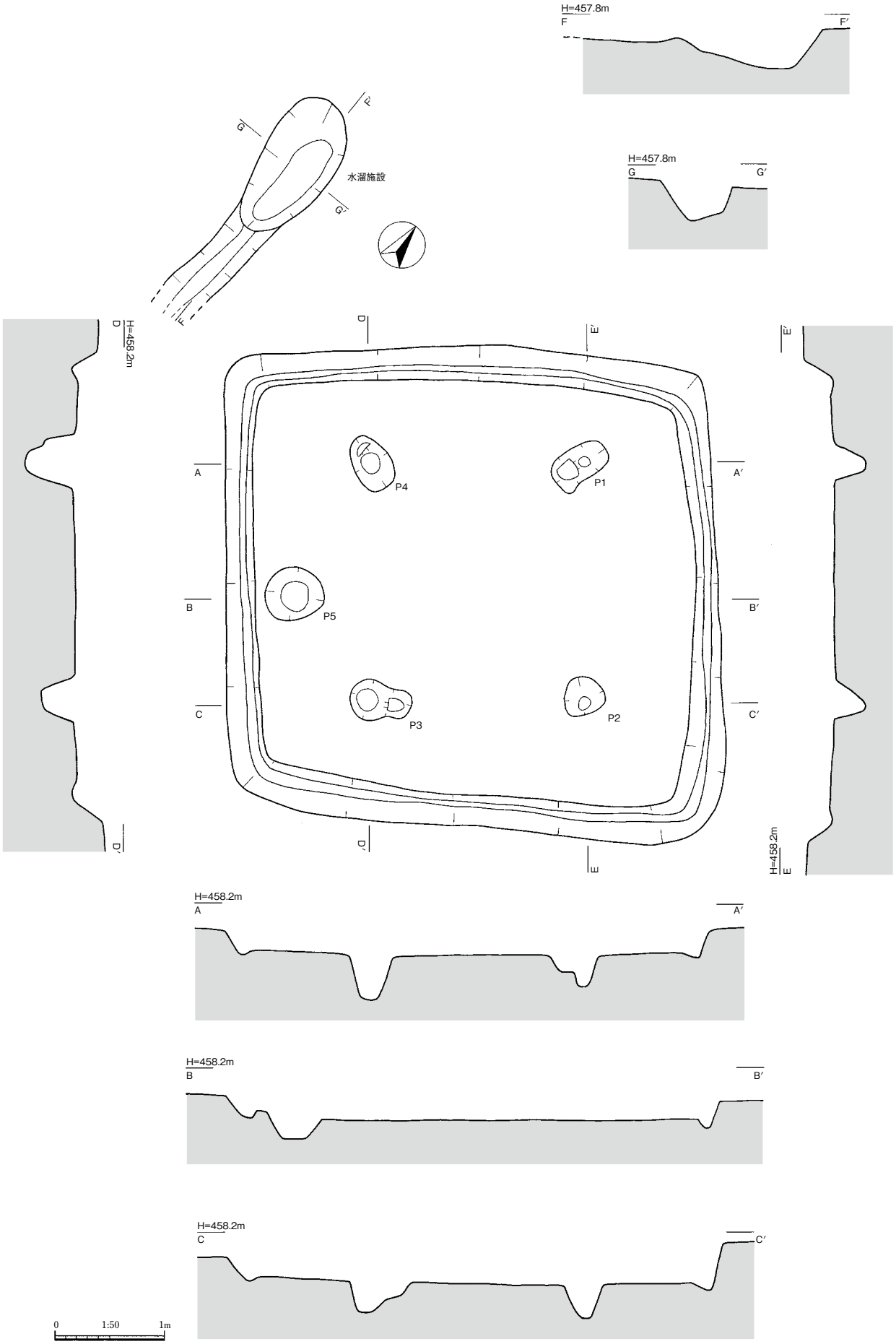
本建物の西側において、長辺1.35m、短辺0.7m、深さ34㎝の楕円を呈する土坑状の落込みを検出した。この土坑状の落込みから、幅38㎝、深さ6.6㎝の溝が南方向に向かって延びていたが、南端は試掘調査部分にかかっていたが、痕跡がなかったことから自然消滅していたと考えられる。周囲に竪穴建物２以外に、遺構が確認されなかったため、本建物に伴う水溜施設ではないかと考えられる。

遺物は、床面から土師器甕（Po６～Po16）、土師器坏（Po17）、土師器甑の把手（Po18）、須恵器坏蓋（Po19）、打製石斧Ｓ１が出土している。これらの遺物より、本遺構の時期は、竪穴建物１同様、７世紀前半と考えられる。

第４表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡竪穴建物）

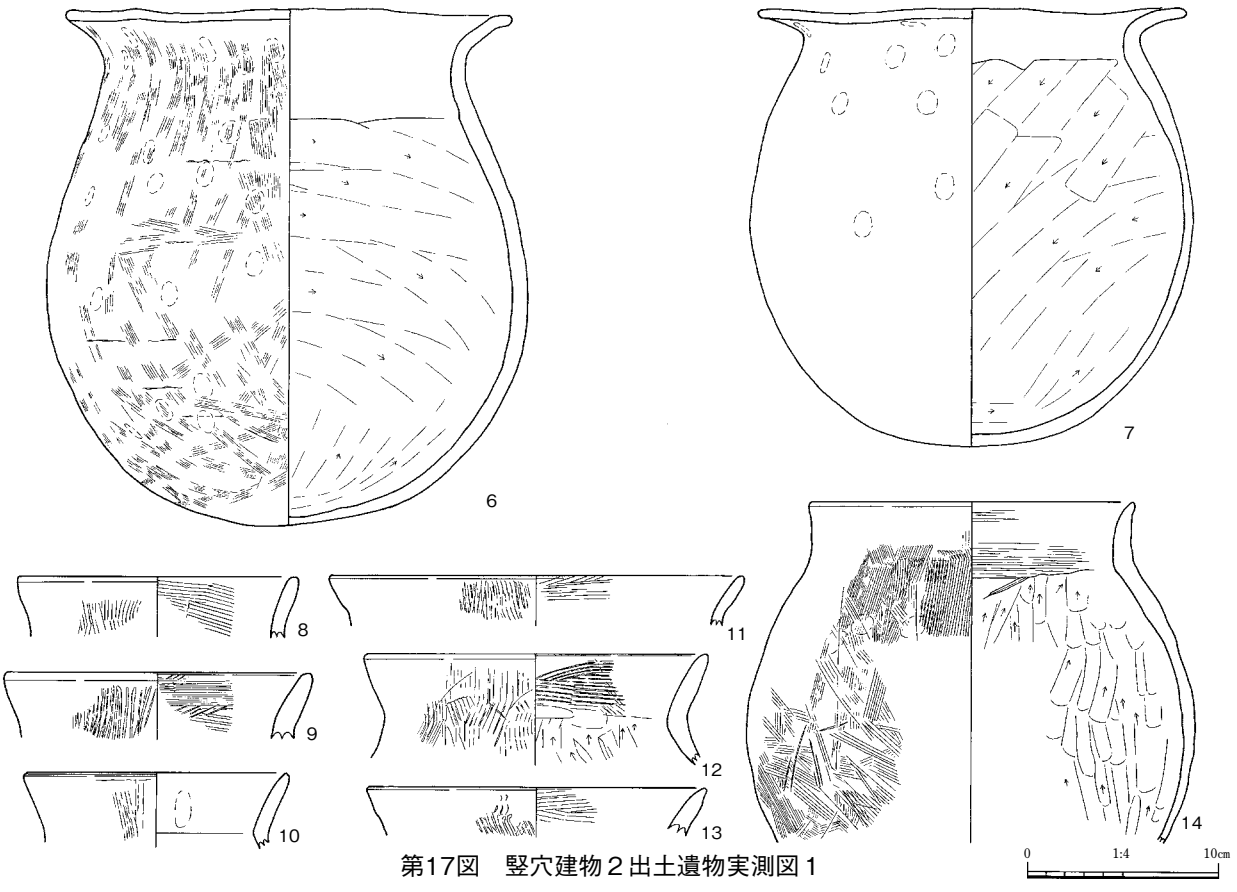
遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 口径	残存高	胴径	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	第12図	甕	土師器	竪穴建物1	※ 19.2	※ 6.4		やや不良	橙灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ケズリ 内面：ケズリ	
2	第12図	壺	土師器	竪穴建物1	※ 11.4	※ 4.9		良	暗橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ケズリ	
3	第12図	坏	土師器	竪穴建物1	※ 12.5	※ 3.3		良	橙灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ケズリ 内面：ナデ、ケズリ	
4	第13図	甕	土師器	竪穴建物1	※ 19.5	※ 18.7		良	灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
5	第13図	甕	土師器	竪穴建物1	-	※ 13.2		良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ハケ 内面：ケズリ	外面煤付着 内面黒斑
6	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	23.1	27.3	25.4	良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ後ナデ 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
7	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 22.4	23.2	※ 23.4	良	灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
8	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 14.6	※ 3.2		良	橙色	密　石英、白色砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	
9	第17図	壺	土師器	竪穴建物2	※ 16.0	※ 3.5		良	浅黄色 灰色	密　１㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
10	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 13.6	※ 4.1		良	橙色	密　石英、雲母含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	外面煤付着
11	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 21.8	※ 2.7		良	橙色	密　白砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ	
12	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 18.0	※ 5.9		良	浅黄橙色 灰黄褐色	密　石英、白色砂粒含	外面：ハケ 内面：ハケ、ケズリ	
13	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 17.8	※ 2.6		良	黄橙色	密　石英、白色砂粒含	外面：ハケ 内面：ハケ	
14	第17図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 17.0	※ 18.0	※ 23.7	良	黄橙色	密　石英、赤色粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
15	第21図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 27.4	※ 9.7		良	橙色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	
16	第21図	甕	土師器	竪穴建物2	※ 17.6	※ 9.5	※ 21.0	良	黄橙色	密　2㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	
17	第21図	坏	土師器	竪穴建物2	※ 8.5	※ 2.7		良	橙色	密　白砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
18	第21図	甑	土師器	竪穴建物2		※ 4.5		良	橙色	密　１㎜大砂粒含	外面：指頭調整 内面：ケズリ	把手
19	第21図	坏蓋	須恵器	竪穴建物2	※ 13.0	※ 2.9		良好	灰色	密　白砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 長さ	幅	厚さ	重さ（g）	備考
S1	第21図	石斧	石製品	竪穴建物2	11.5	9.5	1.4	172.1	

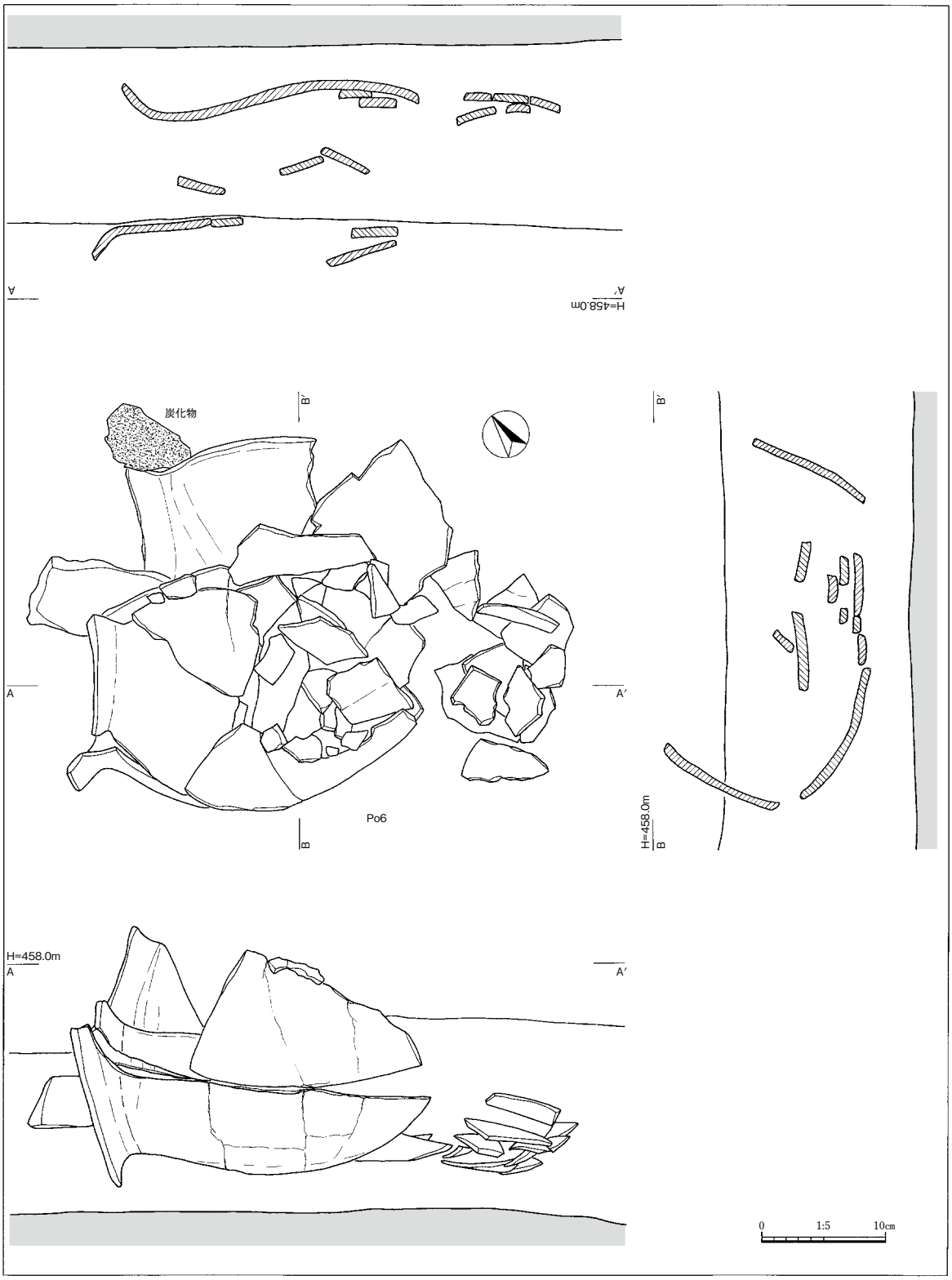


第15図　竪穴建物２平面および断面図

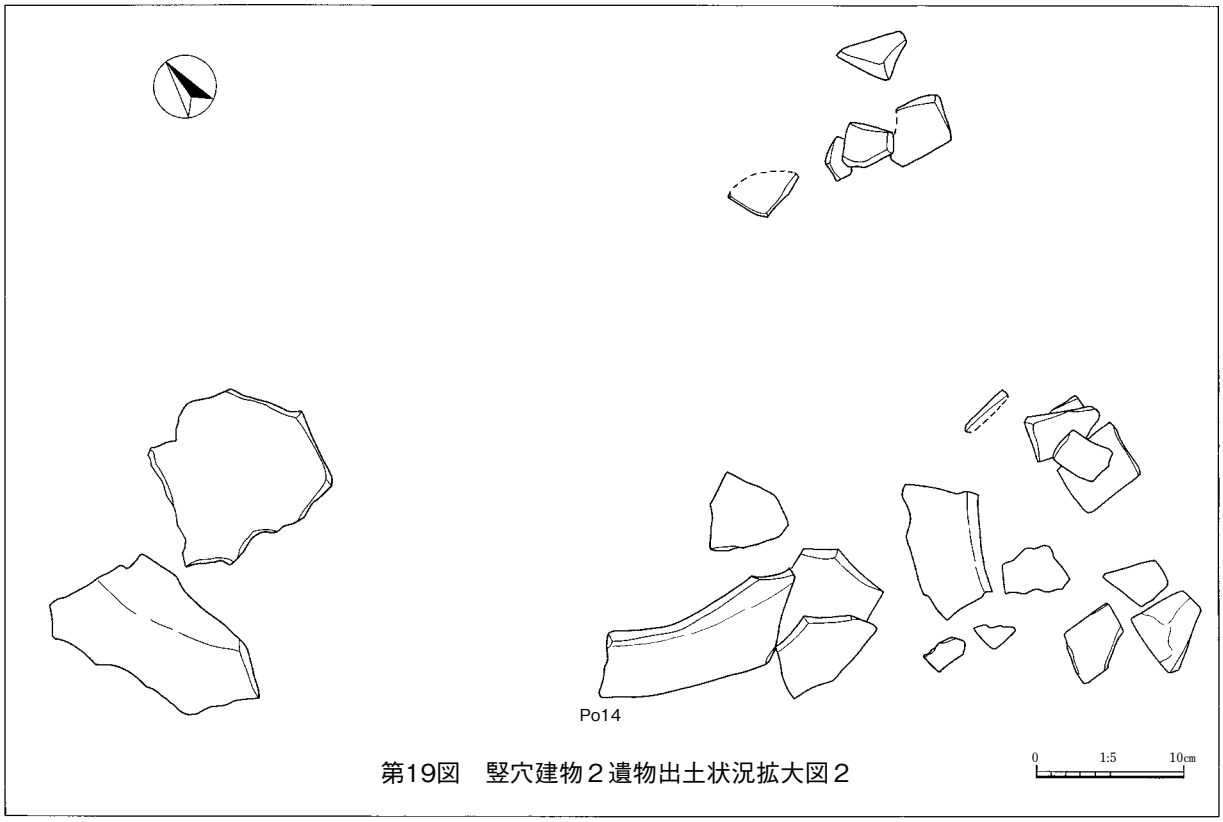
第16図　竪穴建物２遺物出土状況図



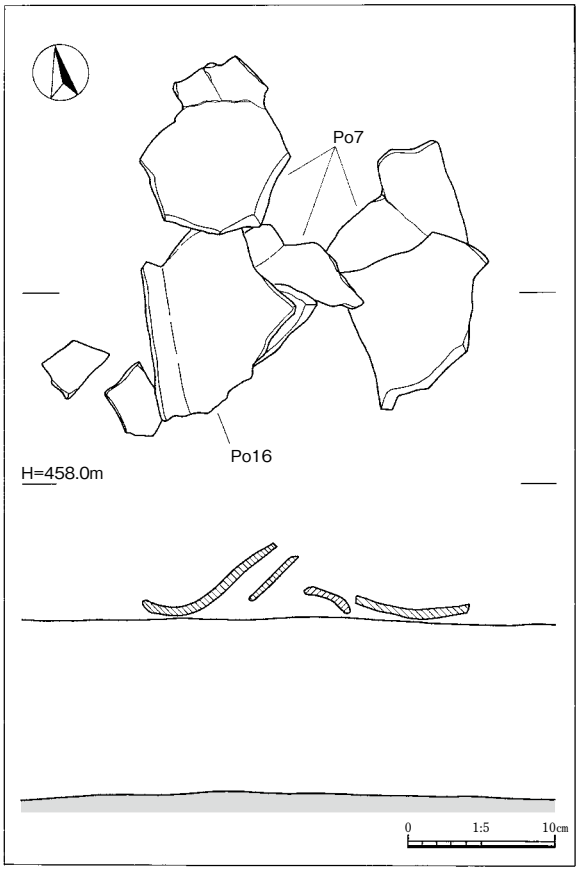
第17図　竪穴建物２出土遺物実測図１



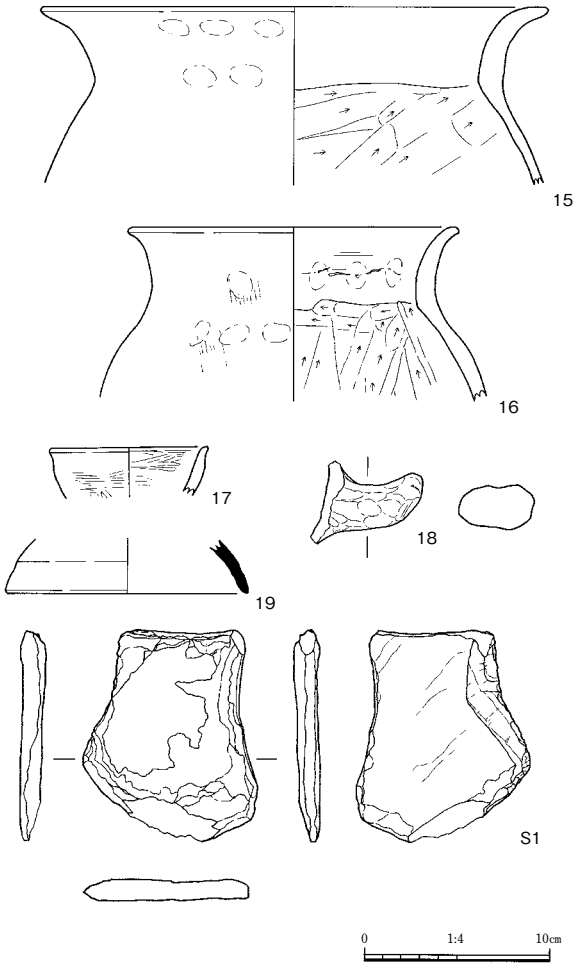
第18図　竪穴建物２遺物出土状況拡大図１



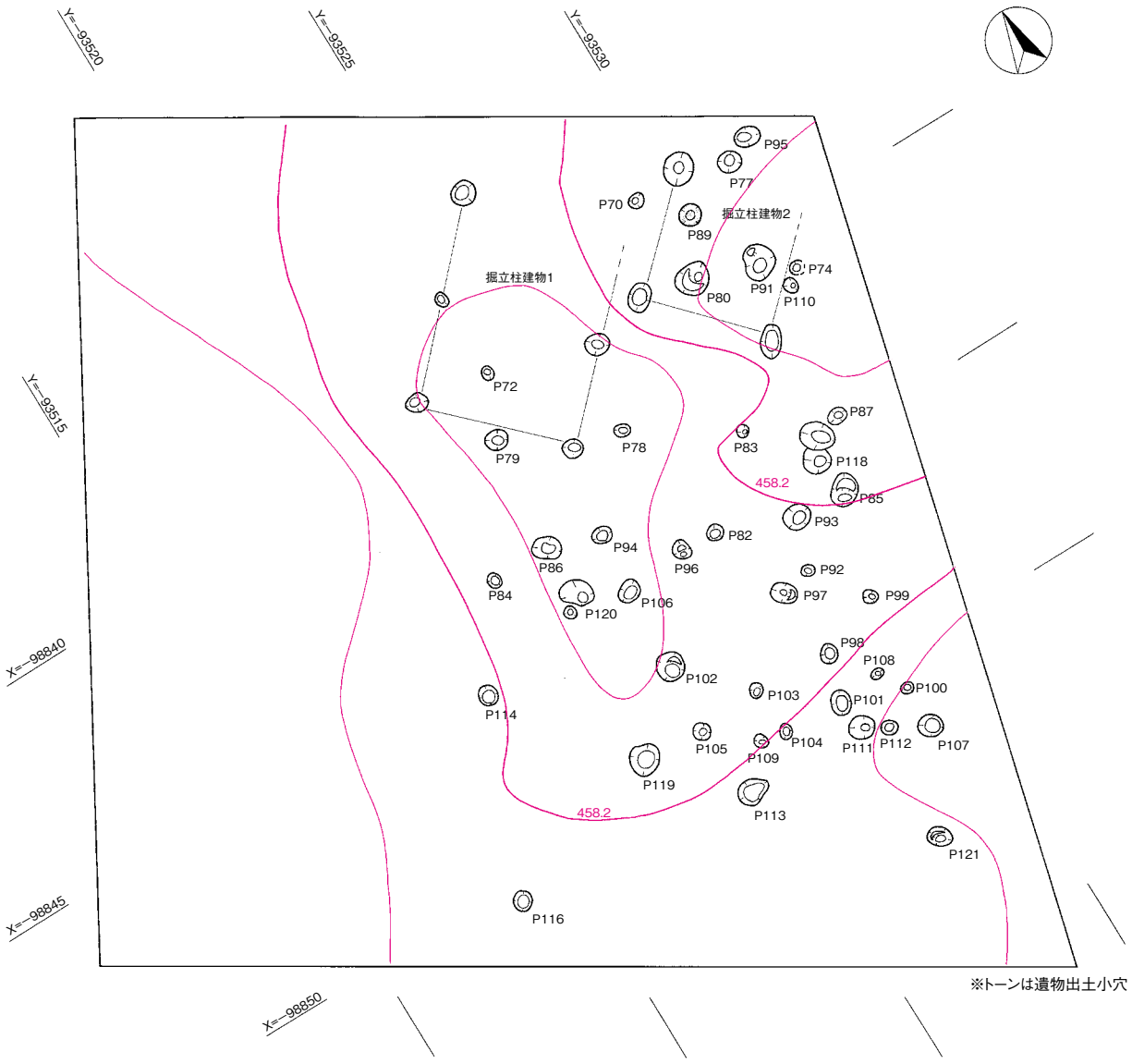
第19図　竪穴建物２遺物出土状況拡大図２



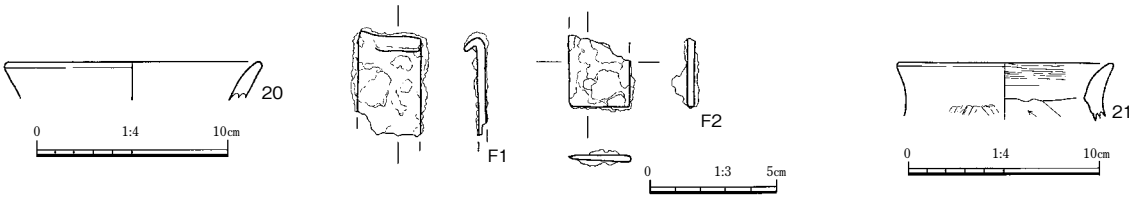
第20図　竪穴建物２遺物出土状況拡大図３



第21図　竪穴建物２出土遺物実測図２



第22図　Ｅ３区最終地形測量図

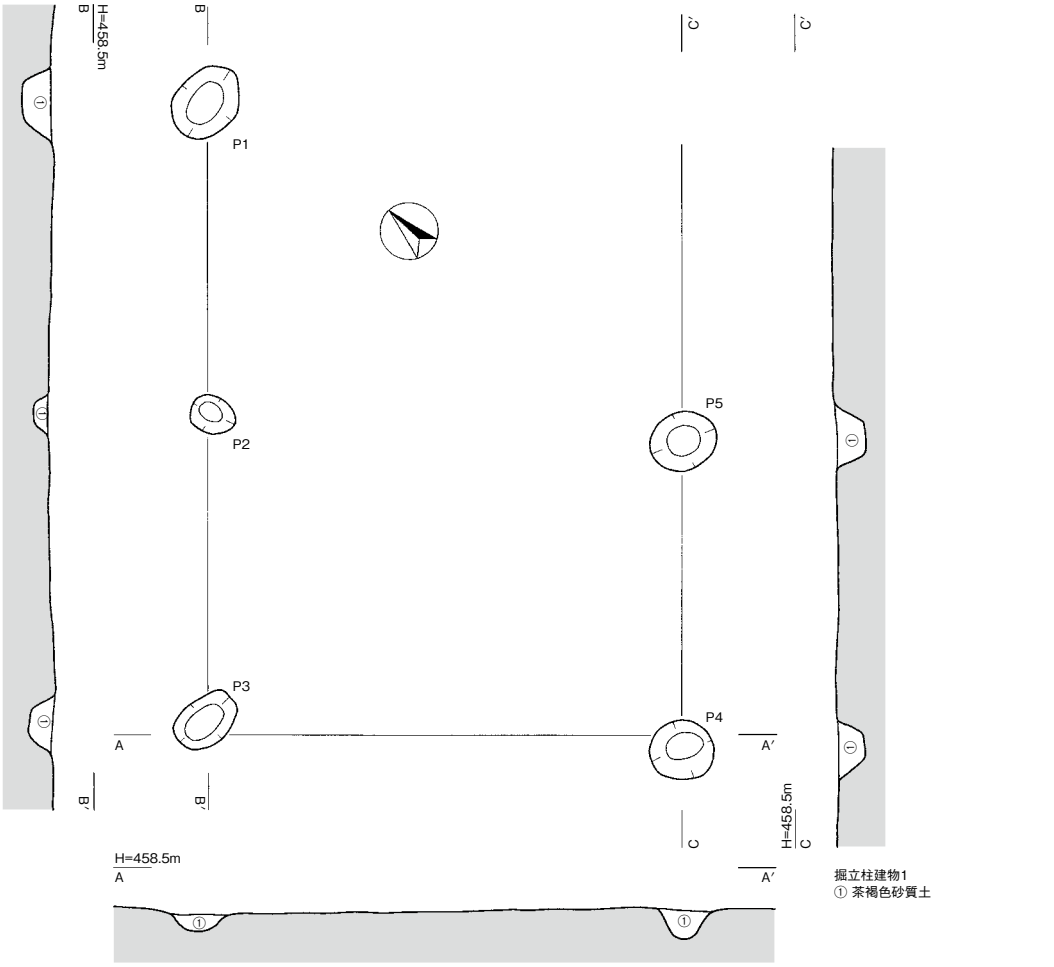


第23図　柱穴状落込み出土遺物実測図

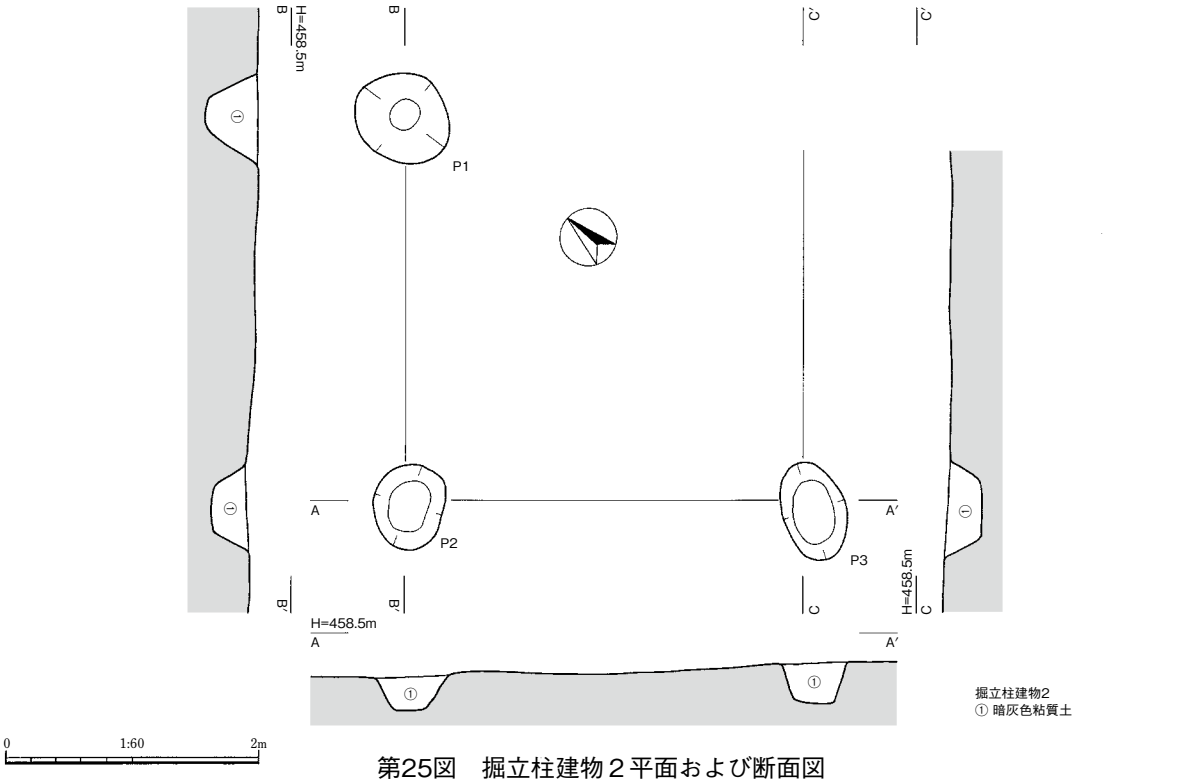
第５表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡柱穴状小穴）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 口径		残存高		焼成	色調	胎土	調整	備考
20	第23図	甕	土師器	P44	※	13.2	※	2.1	良	黄橙色	密　白砂粒含	外面：ハケ状工具によるナデ 内面：ハケ状工具によるナデ	
21	第23図	甕	土師器	P89	※	11.3	※	3.1	良	橙色	密　石英、雲母、白色砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ミガキ、ケズリ	

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 長さ		幅	厚さ	重さ（g）
F1	第23図	板状製品	金属製品	P44	※	4.3	3.1	1.0	12.6
F2	第23図	板状製品	金属製品	P44	※	3.0	2.7	1.1	9.8



第24図　掘立柱建物１平面および断面図



第25図　掘立柱建物２平面および断面図

２　掘立柱建物　Ｅ１区からＥ４区において、柱穴状の小穴を大小合わせて計122穴を検出した。中には深さが１m近くあるものもあったが、この内建物になるものは２棟で、いずれもＥ３区において確認された。

掘立柱建物１（第24図）　Ｅ３区北側中央部で検出した。暗渠排水路によって、柱穴１穴が消滅したと考えられる、２間×１間の掘立柱建物である。規模は、長辺4.9m×短辺3.75m、主軸はN48°Ｅ方向である。柱穴の規模は北西隅より反時計回りにＰ１（65㎝×48㎝－23㎝）、Ｐ２（36㎝×28㎝－10㎝）、Ｐ３（55㎝×26㎝－12㎝）、Ｐ４（50㎝×50㎝－23㎝）、Ｐ５（55㎝×45㎝－22㎝）、各柱穴間は、Ｐ１－Ｐ２間2.44m、Ｐ２－Ｐ３間2.46m、Ｐ３－Ｐ４間3.75m、Ｐ４－Ｐ５間2.4mである。遺物は、掘立柱建物１に伴う遺物と特定できるものはない。

掘立柱建物２（第25図）　Ｅ３区北東隅、掘立柱建物１の北東部に並行するように検出した。２間×１間或いは１間×１間の掘立柱建物と考えられるが、北東隅の調査が行えなかったため、全容は不明である。規模は、長辺3.1m×短辺3.1m、主軸はN48°Ｅ方向である。柱穴の規模は北西隅より反時計回りにＰ１（80㎝×70㎝－41㎝）、Ｐ２（65㎝×56㎝－25㎝）、Ｐ３（80㎝×50㎝－34㎝）、各柱穴間は、Ｐ１－Ｐ２間3.1m、Ｐ２－Ｐ３間3.15mである。遺物は、掘立柱建物２に伴う遺物と特定できるものはない。

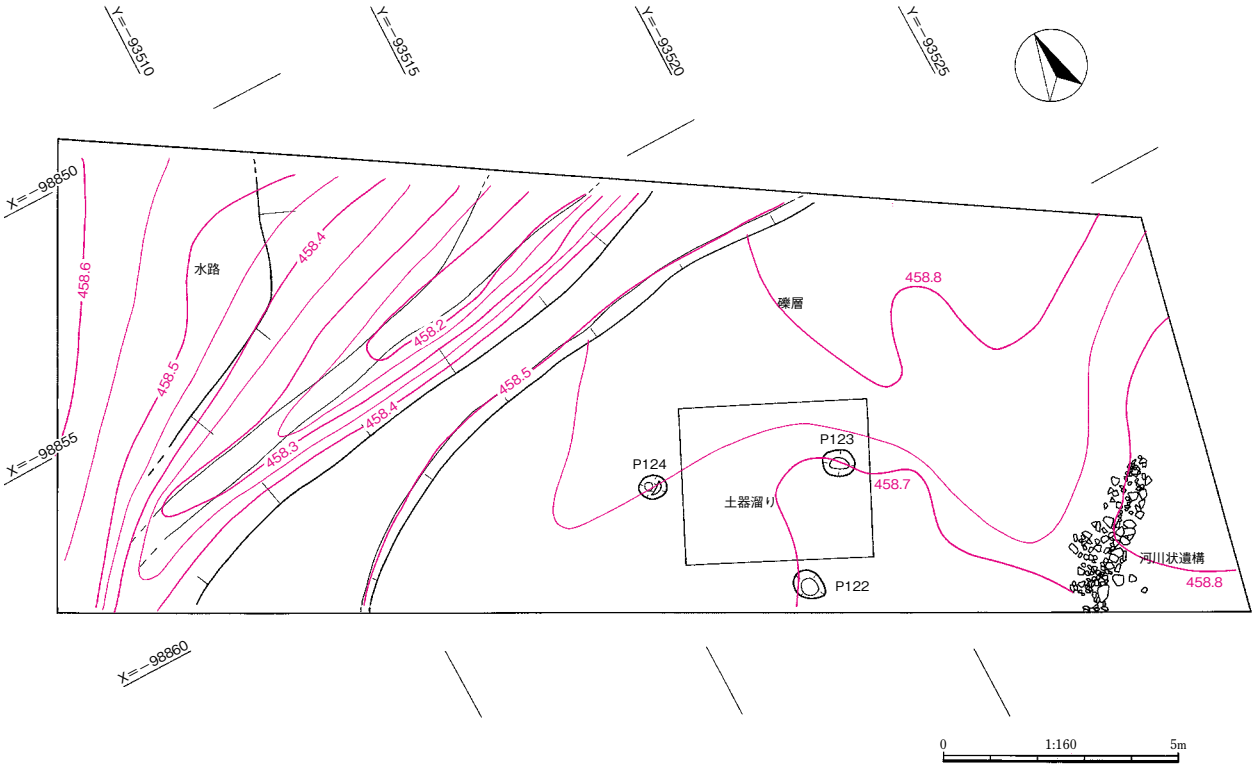
柱穴状小穴遺物（第23図）　いずれの掘立柱建物の柱穴から遺物は出土していないが、Ｅ１区のＰ９、P10、P15からは土師器の小片、Ｅ2区Ｐ44から土師器甕片（Po20）と板状鉄製品（Ｆ１･Ｆ２）、Ｅ3区Ｐ89から土師器甕（Po21）が出土しており、これらの掘立柱建物は、竪穴建物と同じ７世紀前半頃と考えられる。

３　土器溜り（第27～29図）　Ｅ４区南側中央部で検出した。約3.5ｍ×3.0ｍの範囲に集中して土器が出土した。遺構として掘り込まれたような痕跡はない。土器の出土状況を見ると、一個体がその場で潰れたような状況が見て取れる。また、土器溜り周囲で柱穴状の穴を検出したが、検出された穴の数は３穴で、建物が建つ配列にはならない。今回の調査では、この柱穴状の落込み以外には、遺構の痕跡は認められなかったため、土器溜りが遺構に伴うものとは考え難い。Ｅ４区では、日南町教育委員会による試掘調査が行われており、土師器の甕が３点押し潰された状態で出土している。試掘調査の位置は、土器溜りからは西へ約10ｍの位置にあたり、時期的には同時期の遺物であることから何らかの関連が考えられる。しかし同じＥ４区内ではあるが、両者間に距離があること、両者の間にはほとんど遺物の出土がなく、それぞれの関連については不明である。しかしながら、いずれも出土した遺物の周囲で、遺構などが確認されていないこと、遺物が一定の範囲に集中し、一個体が押し潰された状態で出土しているものが幾つか見られることから、圃場整備等の流れ込みではなく、意図的に廃棄された可能性が高いと考えられる。

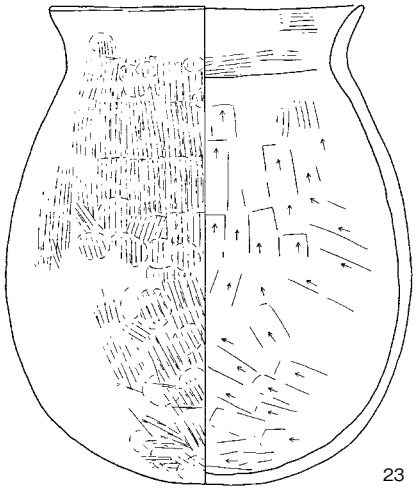
本遺構からは、縄文土器（Po22）、土師器甕（Po23～Po29）、土師器甑（Po30）、土師器壺（Po31）、土師器椀（Po32）、須恵器坏蓋（Po33）、板状鉄製品（Ｆ３）が出土している。時期的には、７世紀の中葉から後葉と考えられ、今回確認した竪穴建物よりは新しい時期のものと考えられる。

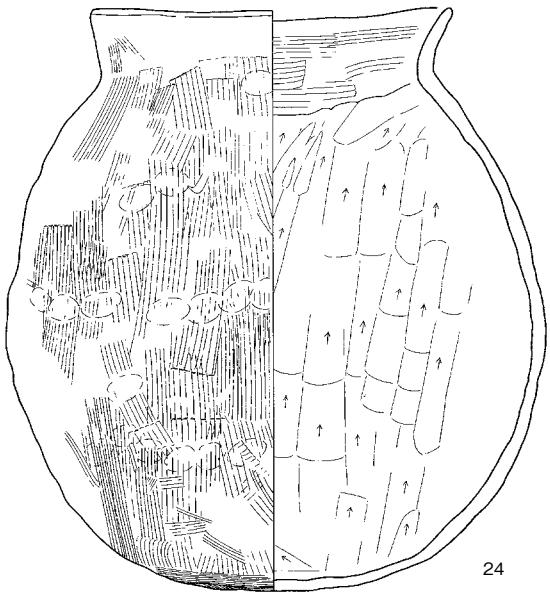
４　土坑　Ｅ１区で２基の土坑を検出した。

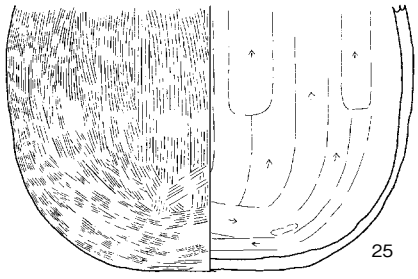
土坑１（第30図）　平面形は、不整形な楕円形を呈し、すり鉢状に掘り込まれた土坑である。西側

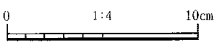


第26図　Ｅ４区最終地形測量図

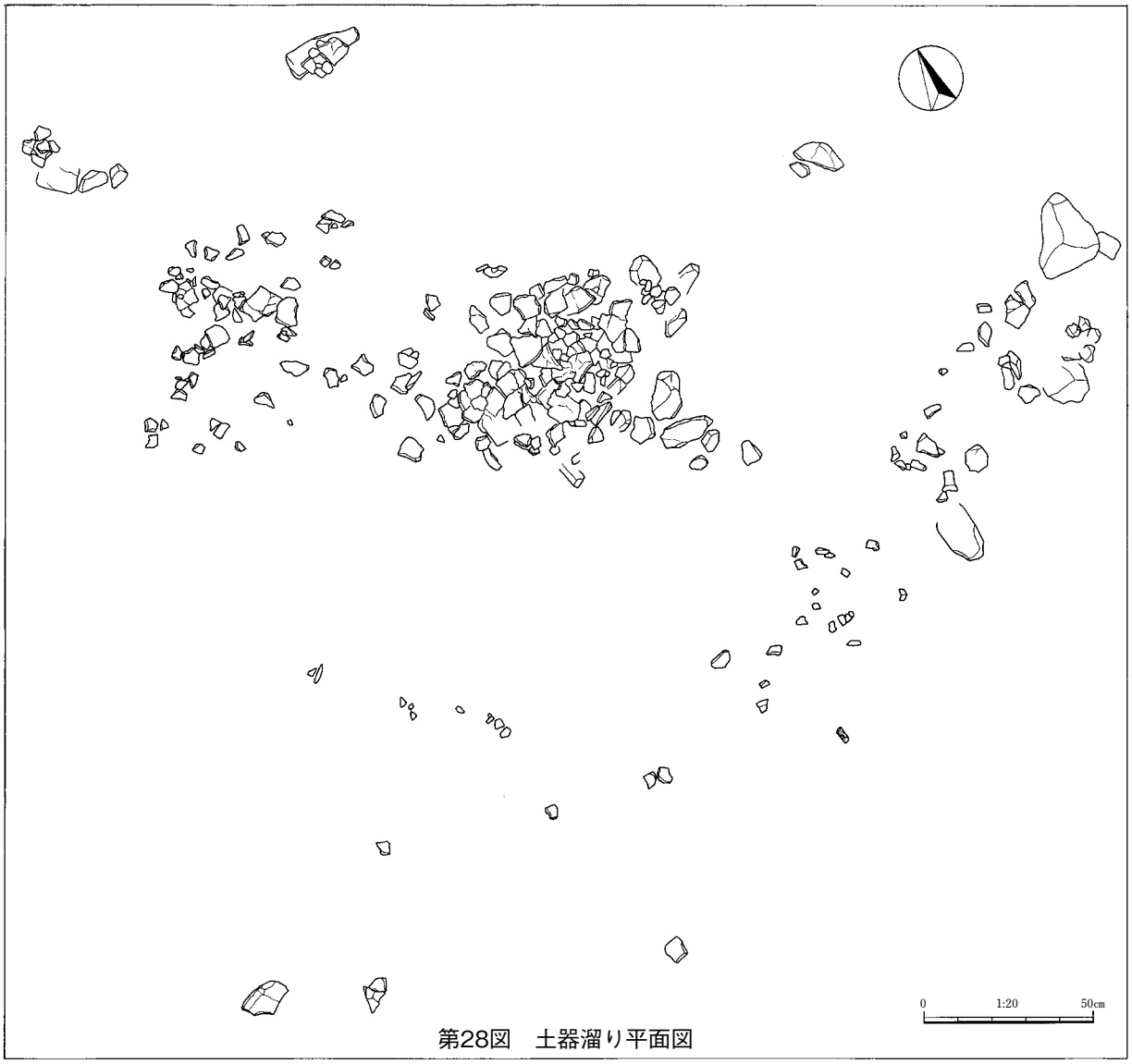




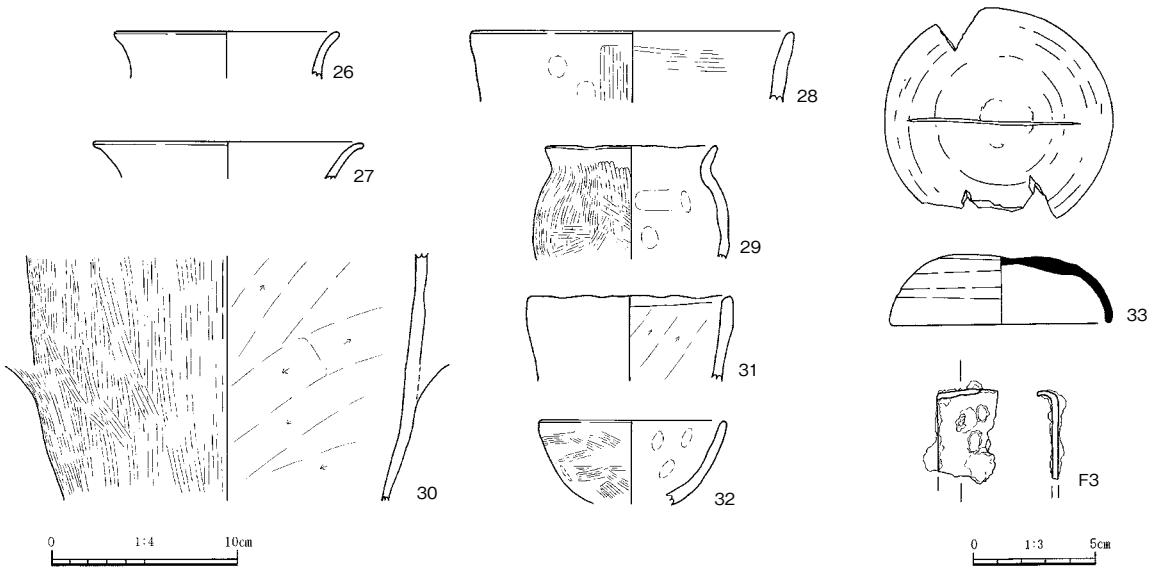




第27図　土器溜り出土遺物実測図１



第28図　土器溜り平面図

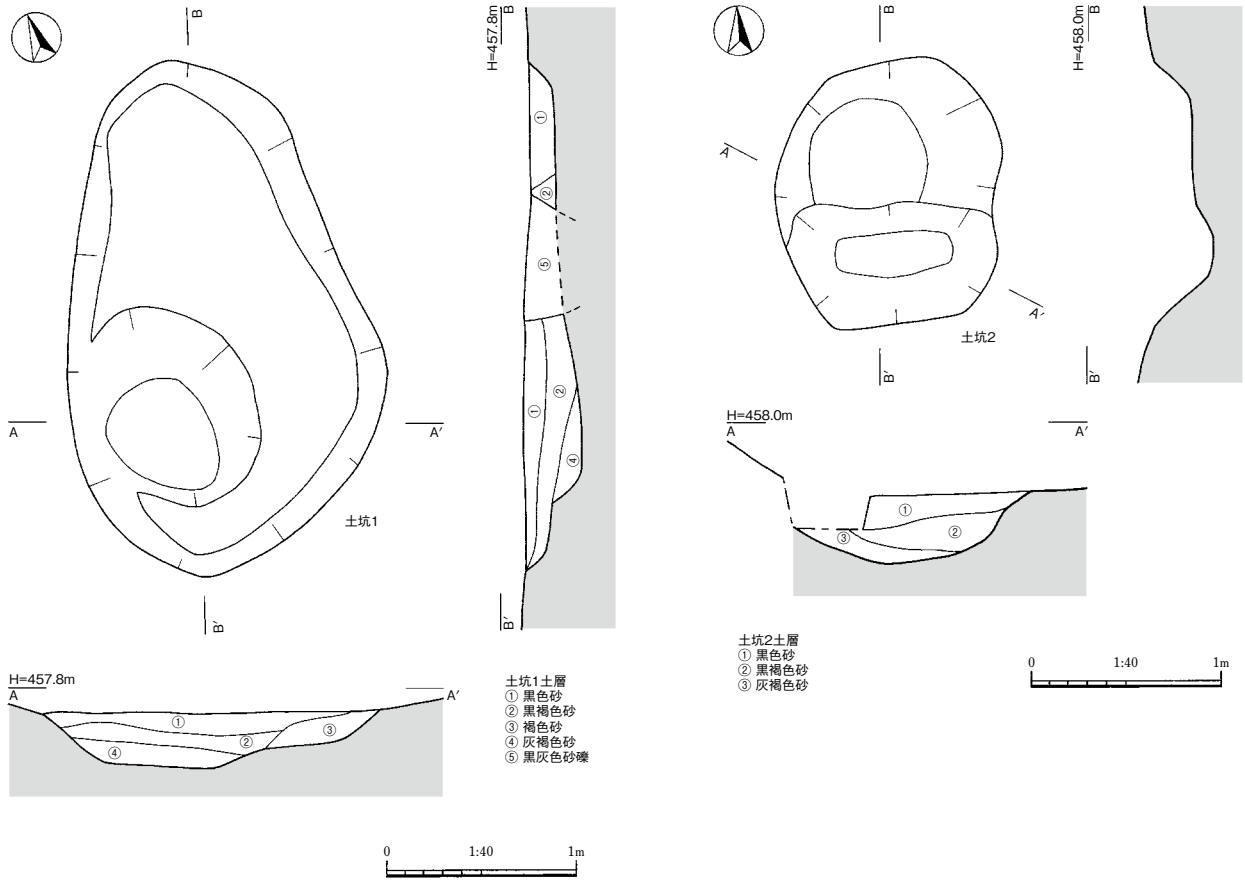


第29図　土器溜り出土遺物実測図２

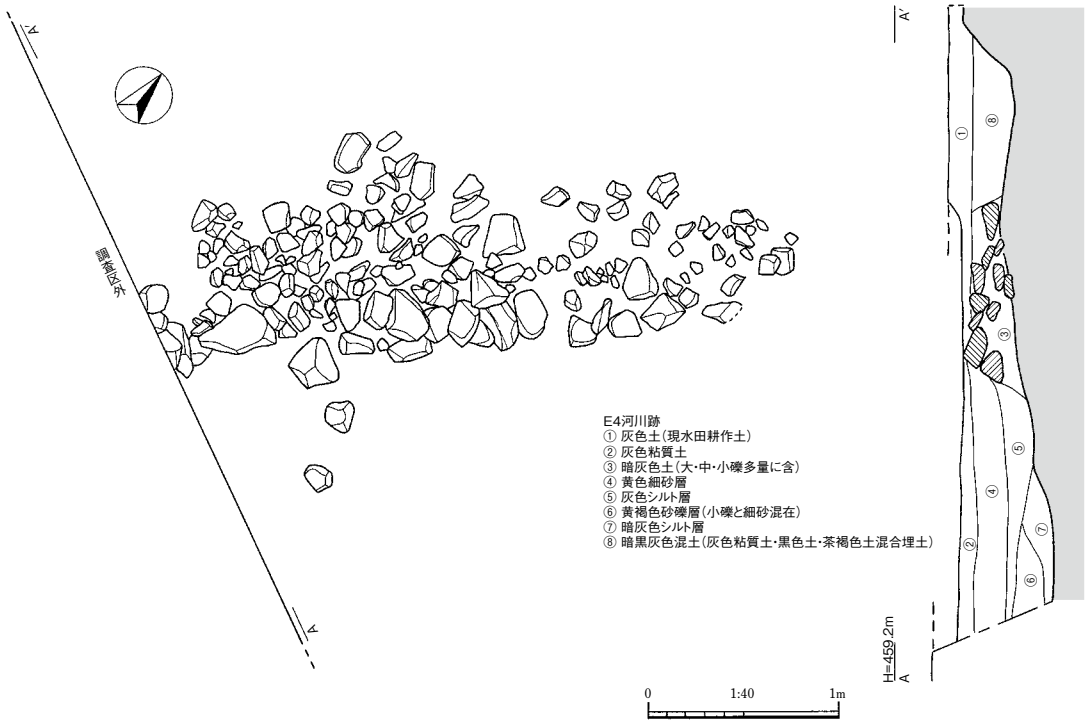
第６表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡土器溜り）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 口径	残存高	胴径	焼成	色調	胎土	調整	備考
22	第27図	鉢	縄文土器	土器溜り	※ 19.1	※ 16.4		良好	灰茶色	密	外面：貝殻条痕 内面：ケズリ	
23	第27図	甕	土師器	土器溜り	※ 16.5	※ 25.3	※ 21.4	良	赤褐色	やや粗	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ後ナデ、ケズリ	外面煤付着
24	第27図	甕	土師器	土器溜り	18.8	30.8	28.5	良	黄橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ、ナデ、ケズリ	外面煤付着
25	第27図	甕	土師器	土器溜り	-	※ 14.0		良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ハケ 内面：ケズリ	
26	第29図	甕	土師器	土器溜り	※ 12.2	※ 2.5		良	橙灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
27	第29図	甕	土師器	土器溜り	※ 14.6	※ 2.0		良	橙灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
28	第29図	甕	土師器	土器溜り	※ 17.4	※ 3.9		良	橙褐色	密　１～4㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ後ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケ後ナデ	
29	第29図	壺	土師器	土器溜り	※ 9.2	※ 6.2		良	灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	外面煤付着
30	第29図	甑	土師器	土器溜り	-	※ 13.4		良	黄褐色	密　砂粒含	外面：ハケ 内面：ケズリ	
31	第29図	壺	土師器	土器溜り	※ 10.8	※ 4.6		良	黄褐色	密　砂粒含	外面：ナデ 内面：ナデ、ケズリ	
32	第29図	埦	土師器	土器溜り	※ 9.8	※ 4.6		良	黄褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、指頭圧痕	
33	第29図	坏蓋	須恵	土器溜り	11.8	3.9		良好	灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	ヘラ記号有

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
F3	第29図	板状鉄器	金属製品	土器溜り	4.2	3.0	1.2	7.7	



第30図　土坑１・２平面および断面図



第31図　河川状遺構平面及び断面図

の一部を欠いているが長辺2.72ｍ、短辺1.7ｍで、深さは32㎝である。土坑の南西部はさらに、長辺1.98m、短辺0.98m、深さ20㎝程掘下げられていた。中から土師器の小片が一片検出されたのみで、用途・時期は不明である。

土坑２（第30図）　平面形は円形と方形を合わせたような形を呈する。すり鉢状に掘り込まれた土坑である。長辺1.4ｍ、短辺1.2ｍで、土坑の南側は一段掘下げられていた。深さは南側で32㎝、北側で20㎝であった。中からは何も検出されなかったため、用途は不明である。

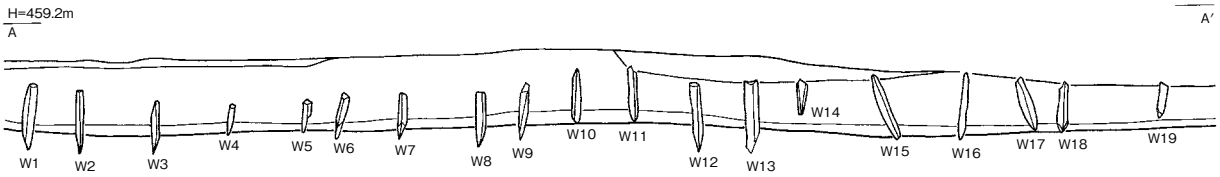
５　河川状遺構（第31図）　Ｅ４区の南東隅で検出した。周囲は、多里層と呼ばれる礫が集中していたが、その中において、北東から南西方向に直線的に並べられた礫列を確認した。確認のためトレンチを設定し掘下げたところ、礫列の南東側に流路状の落込みを確認した。落込み及び礫列の両端は、調査区外に伸び、また遺物も出土していないことから、時期等詳細は不明である。

６　水路状遺構（第32～37図）　Ｗ４区・Ｗ５区で検出した。

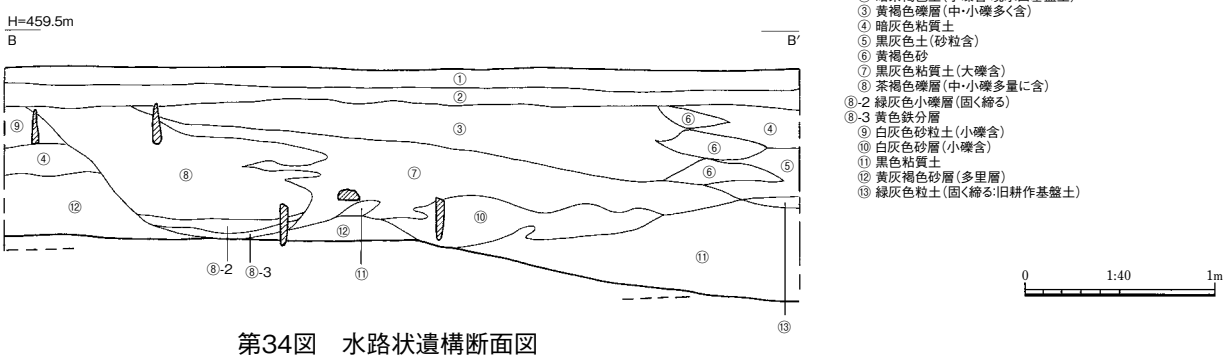
水路状遺構１　Ｗ４区･Ｗ５区で検出した。幅1.5ｍ～0.65m、長さ10.5ｍ、最大深さ40㎝が残るが、東側部はほとんど自然消滅状態で残存状況は悪い。後述する道路状遺構南側の側溝と一部重なる状態で検出し、列石を掘下げたところで水路北側の形及び杭列を検出した。杭列は、水路北側の法面に沿って15㎝～40㎝の間隔で並び、約37本の杭を検出した。

水路状遺構２　Ｗ４区・Ｗ５区の水路状遺構１北側で並行した状態で検出した。水路の東側は明瞭には検出出来ず、自然消滅した状態であったため、幅２ｍ、長さ８ｍ、深さ最大14㎝が残り、水路状遺構１同様、東側部はほとんど自然消滅状態で残存状況は悪い。水路状遺構２は、検出状況の比較的良かった西側付近で、二段階に落ち込んでいる部分が見られることから、水路の流れは何度か変わった可能性が考えられる。水路状遺構１で検出した杭ほど残存状態は良くないが、数本の杭が残る。本

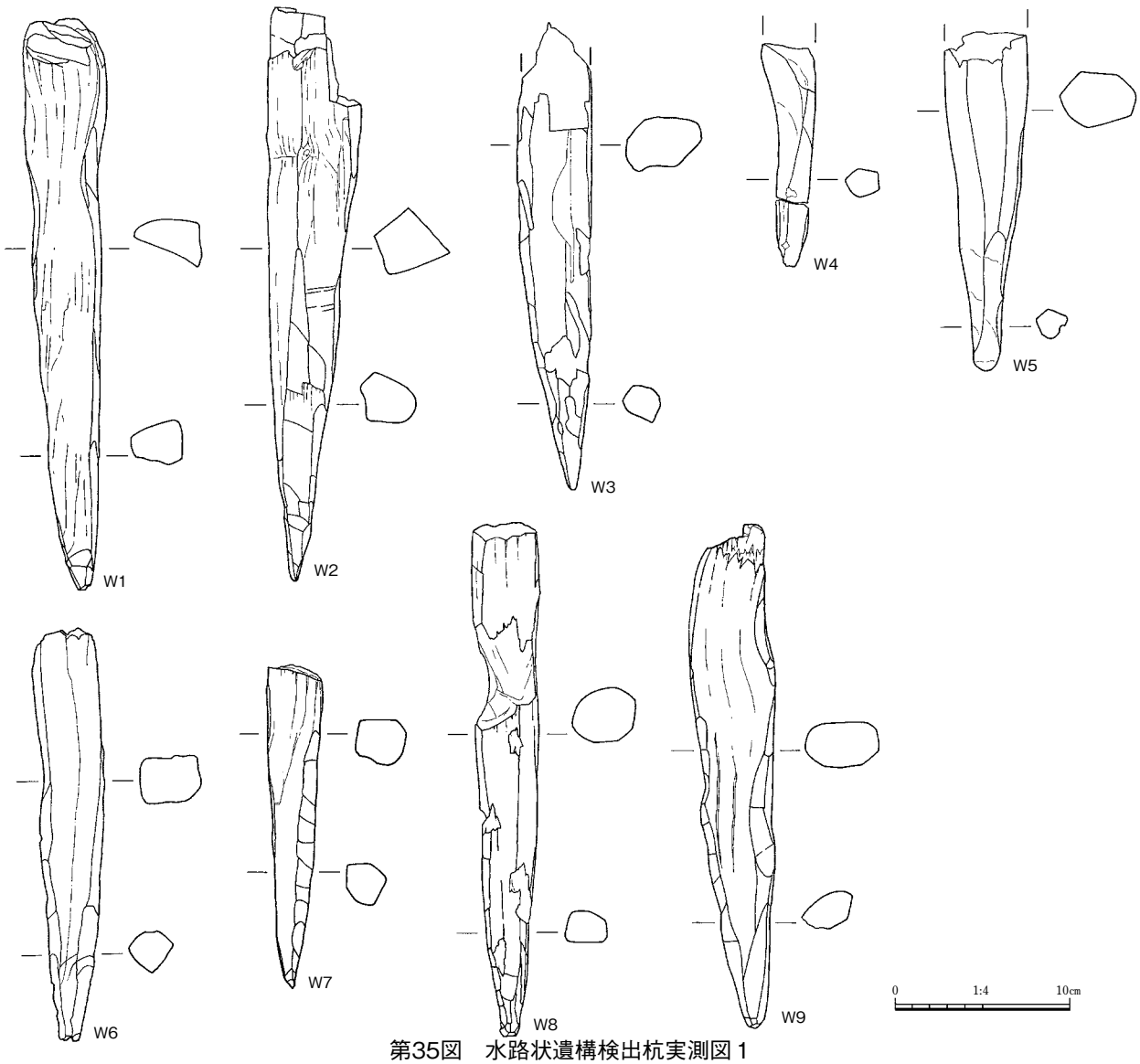
第32図　水路状遺構平面図



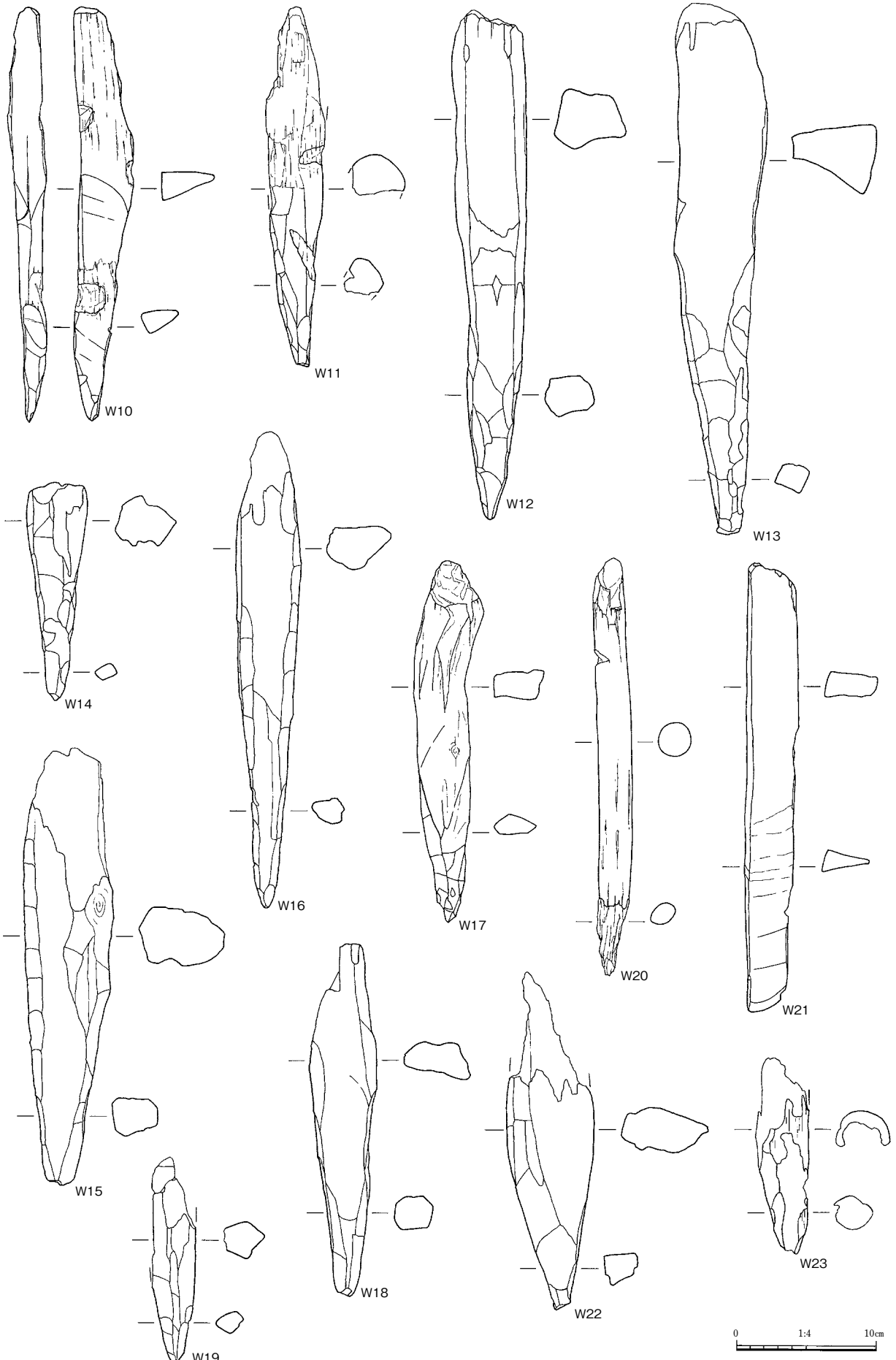
第33図　水路状遺構杭立面図



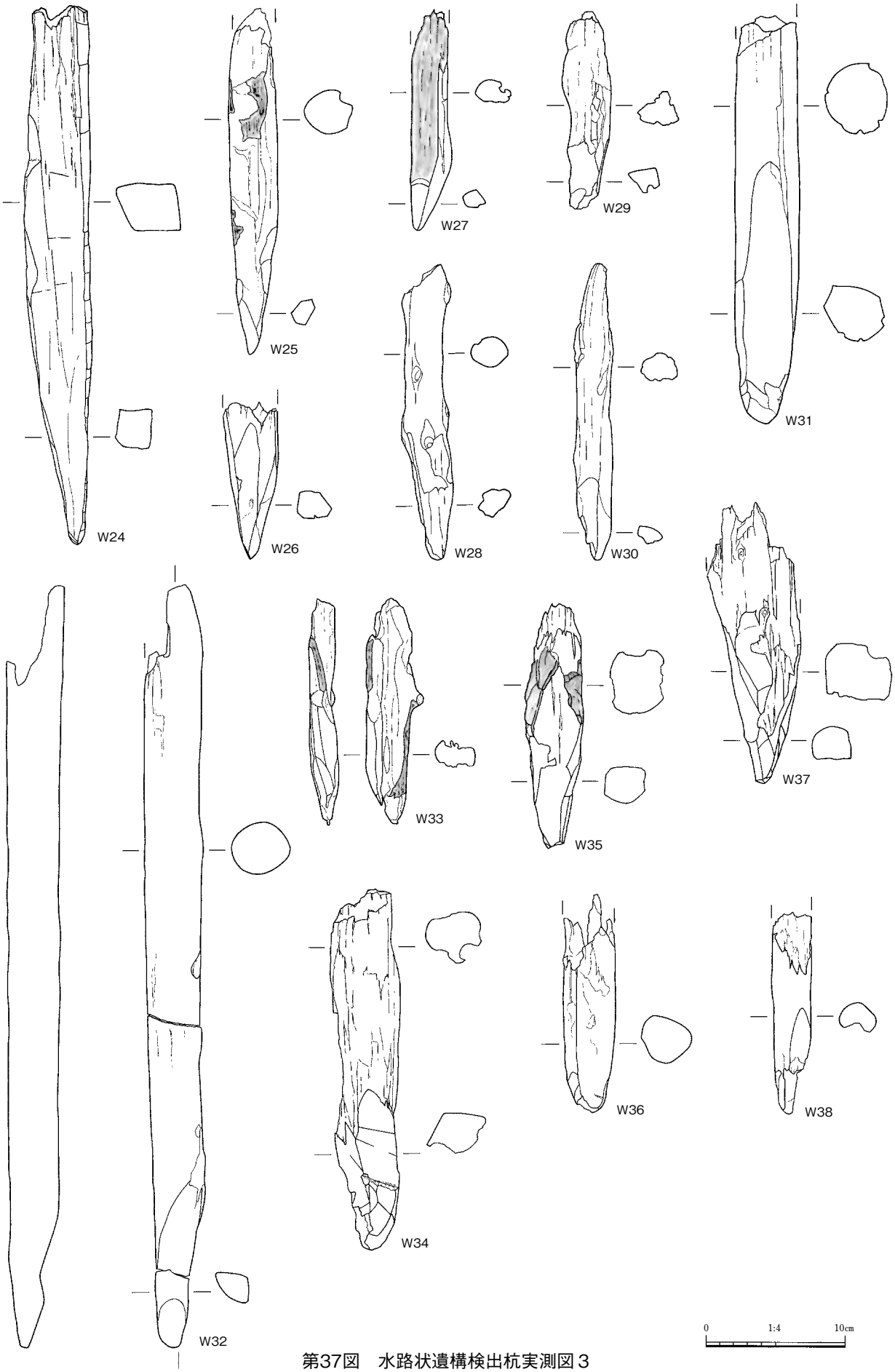
第34図　水路状遺構断面図



第35図　水路状遺構検出杭実測図 1



第36図　水路状遺構検出杭実測図２



第37図　水路状遺構検出杭実測図３

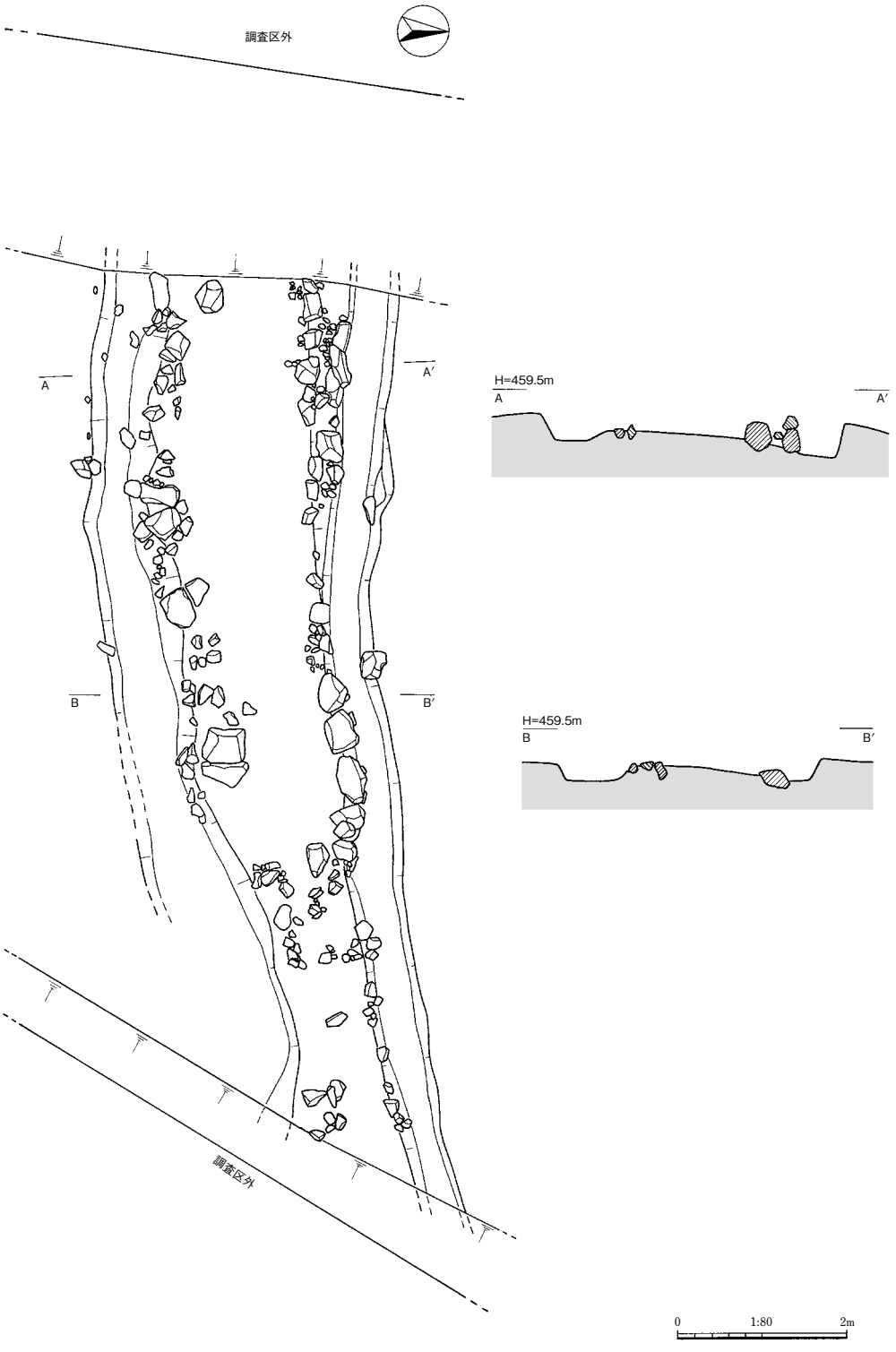
遺構の北側肩部と、後述する道路状遺構の北側溝の肩部が一部重なる。

遺物は水路状遺構１から中世須恵器の甕片が出土しているが、正確な時期を示すものではなく、水路状遺構２からは遺物が出土していないため、遺物からは両者の前後関係は不明であるが、科学分析の結果（第６章参照）よると、水路状遺構１が12～13世紀、水路状遺構２が14～15世紀で、断面観察からも水路状遺構１が古いと考えられる。

７　道路状遺構（第38図）　調査区を横断するようにＷ４区・Ｗ５区で検出した。幅2.2ｍ、長さ最大11ｍが残る。道の両端は大きいもので50㎝大から、小さいものは拳大の石を意識的に並べ補強している。中には石の代わりに鉄滓を利用している箇所も見られた。道の両サイドには排水のためと思われる幅60㎝、深さ75㎝のＵ字状の溝が掘り込まれ、溝を含めた幅は約3.5mである。この道路状遺構と、前述した水路状遺構はほぼ重なることから、水路状遺構を利用して作られたものと考えられる。道路状遺構の東側は、水路状遺構同様遺存状態は良くなかった。この東側部分には鉄滓が溜ったような状態で多く出土し、周囲は鉄分を含み赤茶褐色に変色していた。日南町では、たたら関係遺跡が多く確認され、調査地の西北西約3.0㎞において野戸見たたら跡（文化６年創業）が知られているが、地形的に見てそこから流れたものとは考えがたい。調査地の北東方向が谷地形になっていることから、まだ確認されていないたたら跡が存在する可能性が考えられる。

第７表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡水路状遺構）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※:復元値		
					長さ	幅	厚さ
W1	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 33.0	※ 4.5	※ 2.5
W2	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 33.2	※ 5.4	※ 3.8
W3	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 25.3	※ 4.4	※ 3.6
W4	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 12.9	※ 3.0	※ 1.5
W5	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 19.5	※ 4.8	※ 3.2
W6	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 23.9	※ 3.7	※ 2.8
W7	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 18.5	※ 3.3	※ 2.6
W8	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 29.5	※ 4.0	※ 3.0
W9	第35図	杭	木製品	Ｗ５	※ 29.0	※ 4.7	※ 2.5
W10	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 30.0	※ 3.8	※ 2.0
W11	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 26.0	※ 4.3	※ 3.0
W12	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 36.6	※ 5.4	※ 4.4
W13	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 38.4	※ 6.5	※ 5.0
W14	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 15.8	※ 4.4	※ 3.4
W15	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 31.6	※ 6.6	※ 4.2
W16	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 34.4	※ 4.8	※ 3.0
W17	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 26.0	※ 4.0	※ 2.0
W18	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 25.4	※ 4.9	※ 2.8
W19	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 14.9	※ 3.1	※ 2.8
W20	第36図	杭	木製品	Ｗ５	※ 30.0	※ 2.4	※ 2.2
W21	第36図	杭	木製品	Ｗ５	※ 31.5	※ 4.0	※ 2.0
W22	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 24.5	※ 6.3	※ 3.4
W23	第36図	杭	木製品	Ｗ４	※ 14.2	※ 3.9	※ 2.5
W24	第37図	杭	木製品	Ｗ５	※ 38.0	※ 4.5	※ 3.2
W25	第37図	杭	木製品	Ｗ５	※ 25.0	※ 3.5	※ 3.2
W26	第37図	杭	木製品	Ｗ５	※ 11.4	※ 4.0	※ 2.0
W27	第37図	杭	木製品	Ｗ５	※ 16.1	※ 3.0	※ 1.7
W28	第37図	杭	木製品	Ｗ５	※ 21.4	※ 3.6	※ 2.2
W29	第37図	杭	木製品	Ｗ４	※ 14.3	※ 3.6	※ 2.5
W30	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 21.5	※ 2.9	※ 2.0
W31	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 29.5	※ 5.6	※ 5.0
W32	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 55.3	※ 4.3	※ 3.8
W33	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 16.4	※ 4.0	※ 1.9
W34	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 26.0	※ 4.3	※ 3.6
W35	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 17.6	※ 4.1	※ 4.5
W36	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 15.8	※ 3.8	※ 3.4
W37	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 15.5	※ 6.3	※ 4.1
W38	第37図	杭	木製品	Ｗ４・５	※ 14.5	※ 2.9	※ 2.2



第38図　道路状遺構平面および断面図

水路状遺構、道路状遺構ともに、東方向に延びていたと考えられるが、W区の東端で既に明確な状態ではなく、Ｅ区はW区に比べ標高が低くなっており、Ｅ区ではいずれも確認できなかった。

出土遺物はなく時期は不明であるが、水路状遺構を利用して造られていることから、遅くとも近世以降のものと考えられる。

第４節　新屋小タイ田遺跡の遺構外遺物について（第39～43図）

Po34は、無紋の縄文土器の鉢、Po35～Po42は弥生土器で、Po35は前期の甕で、口縁部が外反し、端部には刻み目を施す。Po39・40は、大きく外反する口縁を有する前期の壺である。Po36は、中期の壺の頸部で２条の凸帯が残る。Po37・38は、後期の甕の頸部から口縁部で、いずれも端部は欠損しているが口縁部には、数条の沈線が巡る。Po41・42は底部であるが、前者は甕、後者は壺と思われる。

Po43～Po74、Po79は、土師器の甕である。Po43～Po52は、口縁部が大きく外反する甕、Po53～Po74は、口縁部が「く」の字に外反あるいは直立する甕である。Po79は、甕の頸部である。Po75は、直立する口縁を有する小型壺、Po76～Po78は、外反する口縁を有する小型壺である。Po80は土師器の碗で、内面に黒漆が残る。内部には漆が残る。Po81～Po83は高坏で、Po81・82は坏部、Po83頸部である。Po84は、低脚付の脚部である。Po85は土師器皿、Po86～Po91は手づくね土器である。Po92～Po94は、甑の把手である。

Po95～Po104は、土師質の鍋である。Po95～Po99は、大きく外反する口縁部で、端部は面を成す。

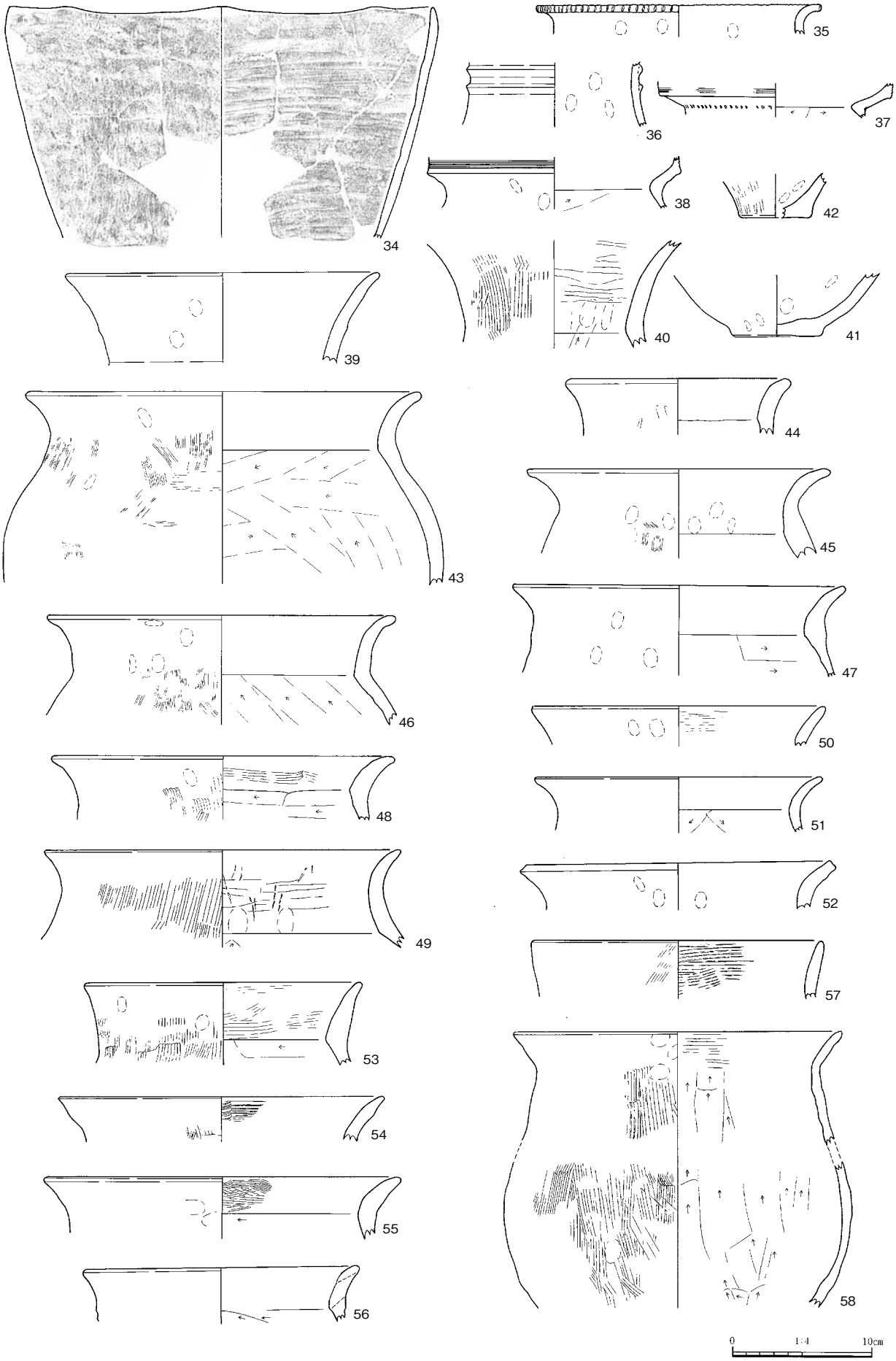
Po105～Po129は須恵器で、Po105･106は壺の口縁部、Po107～Po116は坏蓋、Po117～Po123は坏身、Po124･Po125は小型壺、Po126は高坏の脚部、Po127～Po128は鉢で、Po129は甕の底部と思われる。で、ほとんどが陶邑ＴＫ209～ＴＫ217並行の古墳時代終末期のものであるが、Po118のように古い時期のものも含まれる。

Po130～Po163は外面に格子目叩き、内面に板状工具による掻き目を施されたいわゆる勝間田・亀山系の甕である。Po130～Po140は黒色を呈した瓦質、Po140～Po163は灰色～青みを帯びた須恵質で、Po161～Po163は褐色の焼きの悪い軟質のものである。

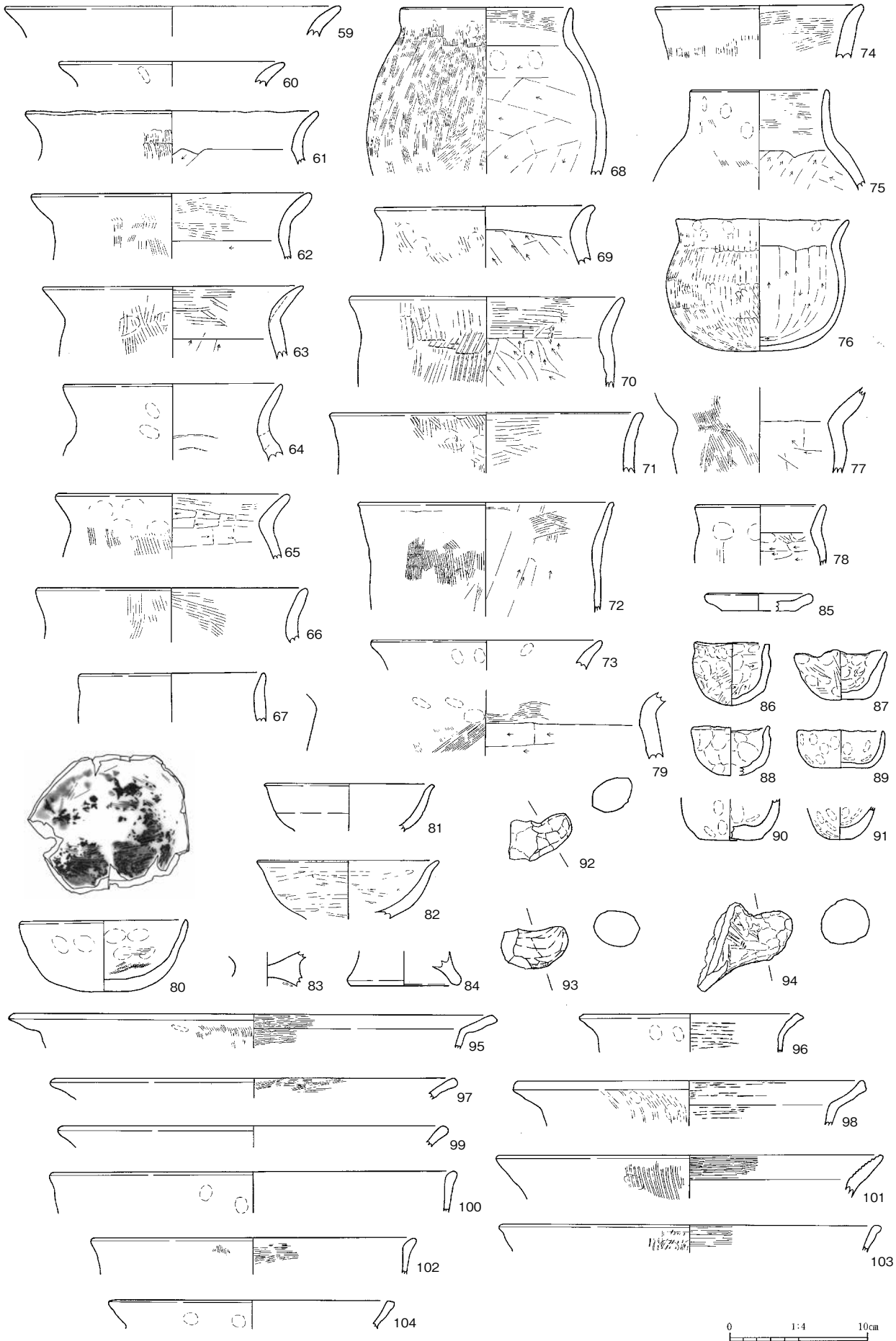
Po164～Po186は陶磁器類である。Po164～Po166は青磁の皿、Po167・Po168は染付の碗、Po169・Po170は唐津の皿でいずれも江戸時代前期である。Po171～Po183は江戸時代後期の陶磁器類で、Po171～Po180は染付で、Po171は皿、Po172～Po177は碗、Po178は湯呑み、Po179は皿、Po180は蓋である。Po181～Po183は窯元不明であるが在地のものであろう。Po184～Po186は、明治時代のものと考えられる磁器で、それぞれ皿、鉢、湯呑みである。

Po187は、鞴の羽口である。

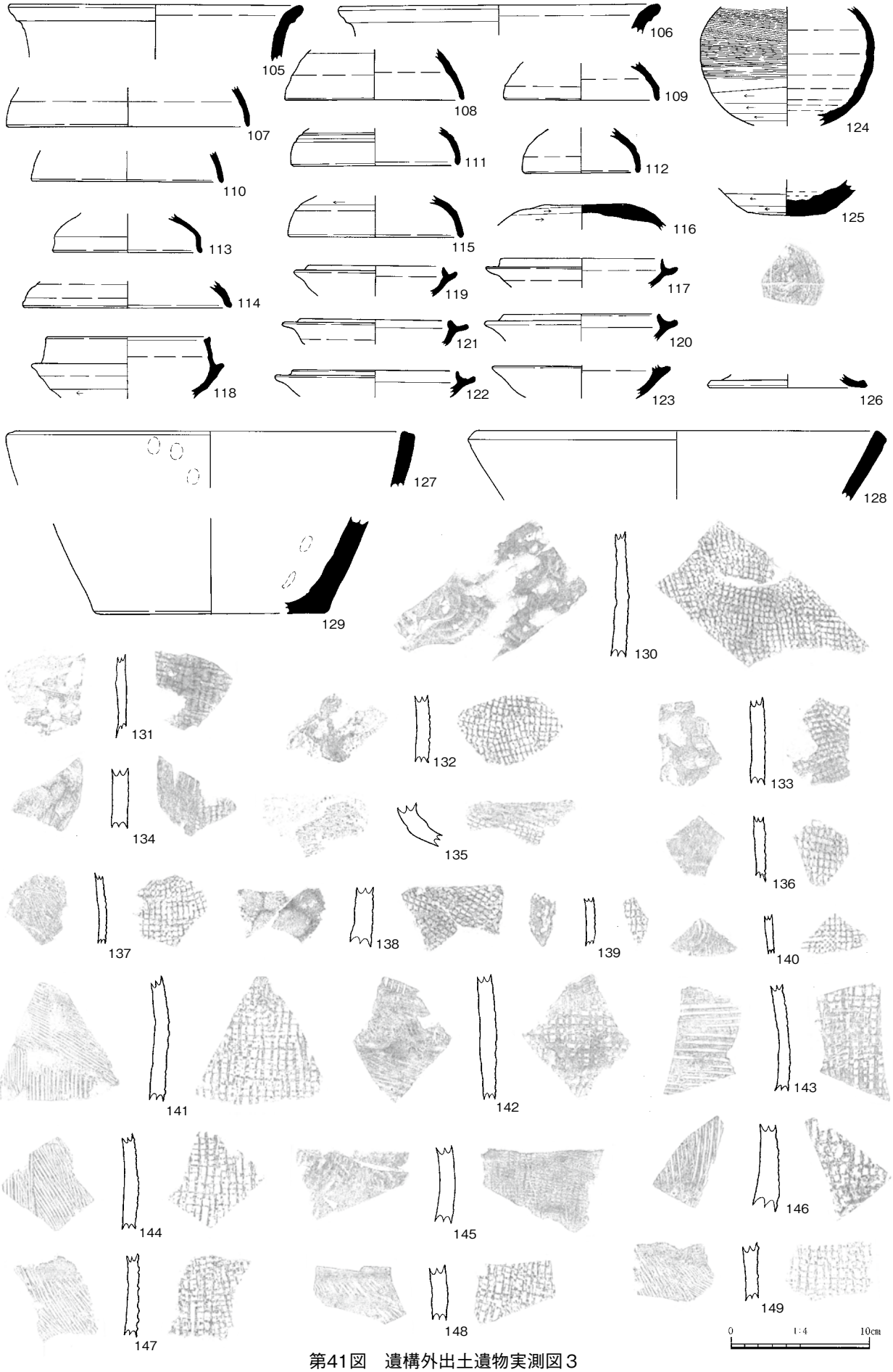
Ｓ２～Ｓ５は石製品で、Ｓ２は敲石、Ｓ３は砥石、Ｓ４・Ｓ５は石鏃である。Ｆ４は釘、Ｆ５・Ｆ６は煙管である。Ｆ７は一銭コインで大正11年の製造である。



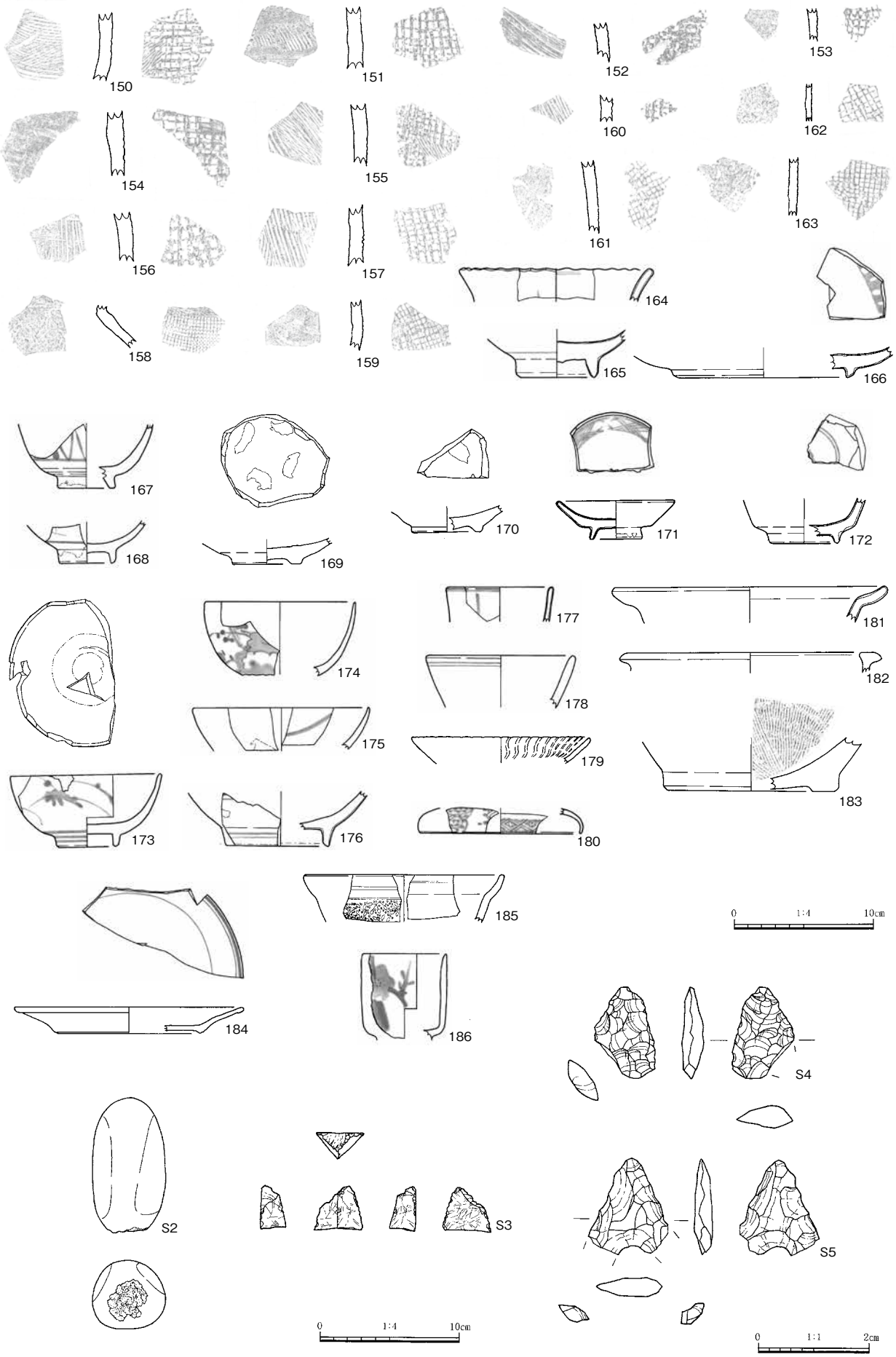
第39図　遺構外出土遺物実測図１



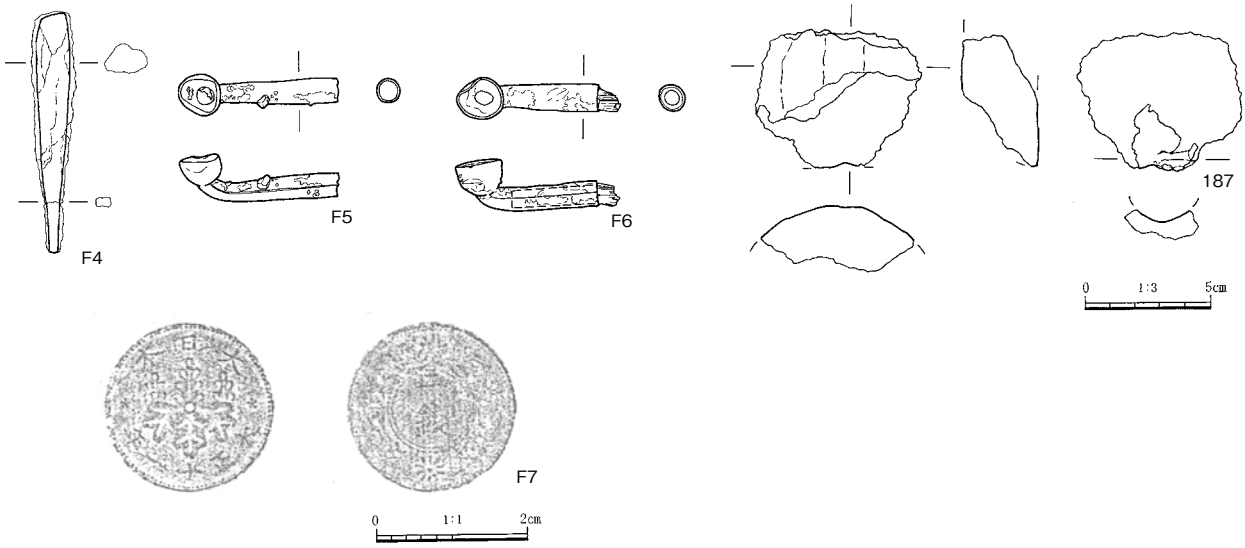
第40図　遺構外出土遺物実測図２



第41図　遺構外出土遺物実測図３



第42図　遺構外出土遺物実測図４



第43図　遺構外出土遺物実測図５

第８表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡遺構外１）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値				焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	胴径	底径					
34	第39図	鉢	縄文土器	Ｅ１	※30.8	※16.7			良	黄橙色（外面） 黒褐色（内面）	密	外面：ナデ、条痕 内面：ナデ、条痕	
35	第39図	甕	弥生土器	Ｗ３	※20.8	※ 2.4			良	橙灰褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕 口縁端部：刻み	
36	第39図	壺	弥生土器	Ｗ１	-	※ 4.7			良	橙灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ハケ	
37	第39図	甕	弥生土器	Ｗ５	-	※ 2.5			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：調整不明　頸部：刺突文 内面：ケズリ 口縁部：2条の沈線残る	
38	第39図	甕	弥生土器	水路１	-	※ 3.8			良	灰褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ 口縁部：3条の沈線残る	
39	第39図	甕	土師器	Ｅ１	※22.4	※ 6.5			良	褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	外面煤付着
40	第39図	壺	土師器	Ｅ２		※ 7.8			良	外面：赤褐色 内面：黄橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ミガキ、ナデ、ケズリ、 指頭圧痕	
41	第39図	壺	弥生土器	Ｅ４	-	※ 4.5		6.0	良	橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
42	第39図	甕	弥生土器	Ｗ２		※ 3.2		※5.2	良	黄灰褐色	密　砂粒含	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	
43	第39図	甕	土師器	Ｅ１	※28.2	※13.9			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ、ハケ後ナデ 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
44	第39図	甕	土師器	Ｅ２	※15.5	※ 4.1			良	灰褐色	密	外面：ナデ　内面：ハケ	
45	第39図	甕	土師器	Ｅ１	※21.9	※ 6.4			良	橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ 、指頭圧痕	
46	第39図	甕	土師器	Ｅ１	※25.0	※ 7.9			良	黄灰褐色	密　１～5㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	
47	第39図	甕	土師器	Ｅ２	※24.0	※ 6.5			良	黄灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	
48	第39図	甕	土師器	Ｅ１	※24.8	※ 4.6			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケ、ケズリ	
49	第39図	壺	土師器	Ｅ２	※25.5	※ 7.1			良	橙色	密　石英、白色粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ケズリ、指頭圧痕	
50	第39図	甕	土師器	Ｗ２	※21.0	※ 2.9			良	黄橙色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ハケ	
51	第39図	甕	土師器	水路１	※20.8	※ 4.0			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：調整不明 内面：ケズリ	
52	第39図	甕	土師器	水路１	※22.0	※ 3.4			良	黄橙褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
53	第39図	甕	土師器	Ｅ１	※19.6	※ 8.0			良	黄褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ後ナデ、ケズリ	
54	第39図	甕	土師器	Ｅ２	※23.4	※ 3.3			良	黄橙色	密　白色粒、 １㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ	
55	第39図	甕	土師器	Ｅ２	※25.2	※ 4.5			良	外面：黄橙色 内面：暗褐色	密　石英、雲母含	外面：ナデ 内面：ハケ、ケズリ	
56	第39図	甕	土師器	Ｅ２	※19.4	※ 4.1			良	黄橙色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：ナデ、ケズリ	
57	第39図	甑	土師器	Ｗ２	※20.8	※ 4.2			良	橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
58	第39図	甕	土師器	Ｅ２	※23.6	※20.0	※25.2		良	橙色	密　１㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
59	第40図	甕	土師器	Ｅ３	※24.5	※ 2.3			良	黄橙色	密　石英、白色粒含	外面：ナデ 内面：ナデ	
60	第40図	甕	土師器	Ｅ４	※16.3	※ 1.8			良	橙褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
61	第40図	甕	土師器	Ｅ１	※21.4	※ 3.9			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ケズリ	
62	第40図	甕	土師器	Ｅ１	※20.2	※ 4.8			良	黄橙灰色	密　１～5㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ、ケズリ	
63	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※18.8	※ 5.4			良	橙色	密　石英含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	

第９表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡遺構外２）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値				焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	胴径	底径					
64	第40図	甕	土師器	Ｅ１	※15.8	※ 5.6			良	橙灰色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	
65	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※16.6	※ 4.8			良	赤茶褐色	密	外面：ハケ 内面：ハケ後ナデ、ケズリ	
66	第40図	甕	土師器	Ｅ１	※19.6	※ 4.0			良	黄橙色	密　砂粒含	外面：ナデ、ケズリ 内面：ナデ、ケズリ	
67	第40図	甕	土師器	Ｗ３	※13.6	※ 3.6			良	橙褐色	密	外面：調整不明 内面：調整不明	
68	第40図	甕	土師器	Ｅ１	※12.3	※12.2			良	暗橙褐色	密　１～5㎜大砂粒含 １～4㎜大石英含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ、ナデ、ケズリ、 指頭圧痕	
69	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※15.9	※ 4.4			良	橙褐色	やや粗　１～2㎜大砂粒含	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ、ケズリ	
70	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※20.0	※ 6.6			良	黄橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：ハケ 内面：ハケ、ケズリ	
71	第40図	直口壺	土師器	Ｅ３	※22.6	※ 4.5			良	浅黄橙色	密　石英、雲母含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケ	
72	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※18.5	※ 8.1			良	外面：暗灰色 内面：浅黄橙色	密　石英含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ、ナデ、ケズリ	
73	第40図	甕	土師器	Ｗ２	※16.8	※ 2.2			良	灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
74	第40図	甕	土師器	Ｅ１	※15.0	※ 3.9			良	橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
75	第40図	壺	土師器	Ｗ２	※10.0	※ 7.3			良	橙灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ目後ナデ 内面：ナデ、ケズリ	
76	第40図	鉢	土師器	Ｗ２	12.7	9.7	13.1		良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、タタキ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
77	第40図	壺	土師器	Ｅ２		※ 6.3	※12.7		良	橙色	密　雲母、１㎜大砂粒含	外面：ハケ 内面：ナデ、ケズリ	
78	第40図	小型壺	土師器	Ｅ２	※ 9.4	※ 4.5		※ 9.6	良	黄橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	
79	第40図	甕	土師器	Ｅ１	-	※ 4.9			良	橙褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ、ケズリ	
80	第40図	碗	土師器	Ｅ２	※12.0	※ 5.2			良	橙色	密　石英含	外面：調整不明 内面：ハケ、指頭圧痕	内外面共漆付着
81	第40図	坏	土師器	Ｅ２	※12.0	※ 3.5			良	橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
82	第40図	坏	土師器	Ｅ４	※13.2	※ 4.3			やや不良	橙灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、ハケ後ミガキ 内面：ナデ、ハケ後ミガキ	
83	第40図	低脚坏	土師器	Ｅ１	-	※ 2.5			良	橙灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ 内面：調整不明	
84	第40図	脚	土師器	Ｅ２		※ 2.5		※ 8.0	良	橙色	密　雲母含	外面：ナデ 内面：ナデ	
85	第40図	皿	土師器	Ｗ４	※ 7.4	1.3		※ 5.4	良	橙褐色	密　砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：糸切り	
86	第40図	手づくね	土師器	Ｗ２	5.5	4.6	5.7		良	黄橙色	密	外面：指頭調整、ハケ 内面：指頭調整、ケズリ	
87	第40図	手づくね	土師器	Ｅ２	6.6	3.7		2.5	良	黄橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
88	第40図	手づくね	土師器	Ｅ２	5.5	3.6		2.0	良	浅黄橙色 暗灰色	密　石英、白色粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
89	第40図	手づくね	土師器	Ｅ２	6.8	2.7		4.4	良	黄橙褐色	密　１～5㎜大砂粒含	外面：指頭調整 内面：指頭調整	外面煤付着
90	第40図	手づくね	土師器	Ｗ２		※ 3.1		※ 4.6	良	黄灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
91	第40図	手づくね	土師器	Ｗ２		※ 2.4			良	橙灰褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
92	第40図	把手	土師器	Ｅ１		※ 4.5			良	灰褐色	密　砂粒含	外面：ナデ 内面：ケズリ	
93	第40図	把手	土師器	Ｗ２				※ 4.9	良	灰褐色	密	外面：ハケ後ナデ	長さ4.9㎝
94	第40図	把手	土師器	Ｅ２		※ 6.6			良	黄橙色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：指頭調整、ハケ 内面：ケズリ	
95	第40図	鍋	土師器	Ｗ５	※35.2	※ 2.5			良	褐色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	外面煤付着
96	第40図	甕	土師器	Ｗ４	※15.8	※ 2.8			良	褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケ	外面煤付着
97	第40図	甕	土師器	Ｗ２	※29.4	※ 1.5			良	橙色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
98	第40図	甕	土師器	Ｗ４	※25.2	※ 3.2			良	灰褐色	密　砂粒含	外面：ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ 口縁端部：ナデ	外面煤付着
99	第40図	甕	土師器	Ｗ２	※28.2	※ 1.6			良	黄灰橙色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
100	第40図	甕	土師器	Ｗ３	※29.4	※ 3.0			良	灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
101	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※28.0	※ 3.2			良		密　石英、白色粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ、ケズリ	外面煤付着
102	第40図	甕	土師器	Ｗ４	※23.7	※ 2.7			良	黄灰色	密	外面：ナデ、ハケ後ナデ 内面：ナデ、ハケ	
103	第40図	甕	土師器	Ｅ２	※27.0	※ 2.0			良	黄橙色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
104	第40図	甕	土師器	Ｗ２	※20.9	※ 2.1			良	黄橙色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
105	第41図	甕	須恵器	Ｗ２	※21.2	※ 4.0			良好	暗灰赤色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
106	第41図	壺	陶器	Ｅ１	※23.2	※ 2.2			良好	灰褐色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
107	第41図	坏蓋	須恵器	Ｗ２	※17.6	※ 2.9			良好	青灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
108	第41図	坏蓋	須恵器	Ｗ２	※13.0	※ 3.7			良好	青灰色	密	外面：回転ナデ、ケズリ 内面：回転ナデ	
109	第41図	坏蓋	須恵器	Ｗ２	※11.2	※ 2.7			良好	灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	

第10表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡遺構外３）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値				焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	器高	胴径	底径					
110	第41図	坏蓋	須恵器	Ｗ３	※13.8	※ 2.2			良好	青灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
111	第41図	坏蓋	須恵器	Ｅ２	※12.0	※ 2.7			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面2条沈線
112	第41図	坏蓋	須恵器	Ｅ１	※ 8.2	※ 3.3			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
113	第41図	坏蓋	須恵器	Ｅ１	※10.6	※ 2.8			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
114	第41図	坏蓋	須恵器	Ｅ１	※15.0	※ 1.9			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
115	第41図	坏蓋	須恵器	Ｅ１	※12.5	※ 3.0			良好	褐灰色	密　石英、 １㎜以下の砂粒含	外面：ケズリ、回転ナデ 内面：回転ナデ	
116	第41図	坏蓋	須恵器	Ｅ１		※ 1.9			良好	灰色	密　白色砂粒、 １㎜以下の砂粒含	外面：回転ヘラケズリ 内面：ナデ	
117	第41図	坏身	須恵器	Ｗ２	※11.8	※ 2.1			良好	青灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
118	第41図	坏身	須恵器	Ｗ２	※11.9	※ 4.5			良好	青灰色	密	外面：回転ナデ、ケズリ 内面：回転ナデ	外面自然釉付着
119	第41図	坏身	須恵器	Ｗ２	※ 9.8	※ 2.2			良好	青灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
120	第41図	坏身	須恵器	Ｅ２	※11.2	※ 2.0			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面自然釉付着
121	第41図	坏身	須恵器	Ｅ１	※11.0	※ 1.9			良好	灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
122	第41図	坏身	須恵器	Ｅ１	※12.0	※ 2.0			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
123	第41図	坏身	須恵器	Ｅ２		※ 2.4			良好	灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面自然釉付着
124	第41図	壺	須恵器	Ｅ４		※ 8.6	※12.6		良	灰	密　白色砂粒含	外面：カキ目、ナデ、ケズリ 内面：ナデ	
125	第41図	壺	須恵器	Ｗ２		※ 2.6		※5.6	良好	青灰色	密	外面：ケズリ 内面：回転ナデ	外面底部線刻有
126	第41図	高坏	須恵器	Ｅ１		※ 0.9		※11.4	良好	灰オリーブ色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
127	第41図	鉢	須恵器	Ｗ２	※28.2	※ 4.1			良好	淡灰色	密	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
128	第41図	鉢	須恵器	Ｗ４	※29.2	※ 5.0			良好	青白色	密	外面：回転ナデ、ケズリ後ナデ 内面：調整不明	
129	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 7.0		※16.8	良好	青灰色	密	外面：回転ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	
130	第41図	甕	須恵器	水路１		※ 9.2			良	外面：暗灰色 内面：黄灰色	密　石英・白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：当て具痕	
131	第41図	甕	須恵器	Ｗ４		※ 6.1			良好	外面：暗灰色 内面：黄橙色	密　石英・白色砂粒含	外面：格子目タタキ後ナデ 内面：ハケ	
132	第41図	甕	須恵器	Ｗ４		※ 5.0			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
133	第41図	甕	須恵器	Ｗ４		※ 6.4			良	暗灰色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
134	第41図	甕	須恵器	Ｗ４		※ 4.4			良好	外面：鈍い黄橙色 内面：黄灰色	密　石英・白色砂粒含	外面：格子目タタキ後ナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	
135	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 3.3			良	灰黄橙色	密　１㎜大砂粒含	外面：ナデ、格子目タタキ 内面：ナデ	
136	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 4.9			良	灰褐色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
137	第41図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 5.2			良	外面：暗灰色 内面：灰黄色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
138	第41図	甕	須恵器	Ｅ３		※ 7.1			良	暗灰色	密　石英、１㎜大砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
139	第41図	甕	須恵器	Ｅ４		※ 3.6			良	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
140	第41図	甕	須恵器	Ｗ４		※ 2.9			良好	黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：当て具痕	
141	第41図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 9.2			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
142	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 9.2			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ後ナデ 内面：ハケ後ナデ	
143	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 7.9			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ後ハケ	
144	第41図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 7.0			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
145	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 5.7			良	黄灰色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：当て具痕、ナデ	
146	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 6.5			良好	灰白色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
147	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 6.2			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、ナデ	
148	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 4.1			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ後ナデ	
149	第41図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 4.3			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ後ナデ	
150	第42図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 5.0			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
151	第42図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 4.5			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ後ナデ	
152	第42図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 2.9			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
153	第42図	甕	須恵器	Ｅ２		※ 2.4			良好	暗黄灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケナデ	
154	第42図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 4.7			良好	灰白色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
155	第42図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 4.6			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ、ハケ 内面：ハケ	

第11表　遺物観察表（新屋小タイ田遺跡遺構外４）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 口径	器高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
156	第42図	甕	須恵器	Ｅ１		※ 3.7			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
157	第42図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 4.5			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
158	第42図	甕	須恵器	Ｗ３		※ 3.1			良好	灰色	密	外面：ナデ、格子目タタキ 内面：ナデ	
159	第42図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 3.7			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ、当て具痕	
160	第42図	甕	須恵器	Ｗ４		※ 2.0			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
161	第42図	甕	須恵器	Ｅ２		※ 5.3			良	橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
162	第42図	甕	須恵器	Ｗ２		※ 2.7			良	黄橙色	密　１㎜以下の砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
163	第42図	甕	須恵器	Ｅ３		※ 4.2			良	橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
164	第42図	鉢	青磁	Ｅ３	※ 13.4	※ 2.4			良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉貫入 内面：施釉貫入	
165	第42図	碗	青磁	Ｅ３		※ 3.5		※ 5.4	良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉貫入、底部露胎 内面：施釉	
166	第42図	皿	青磁	Ｗ３		※ 2.2		※ 12.4	良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉、底一部露胎 内面：施釉	
167	第42図	碗	磁器	Ｅ２		※ 4.6		※ 4.0	良好	明オリーブ灰色	密	外面：施釉、高台一部露胎 内面：施釉	
168	第42図	碗	陶器	Ｗ４		※ 3.0		3.8	良好	明褐灰色	密	外面：施釉、高台から底部露胎 内面：施釉	
169	第42図	皿	磁器	Ｗ２		※ 1.8		4.85	良好	灰	密	外面：露胎 内面：施釉	内面砂目
170	第42図	皿	陶器	Ｗ２		※ 1.9		※ 4.9	良好	淡灰色	密	外面：露胎 内面：施釉	
171	第42図	皿	磁器	Ｅ３	※ 8.4	2.8		3.7	良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉、高台一部露胎 内面：施釉	
172	第42図	碗	磁器	Ｅ２		※ 3.3		※ 4.8	良好	外面：明オリーブ灰色 内面：白染付	密	外面：施釉、高台一部露胎 内面：施釉	
173	第42図	碗	磁器	Ｅ１	※ 10.8	5.2		※ 4.2	良好	灰白色	密	外面：施釉 内面：施釉、蛇の目釉剥ぎ	
174	第42図	碗	磁器	Ｗ４・５	※ 10.8	※ 5.3			良好	白灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	
175	第42図	皿	磁器	Ｗ４	※ 12.8	※ 3.1			良好	灰白色	密	外面：施釉 内面：施釉	
176	第42図	碗	磁器	Ｗ２		※ 4.0		※ 7.4	良好	灰白色	密	外面：施釉、高台一部露胎 内面：露胎	
177	第42図	猪口	磁器	Ｅ３	※ 7.5	※ 2.5			良好	明オリーブ灰色	密	外面：施釉貫入 内面：施釉貫入	
178	第42図	碗	磁器	Ｗ２	※ 10.4	※ 3.8			良好	灰オリーブ	密	外面：施釉 内面：施釉	
179	第42図	皿	磁器	Ｗ２	※ 12.8	※ 1.9			良好	白灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	
180	第42図	蓋	磁器	Ｅ３	※ 11.6	※ 1.8			良好	灰白色	密	外面：施釉 内面：施釉	
181	第42図	鉢	陶器	Ｅ３	※ 19.6	※ 2.6			良好	灰オリーブ色	密	外面：施釉貫入 内面：施釉貫入	
182	第42図	甕	陶器	Ｅ３	※ 16.2	※ 1.5			良好	灰黄褐色 オリーブ灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	
183	第42図	擂鉢	陶器	Ｗ２		※ 3.9		※ 12.2	良好	橙褐色	密	外面：一部施釉	８条単位の摺目
184	第42図	皿	磁器	Ｗ４	※ 16.5	1.9		※ 10.5	良好	白灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	
185	第42図	鉢	磁器	Ｗ４・５	※ 14.5	※ 3.4			良好	白灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	
186	第42図	湯呑	磁器	Ｗ２	※ 6.0	※ 6.2			良好	白色	密	外面：施釉 内面：施釉	
187	第43図	羽口	土製品	Ｗ２		5.4			良	外面：灰黄色 内面：淡橙色	密　白色砂粒含		外面鉄分付着

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
S2	第42図	敲石	石製品	Ｗ２	9.8	5.3	5.0	396.0	
S3	第42図	砥石	石製品	Ｅ１	※ 3.2	3.4	1.9	15.3	
S4	第42図	石鏃	石製品	Ｅ３	1.7	1.1	0.4	0.6	黒曜石
S5	第42図	石鏃	石製品	Ｅ１	1.7	1.5	0.35	0.8	サヌカイト
F4	第43図	釘	金属製品	Ｗ２	9.5	1.7	1.2	20.1	
F5	第43図	キセル	金属製品	Ｗ２	※ 6.3	1.6	1.8		
F6	第43図	キセル	金属製品	Ｅ１	※ 6.5	1.6	2.0		
F7	第43図	古銭	金属製品	Ｅ１	2.2	2.2	0.1	2.9	一銭

第４章　新屋川添遺跡の調査

第１節　新屋川添遺跡の調査概要

道後山から延びる丘陵の支群の一つの突端裾部に位置し、前述した新屋小タイ田遺跡からは、南に直線距離約400mである。丘陵の裾部から日野川までは、約80mというわずかな平坦地に位置する。調査前は水田であった。調査は、調査区の北側の水田部に排土置き場を設定することができ、調査面積も約1,040㎡と比較的狭い範囲の調査であったため、区割は行わず調査区全体を一面づつ掘下げる方法で調査を進め、南側から北側に向かって順次掘下げを開始した。しかしながら、同時進行で行った重機による表土掘削状況や、調査区の西側に排水のため掘下げた側溝の断面観察から、調査区の南西角と、北側のライン西2/5を結んだ西側の部分は、遺構・遺物存在が少ないと判断された。季節的に雪の時期が迫っていたこともあり、調査の効率を図り、時間がかかると思われる東側から調査を行うことにした。調査の結果、遺構・遺物共に調査区東側に集中しており、遺構については、東側のみで確認された。

第２節　新屋川添遺跡の堆積（第44図）

新屋川添遺跡の堆積は、調査区の東側の山側から調査区の西側に向かって緩やかに傾斜する。山側の浅い部分で30㎝､川側の深い部分で80㎝を掘下げる。表土とその下は現水田耕作土と基盤土である。基盤層より下層は､調査地の位置によって異なった様相を示すが､各地区基盤層下の層である黒色土･茶灰色土層・黒灰色か粘質土から遺物が出土している。遺物包含層の下層は､（第44図Ｂ－Ｂ′･Ｃ－Ｃ′参照）淡灰色・灰色砂質粘土層となり、淡黒色系の粘土層と安定した層の堆積となる。最下層は多里層と呼ばれる礫層がみられる。

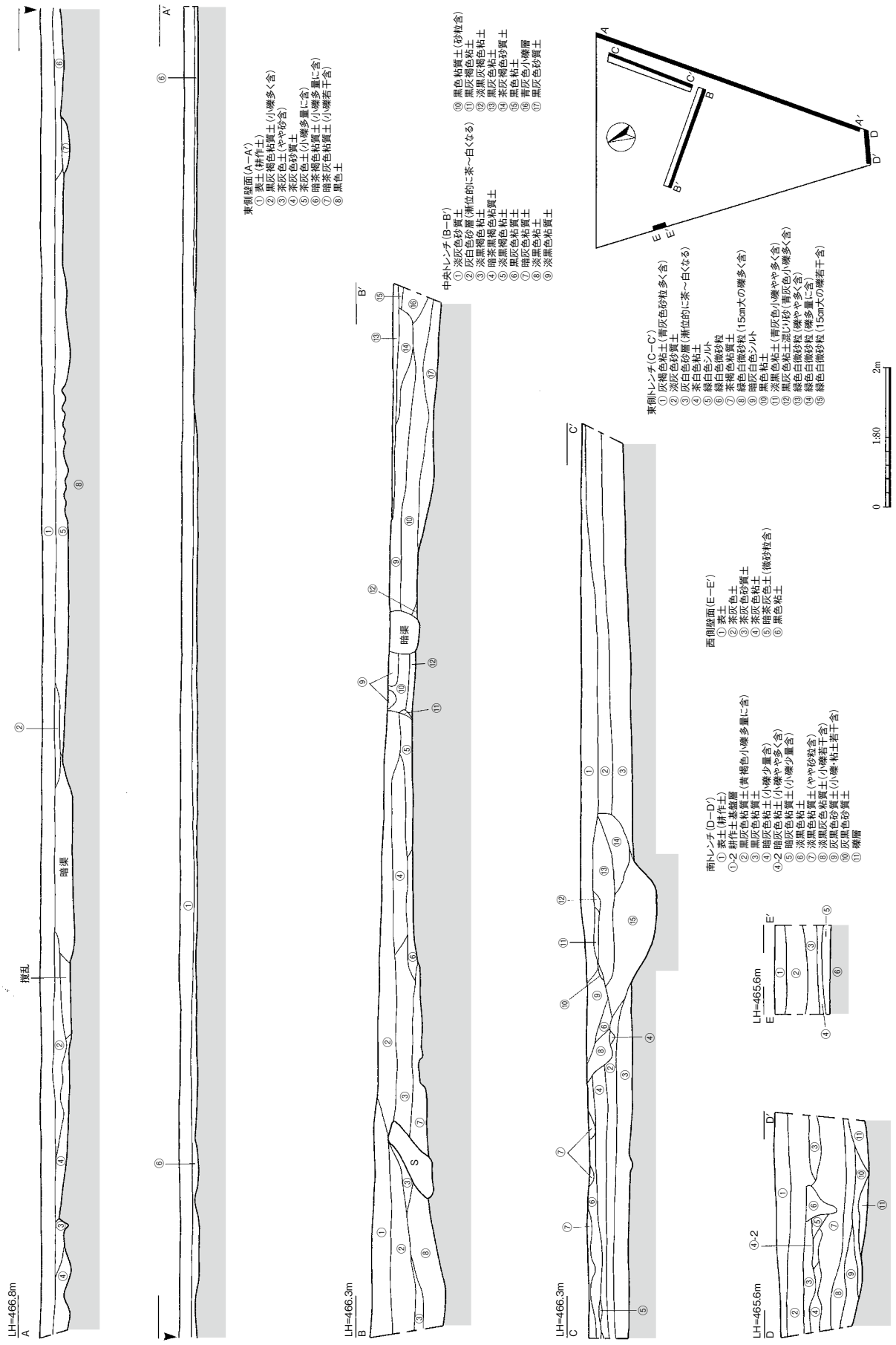
第３節　新屋川添遺跡の遺構について

新屋川添遺跡の遺構は、調査地のほぼ中央を境に西側及び北側三分の１からは遺構が検出されなかった。遺構は山裾にあたる東側付近で集中して検出され、溝状遺構、掘立柱建物、柱列、石敷遺構２基を検出した。

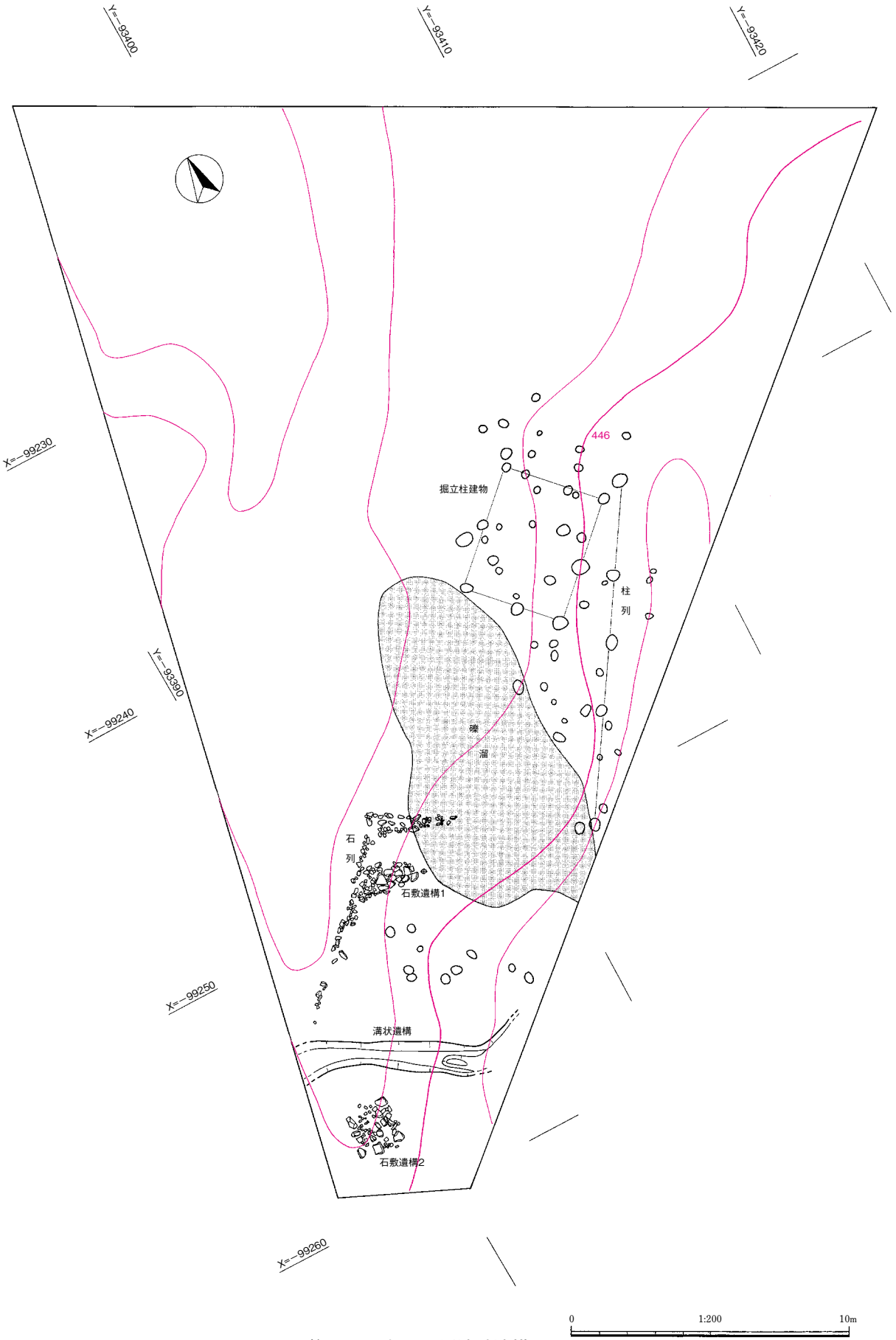
１　溝状遺構（第46図）　調査区の南側で調査区を東西に横断するように１条検出した。幅80㎝～120㎝、深さ12㎝が残り、調査区の東側で北方向に屈曲し、深さもさらに15㎝深くなるが、調査区外にかかり詳細は不明である。当初、後述する石敷遺構と関連する遺構ではないかと考えていたが、溝の西端で土師器の破片と炭が出土し、炭は分析の結果（第６章参照)、８世紀であることから、石敷遺構よりは古い時期のものと考えられる。

２　掘立柱建物　調査区のほぼ中央で１棟検出した。

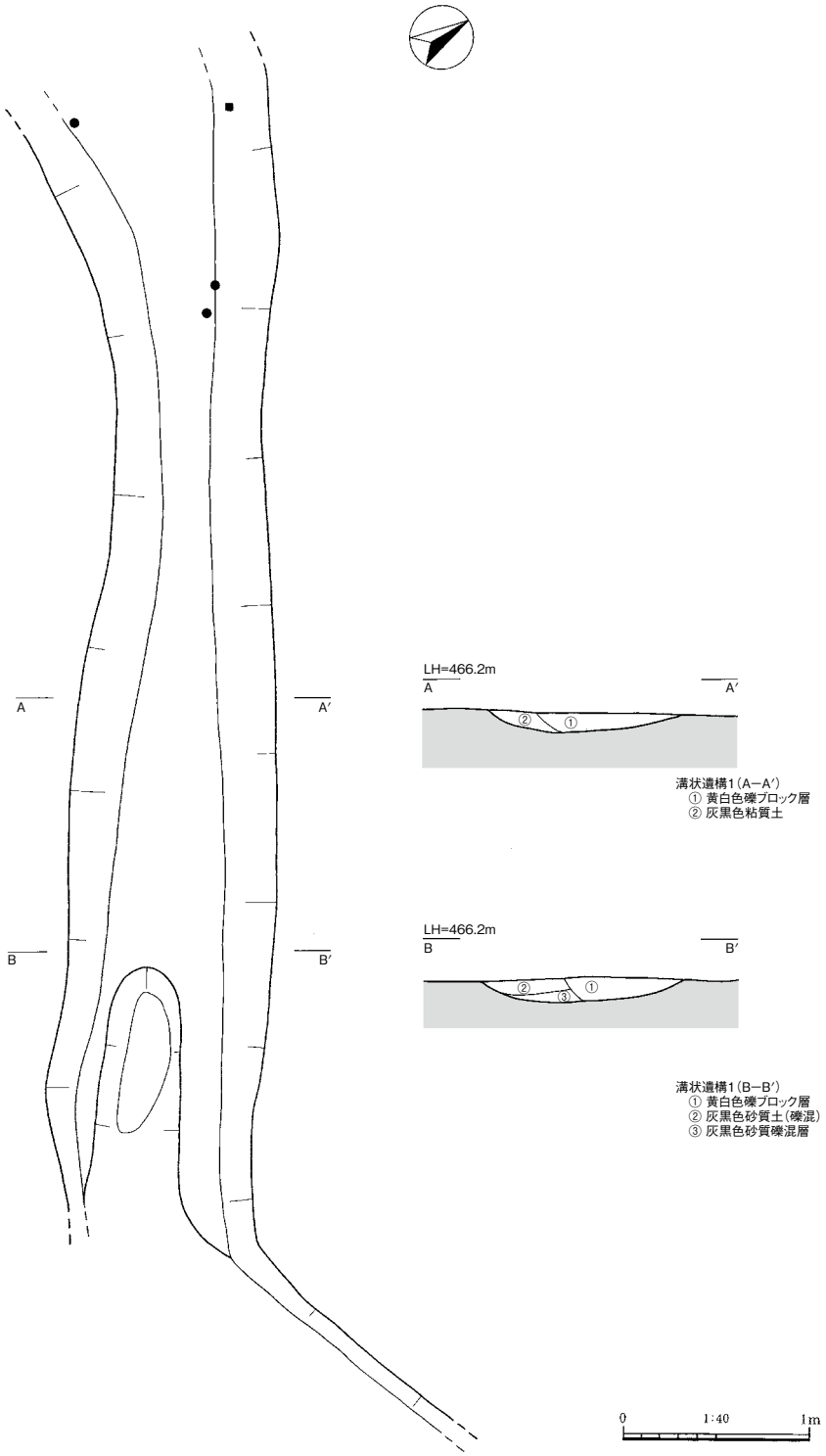
掘立柱建物１（第47図）　調査区の中央部で検出した。２間×２間の掘立柱建物であるが、北側中



第44図　新屋川添遺跡土層断面図

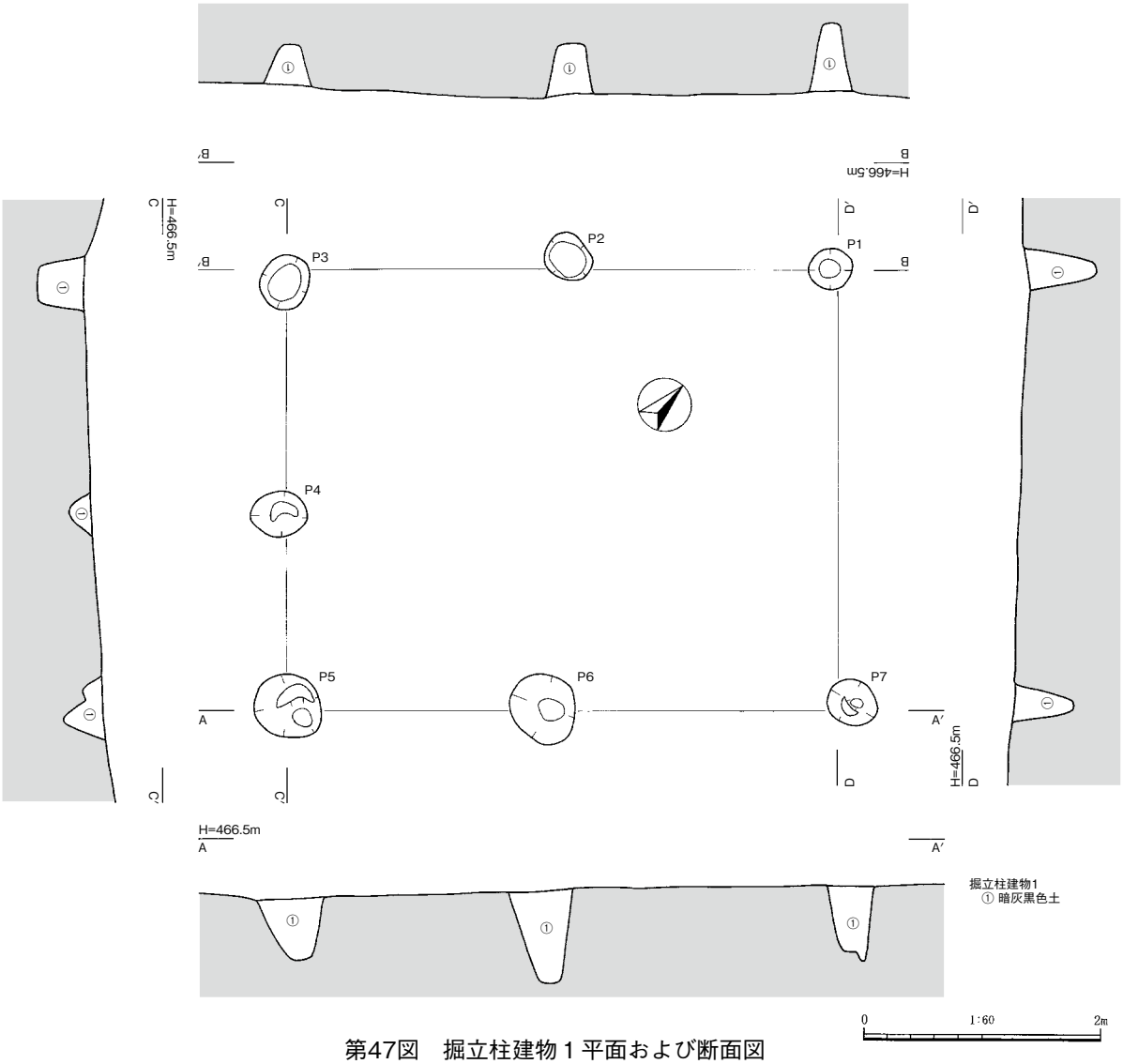


第45図　新屋川添遺跡遺構配置図



第46図　溝状遺構平面及び断面図

央の柱穴は、確認されなかったため、北側においては１間となる。規模は、長辺4.6m×短辺3.75m、主軸はN48°Ｅ方向である。柱穴の規模は、北隅から反時計回りにＰ１（40㎝×35㎝－57㎝）、Ｐ２（43㎝×38㎝－43㎝）、Ｐ３（46㎝×40㎝－44㎝）、Ｐ４（50㎝×38㎝－47㎝）、Ｐ５（60㎝×56㎝－53㎝）、Ｐ６（60㎝×56㎝－78㎝）、Ｐ７（45㎝×36㎝－64㎝）、各柱穴間は、Ｐ１－Ｐ２（2.2ｍ）、Ｐ２－Ｐ３（2.4m）、Ｐ３－Ｐ４（1.95m）、Ｐ４－Ｐ５（1.8m）、Ｐ５－Ｐ６（2.07m）、Ｐ６－Ｐ７（2.57m）、Ｐ７－Ｐ１（3.65m）である。遺物は、掘立柱建物１に伴う遺物と特定できるものはないが、周辺か

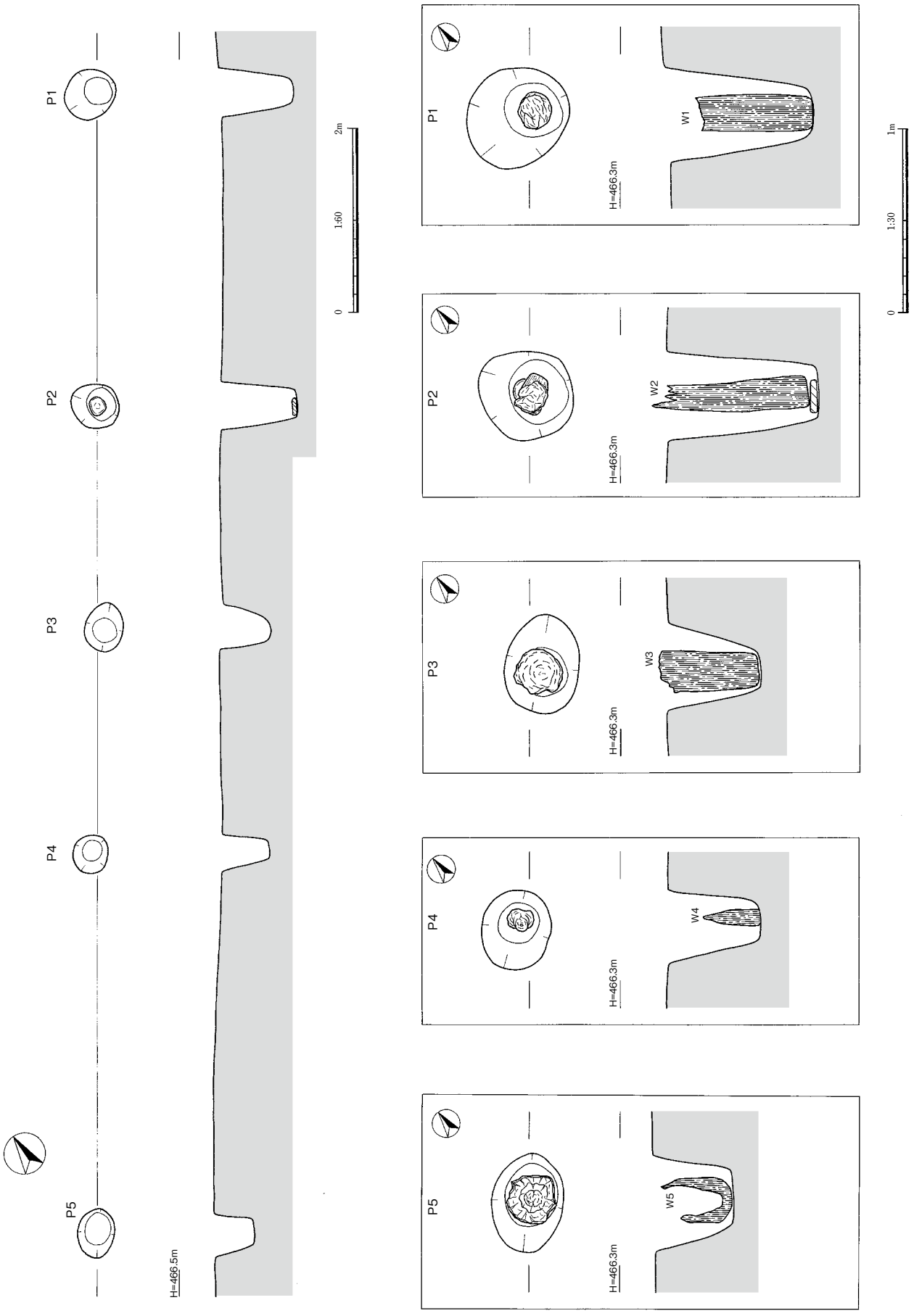


第47図　掘立柱建物１平面および断面図

ら出土している遺物から、後述する柱列、石敷遺構と同時期と考える。

３　柱列　調査区の東端で、直線状に並ぶ柱穴列を１列検出した。掘立柱建物から最も近いところで約50㎝東に位置する。

柱列（第48～52図）　調査区の東端で検出した。５基の柱穴が直線的に並んで検出された。検出した柱穴の両端間の長さ12.5m、主軸はN37°Ｅ方向である。柱穴の規模は、北側からＰ１（60㎝×52㎝－80㎝）、Ｐ２（54㎝×51㎝－85㎝）、Ｐ３（54㎝×41㎝－52㎝）、Ｐ４（43㎝×38㎝－50㎝）、Ｐ５（54㎝×40㎝－44㎝）、各柱穴間は、Ｐ１－Ｐ２（3.4m）、Ｐ２－Ｐ３（2.5m）、Ｐ３－Ｐ４（2.4m）、Ｐ４－Ｐ５（4.15m）、である。南側は調査区外にかかるため不明であるが、北側はＰ１を最後に柱の痕跡はない。柱列の西側は、建物として成立つような対応する柱穴を検出することはできなかった。柱列の東側は、調査区外に掛かる部分が多く詳細は不明であるが、最も調査区の内側にあるＰ１の東側で、調査区外まで約４ｍであったが、柱穴等を確認することはできなかった。ただ、今回検出した柱列の間隔をみると不規則であり、最も間隔の広い柱穴の間隔が４ｍを超えることから、東側に杭列が伸びる可能性はある。この柱列の性格として、掘立柱建物あるいは柵状のものが考えられる。まず、



第48図　柱列平面および断面図

第49図　柱列柱実測図１

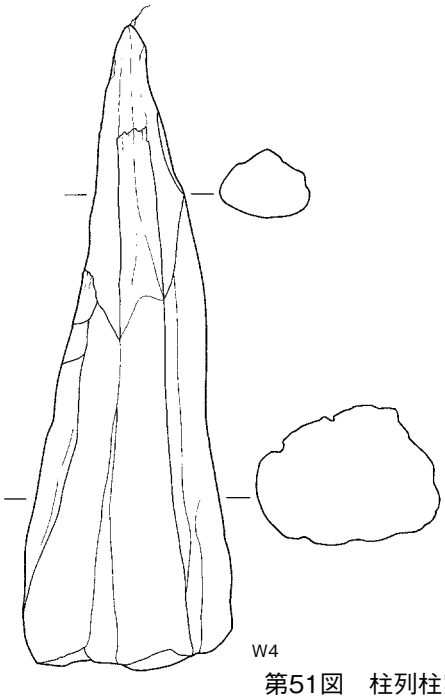
0　1:4　10cm

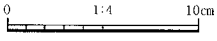
第12表　遺物観察表（新屋川添遺跡柱列）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値		
					長さ	幅	厚さ
W1	第49図	柱	木製品	柱列	※ 76.0	※ 20.8	※ 18.3
W2	第50図	柱	木製品	柱列	※ 91.2	※ 21.2	※ 18.1
W3	第51図	柱	木製品	柱列	※ 57.5	※ 22.1	※ 14.9

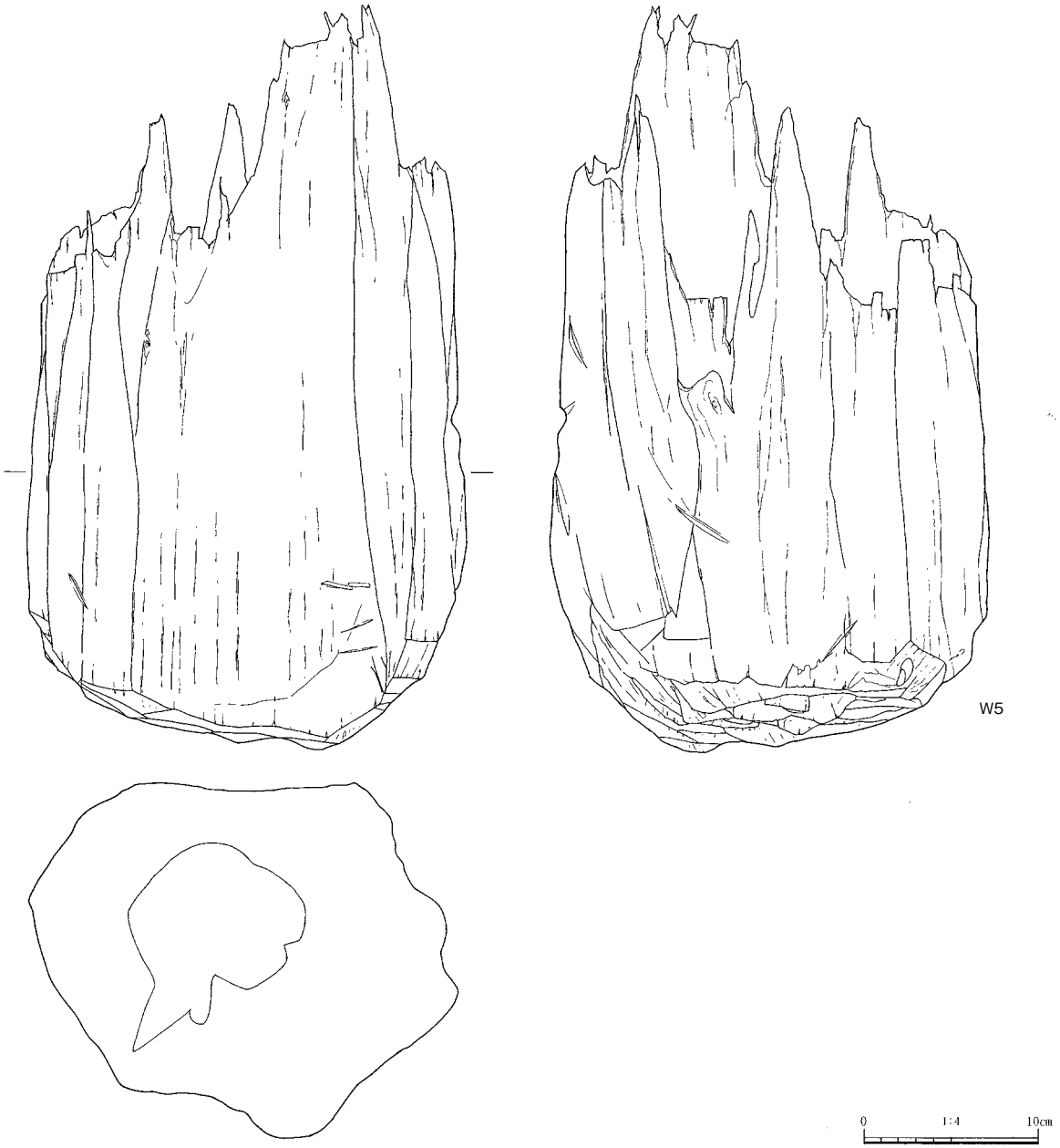
遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値		
					長さ	幅	厚さ
W4	第51図	柱	木製品	柱列	※ 34.0	※ 11.1	※ 7.2
W5	第52図	柱	木製品	柱列	※ 43.0	※ 24.8	※ 20.0

第50図　柱列柱実測図２





第51図　柱列柱実測図３



第52図　柱列柱実測図４

掘立柱建物であった場合、柱の間隔が建物としては広く、検出規模からするとかなり大型の建物になることから、可能性は低いと考える。次に何かを囲うための柵として考えた場合、西側には柱列が伸びている痕跡はなく、また東側は、山の尾根が迫っていることから、東側を囲っていたとも考えがたい。このことから、何かを遮るためか、区画をするための壁のような施設があったのではないかと考えられる。

柱穴の中から遺物は出土していないが、すべての柱穴に柱が残っていた。Ｐ１～Ｐ３の柱はいずれも底部はきれいにカットされ面を成し、周囲も面取りをされた痕跡が残る。Ｐ４・Ｐ５の柱は、前者ほど真っ平ではないがきれいに整形されている。分析の結果（第６章参照）、いずれも15世紀頃のもので、材質はクリであり、当時の植生とも一致するようである。周囲から出土している遺物との時期とも一致することから、後述する石敷遺構と関連する施設であるとも考えられる。

４　石敷遺構　調査区の中央から南側で、２基の石敷遺構を検出した。当初調査区の中央部に礫群を

検出し、大きいもので80㎝を超えるものもあり、流入した礫群か、この地特有の多里層と呼ばれる礫層の一部と考えていた。精査の過程で、表面が意図的に面を成すように揃えられた石の集積を検出した（石敷遺構１）。さらに周囲を掘下げると、この石敷遺構１から南西方向へ、拳大の石が並んで検出された。列石は北東方向にも伸び、石敷き遺構１の約１m北側で東に曲がるが、その先は、前述した礫溜りと同化して正確な様相が掴めなかった。この列石で囲まれた南側は、全体的に平坦地となる。この平坦地の南端で他の部分と比べ整地されようにもみられる。柱穴状の土坑はいくつか検出したが、建物として成立するものはなかった。

石敷遺構１（第53～55図） 長辺3.0ｍ×短辺1.2ｍの長方形を呈し、主軸は東西方向である。石敷の東側は、比較的大きな石が敷詰められ、平坦面がきれいに残っているが、西側部分は石が小さくばらけた状態であった。石の間から瓦質土器Po1、備前擂鉢Po2及び炭が出土している。炭は分析の結果（第６章参照)、15世紀前半との結果が出ており、出土遺物の時期とも一致する。

石敷遺構２（第56図） 石敷遺構１の南約9.0m、石敷遺構１から延びる石列の囲いの中に位置する。長辺2.0ｍ×短辺1.8ｍの長方形を呈し、主軸は南北方向である。中央部はかなり抜けているが、四方を取囲むように意図的に表面をそろえ平坦面を成した石が約20個残り、中央部にもいくつか面がそろった石が残る。遺物はなかったが、石の間から出土した炭の分析の結果（第６章参照)、11～12世紀との結果が出ており、石敷遺構１より古い時期のものと考えられる。

第４節　新屋川添遺跡の遺構外遺物について（第57～60図）

新屋川添遺跡では、遺構に伴うと思われる遺物は少ない。遺物の出土状況をみると、比較的調査地の東側に集中している傾向にはあるが、全体的に出土し、離れた位置での接合関係がみられる。時期的に見て、弥生時代の遺物も若干みられるが、中世の遺物が多くを占める。

Po７～Po15は、土師器の甕、Po16～Po19は土師器の坏の底部、Po20は土師器の鉢、Po21はボタン状のツマミを有する須恵器の坏蓋、Po22～Po24は土師質の鉢で、うちPo23・Po24は擂鉢である。Po25～Po32は土師質の鍋で、大きく外反する口縁部を有する。

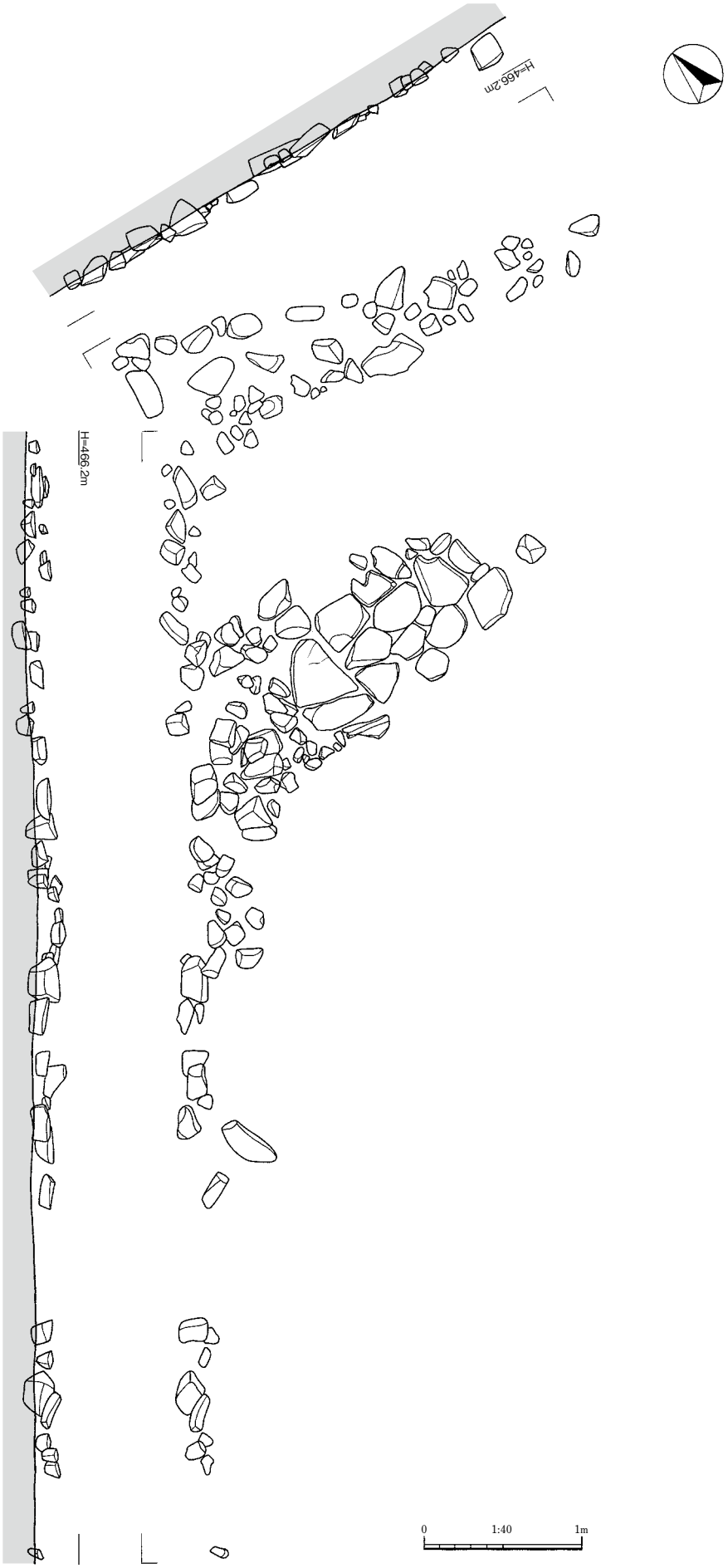
Po33～Po39、Po53～Po87は、外面に格子目叩き、内面に板状工具による掻き目を施されたいわゆる勝間田・亀山系の甕である。Po40～Po52は須恵器の鉢で、Po47・Po49は擂鉢である。Po88は、東播系の須恵器の鉢である。

Po89～Po101は輸入陶磁器である。Po89～Po94は青磁、Po95～Po99は白磁で、うちPo95・Po96は四耳壺である。Po100は中国製の青花の皿、Po101は中国製の天目茶碗である。

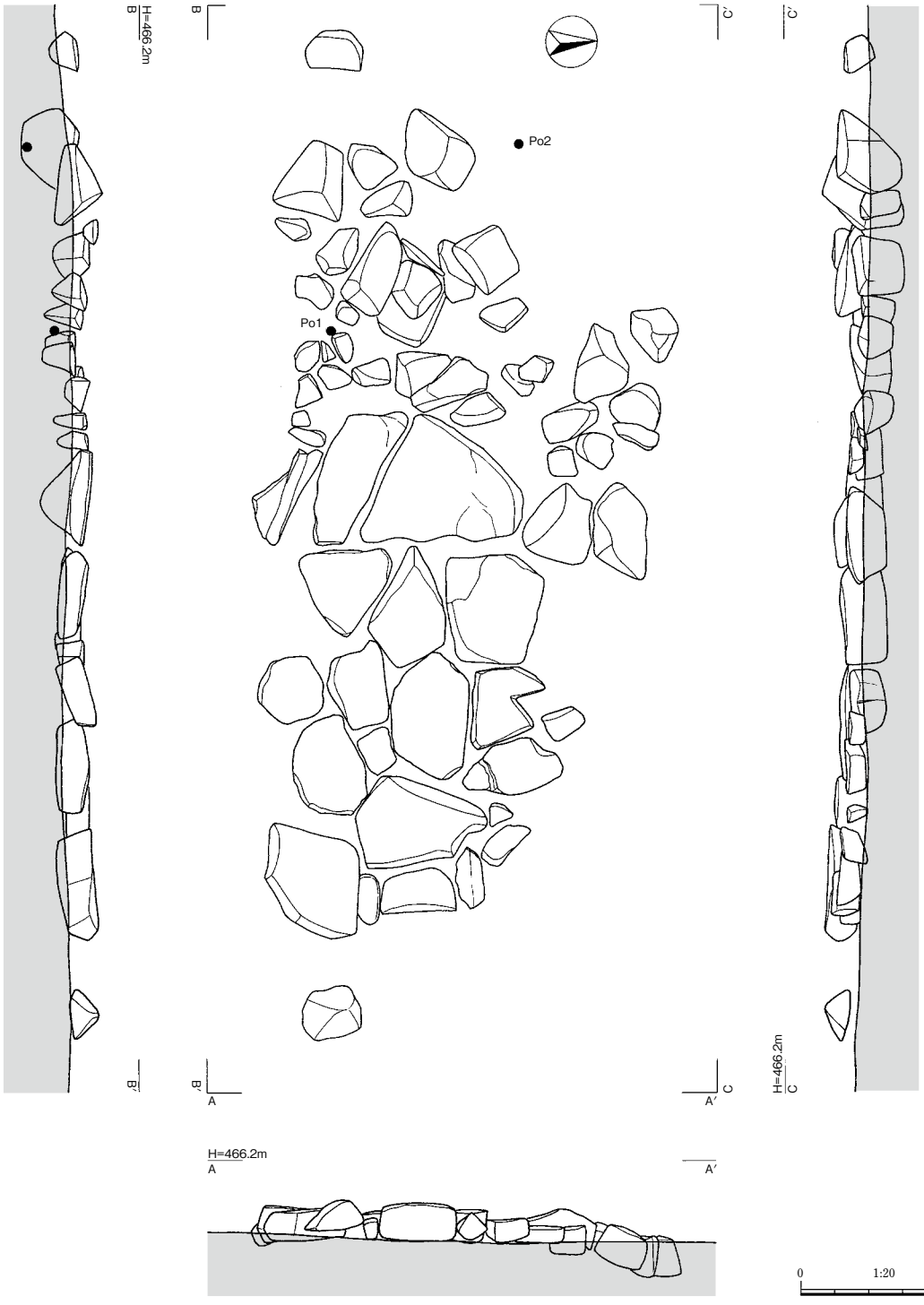
Po102～Po125国産陶磁器で、Po102は産地不明であるが室町時代の茶入れ、Po103は瀬戸の碗である。Po104～Po106は中世の備前焼の甕、擂鉢である。Po107～Po112は近世伊万里焼の染付、Po113～Po115は近世の唐津焼である。Po116～Po125は産地不明であるが近世の在地の焼き物と思われる。Po126は土師器の脚付鍋の脚部分と思われる。

Po127は石州瓦の窯道具であるハセである。Po128は煉瓦のようなものであるが用途は不明である。

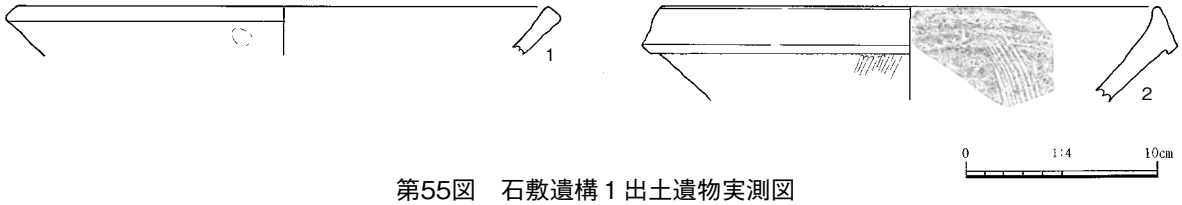
Ｆ１～Ｆ11は金属製品で、Ｆ１は耳環状を呈する。Ｆ２は角釘で、Ｆ３は鋏、Ｆ４は簪、Ｆ５は鎌で、詳細な時期は不明であるが、近世のものと考えられる。Ｆ６～Ｆ10は古銭で、全て北宋銭である。Ｓ１は砥石である。



第53図　石敷遺構１および石列平面図



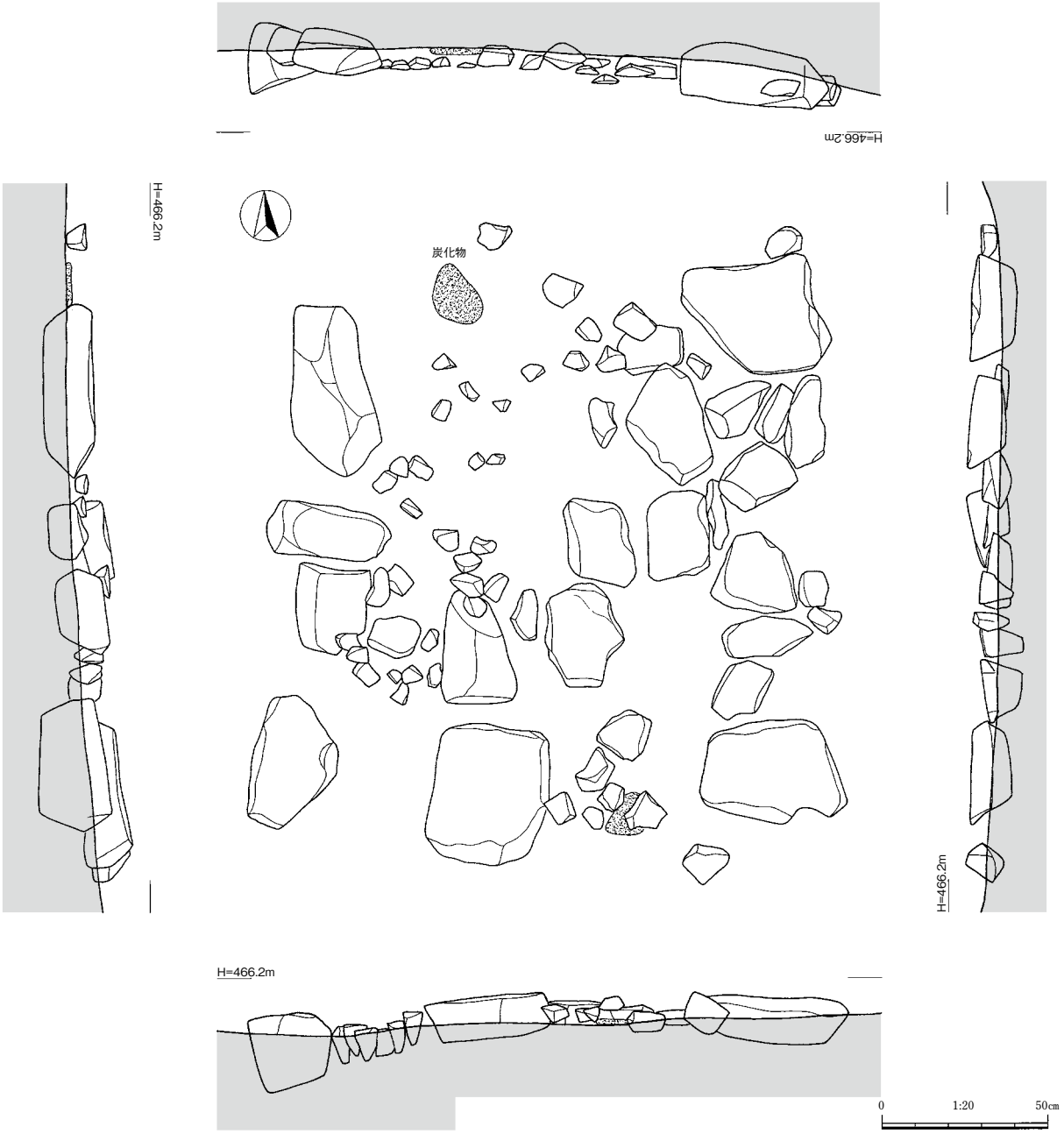
第54図　石敷遺構１平面および立面図



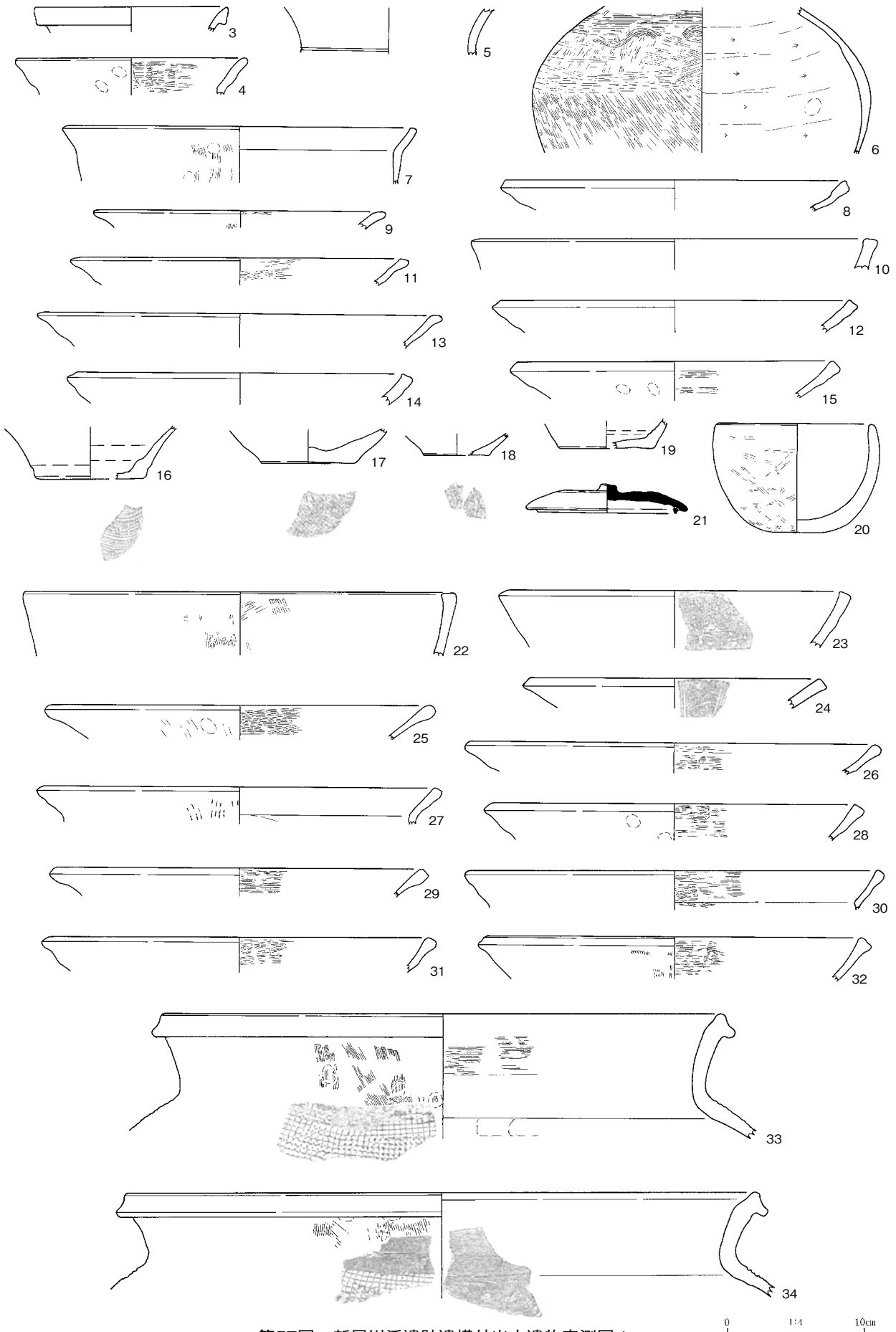
第55図　石敷遺構１出土遺物実測図

第13表　遺物観察表（新屋川添遺跡石敷遺構１）

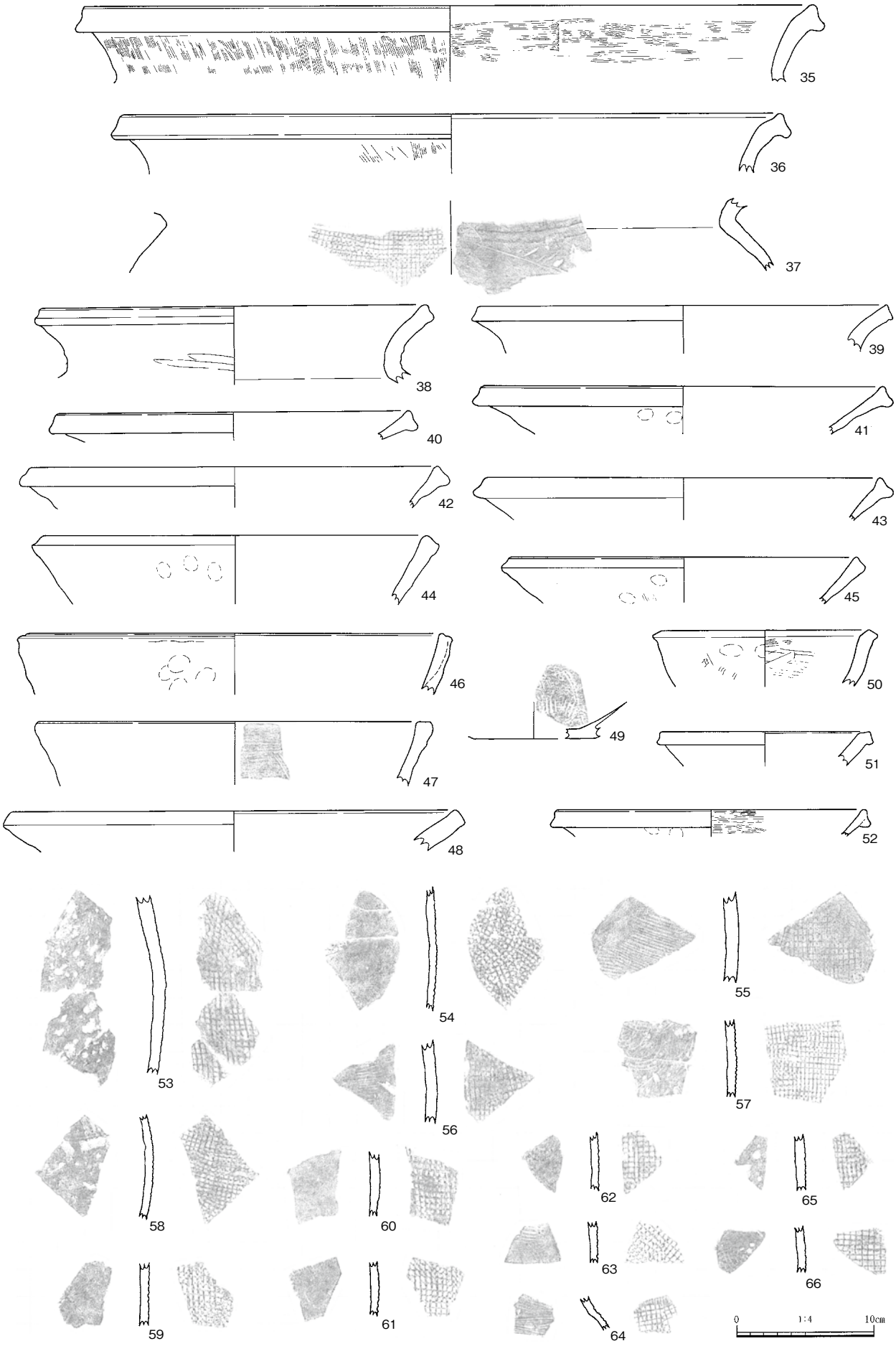
遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（㎝）※：復元値 口径	残存高	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	第55図	甕	土師器	石敷遺構１	※ 28.0	※ 2.6	良	黄灰褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	
2	第55図	擂鉢	陶器	石敷遺構１	※ 26.2	※ 5.0	良好	暗青灰色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、摺り目（7条）	備前　中世



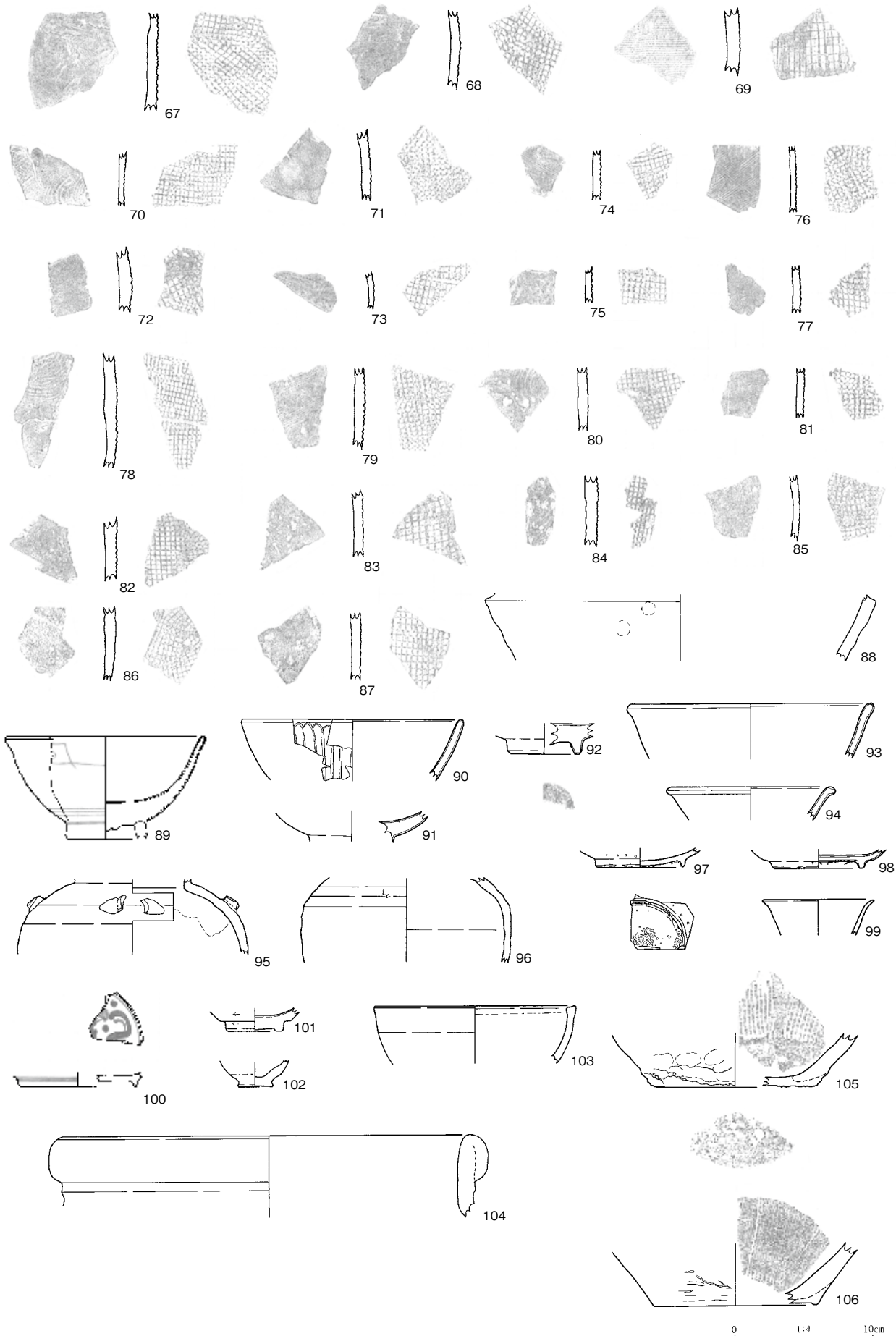
第56図　石敷遺構２平面および立面図



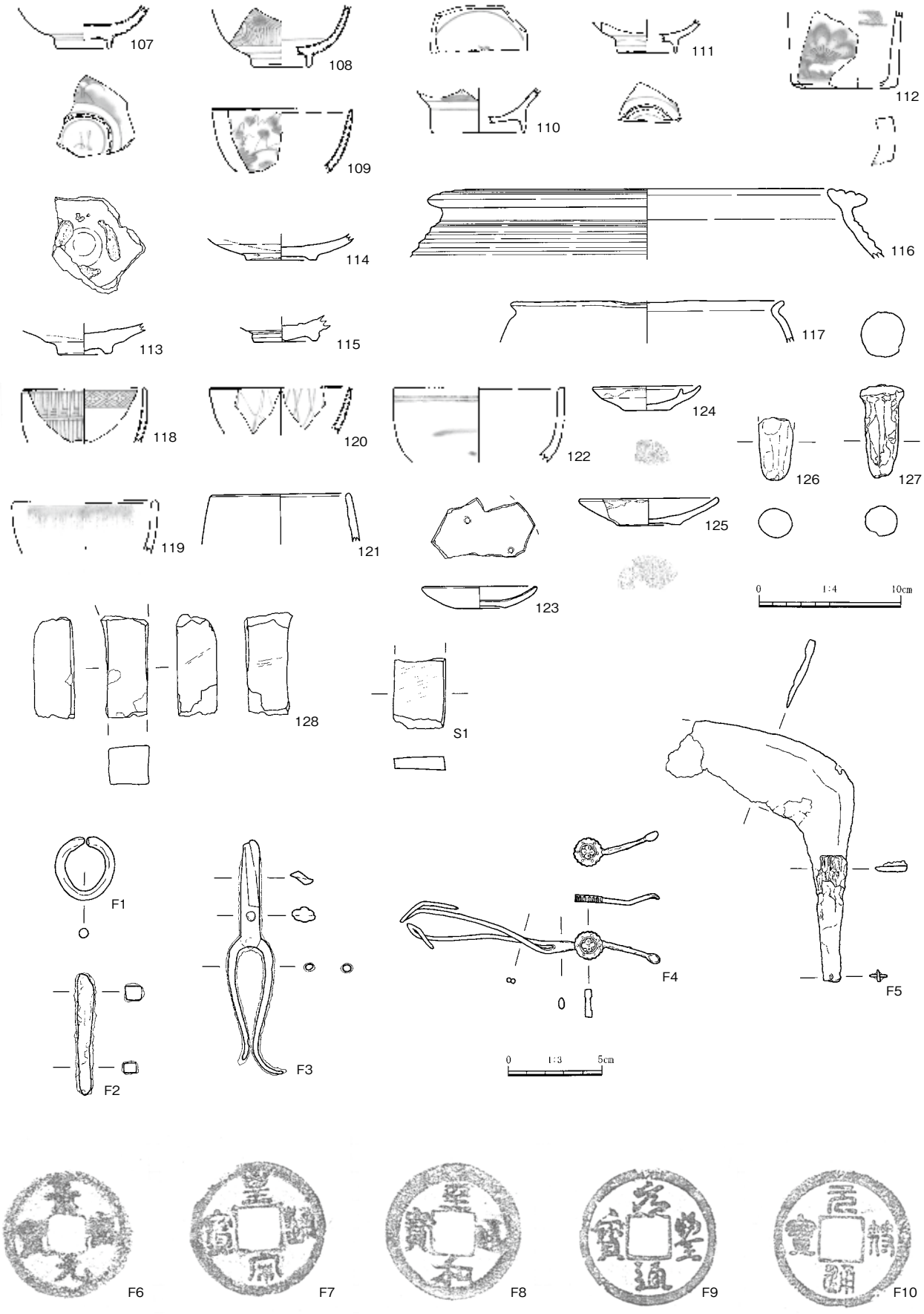
第57図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測図１



第58図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測図２



第59図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測図３



第60図　新屋川添遺跡遺構外出土遺物実測図４

第14表　遺物観察表（新屋川添遺跡遺構外１）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）　※：復元値				焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	胴径	底径					
3	第57図	甕	弥生土器	石敷周囲	※ 14.2	※ 1.8			良	淡灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：口縁部調整不明、ナデ 内面：調整不明	
4	第57図	甕	弥生土器		※ 16.8	※ 2.7			良	暗褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ハケ	
5	第57図	壺	弥生土器			※ 3.4			良	黄灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、櫛描平行線 内面：ナデ	
6	第57図	甕	土師器			※ 10.7	※ 25.0		良	灰褐色	密	外面：ハケ、波状文 内面：ケズリ	
7	第57図	甕	土師器	石敷周囲	※ 25.2	※ 4.1			良	赤褐色	密	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：調整不明　口縁部：ナデ	
8	第57図	甕	土師器	石敷周囲	※ 25.0	※ 2.2			良	灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ　口縁部：ハケ	
9	第57図	甕	土師器		※ 21.5	※ 1.3			良	黄橙灰色	密	外面：ナデ 内面：ハケ	外面煤付着
10	第57図	鍋	土師器		※ 28.0	※ 2.3			良	淡褐色土	密	外面：ナデ 内面：ナデ	外面煤付着
11	第57図	甕	土師器		※ 23.8	※ 2.0			良	黄灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
12	第57図	甕	土師器		※ 25.8	※ 2.3			良	灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
13	第57図	甕	土師器	石敷周囲	※ 30.0	※ 2.5			良	灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
14	第57図	甕	土師器		※ 24.0	※ 2.3			良	淡褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
15	第57図	鍋	土師器	石敷周囲	※ 23.3	※ 2.7			良	淡褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケ	外面煤付着
16	第57図	坏	磁器			※ 3.9		※ 7.6	良	橙灰色	密	外面：ナデ　底部：回転糸切り 内面：ナデ	
17	第57図	坏	土師器			※ 2.6		※ 6.9	良	灰褐色	密　雲母、石英、砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	
18	第57図	皿	土師器			※ 1.6		※ 4.9	良	灰褐色	密	外面：ナデ　底部：回転糸切り 内面：ナデ	
19	第57図	坏	土師器			※ 2.1		※ 6.8	良	橙灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
20	第57図	鉢	土師器		※ 11.3	8.0			良	淡灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ後ナデ 内面：調整不明	
21	第57図	坏蓋	須恵器		※ 10.2	※ 1.5		1.6（ツマミ径）	良好	灰色	密	外面：ケズリ、ナデ ツマミ部：ナデ 内面：ナデ	
22	第57図	甕	土師器		※ 31.8	※ 4.7			良	黄橙褐色	密　雲母、砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ	
23	第57図	擂鉢	土師器		※ 24.4	※ 4.2			良	灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ、摺り目	
24	第57図	擂鉢	陶器		※ 21.4	※ 2.2			良	淡褐色	密	外面：ナデ 内面：摺り目	
25	第57図	鍋	土師器		※ 28.2	※ 2.5			良	淡灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ハケ	外面煤付着
26	第57図	鍋	土師質		※ 29.8	※ 2.2			良	灰褐色	密	外面：回転ナデ 内面：ハケ	外面煤付着
27	第57図	甕	土師質		※ 28.9	※ 2.7			良	灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ケズリ	
28	第57図	鍋	土師質		※ 26.8	※ 2.7			良	灰褐色	密	外面：ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ	外面煤付着
29	第57図	甕	土師器		※ 26.8	※ 2.1			良	黄灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ハケ	
30	第57図	鍋	土師質		※ 30.0	※ 2.9			良	淡灰褐色	密	外面：調整不明　口縁部：ナデ 内面：ハケ	外面煤付着
31	第57図	鍋	土師質		※ 28.0	※ 2.6			良	灰褐色	密　雲母、砂粒含	外面：ナデ 内面：ハケ	外面煤付着
32	第57図	甕	土師質		※ 27.4	※ 3.1			良	灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ後ナデ 内面：ナデ、ハケ	
33	第57図	甕	須恵器		※ 41.0	※ 9.2			良好	黒灰色	密　雲母、砂粒含	外面：ナデ、ハケ、格子目タタキ 内面：ハケ、ナデ、ケズリ	
34	第57図	甕	須恵器		※ 52.0	※ 7.7			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：ナデ、ハケ、格子目タタキ 内面：ナデ	
35	第58図	甕	須恵器		※ 54.0	※ 5.6			良好	外面：黒灰色 内面：灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	
36	第58図	甕	須恵器		※ 48.4	※ 4.4			良	灰色	密　白色砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	
37	第58図	甕	須恵器			※ 5.4			良	鈍い黄褐色	密	外面：ナデ、格子目タタキ 内面：ヘラ状、 ハケ状工具によるナデ	
38	第58図	甕	須恵器		※ 28.2	※ 5.7			良	灰色	密　白色砂粒、1㎜大砂粒含	外面：ナデ 内面：ナデ	
39	第58図	甕	須恵器	石敷周囲	※ 30.0	※ 3.5			良	黒灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
40	第58図	甕	須恵器		※ 25.8	※ 2.1			良	淡灰褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	外面煤付着
41	第58図	甕	須恵器		※ 29.5	※ 3.5			良	暗灰色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	
42	第58図	鍋	須恵器		※ 30.0	※ 3.0			良	黒灰褐色	密　雲母、石英、砂粒含	外面：ナデ 内面：ナデ	外面煤付着
43	第58図	甕	須恵器		※ 29.0	※ 3.1			良	外面：暗灰色 内面：褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
44	第58図	鉢	須恵器		※ 28.2	※ 5.0			良	灰褐色	密　雲母、石英、砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：調整不明	
45	第58図	甕	須恵器	石敷周囲	※ 25.5	※ 3.4			良	淡灰褐色	密	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ	
46	第58図	鉢	須恵器	石敷周囲	※ 30.2	※ 4.5			良	外面：灰色 内面：浅黄橙色、灰色	密　1㎜大砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	
47	第58図	擂鉢	須恵器		※ 28.8	※ 4.7			良	灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ、摺り目	

第15表　遺物観察表（新屋川添遺跡遺構外２）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値				焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	胴径	底径					
48	第58図	壺	須恵器		※ 32.6	※ 3.0			良	灰色	密　白色砂粒含	外面：ナデ 内面：ナデ	
49	第58図	擂鉢	須恵器			※ 2.7		※ 9.0	良	灰褐色	密	外面：底部ハケ 内面：調整不明、摺り目	
50	第58図	鉢	須恵器		※ 15.2	※ 4.1			良	灰色	密	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ	
51	第58図	甕	須恵器		※ 15.4	※ 2.5			良	灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
52	第58図	甕	須恵器		※ 22.7	※ 2.0			良	灰色	密	外面：ナデ 内面：ハケ	
53	第58図	甕	須恵器			※ 13.2			良	外面：灰色 暗灰色 内面：浅黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
54	第58図	甕	須恵器			※ 9.1			良	外面：黄灰色 内面：鈍い黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、指頭圧痕	
55	第58図	甕	須恵器			※ 6.7			良	灰色	密　１㎜大砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、指頭圧痕	
56	第58図	甕	須恵器			※ 6.1			良	外面：黄灰色 内面：黒色	密　白色砂、 １㎜大砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
57	第58図	甕	須恵器			※ 5.7			良	黒色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ、当具痕	
58	第58図	甕	須恵器			※ 7.7			良	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ状工具によるナデ	
59	第58図	甕	須恵器			※ 4.7			良	外面：黒色 内面：灰黄褐色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
60	第58図	甕	須恵器			※ 4.8			良	外面：褐灰色 内面：鈍い黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
61	第58図	甕	須恵器			※ 4.0			良	外面：黄灰色 内面：鈍い黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
62	第58図	甕	須恵器			※ 4.3			良好	暗灰色	密　白色砂、 １㎜大砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：当具痕後ナデ	
63	第58図	甕	須恵器			※ 3.1			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、指頭圧痕	
64	第58図	甕	須恵器	石敷周囲		※ 2.5			良好	灰色	密	外面：ハケ、格子目タタキ 内面：ハケ	
65	第58図	甕	須恵器			※ 4.2			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
66	第58図	甕	須恵器			※ 3.4			良	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：当具痕	
67	第59図	甕	須恵器			※ 7.1			良好	灰黄色	密	外面：格子目タタキ 内面：当具痕後ハケ	
68	第59図	甕	須恵器			※ 5.8			良好	褐灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ状工具によるナデ	
69	第59図	甕	須恵器			※ 5.0			良好	外面：褐灰色 内面：灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
70	第59図	甕	須恵器			※ 4.1			良好	黄灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：当具痕後ハケ	
71	第59図	甕	須恵器			※ 5.2			良	灰黄色　黒色	密　石英、雲母含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ、指頭圧痕	
72	第59図	甕	須恵器			※ 4.8			良好	灰色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ、ナデ 内面：ナデ	
73	第59図	甕	須恵器			※ 2.9			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ状工具によるナデ	
74	第59図	甕	須恵器			※ 3.7			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ	
75	第59図	甕	須恵器			※ 2.6			良好	灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：当具痕後ハケ	
76	第59図	甕	須恵器			※ 4.8			良	灰黄褐色 褐灰色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、指頭圧痕	
77	第59図	甕	須恵器	石敷周囲		※ 3.5			良	鈍い黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ状工具によるナデ	
78	第59図	甕	須恵器			※ 8.3			良	橙色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ、当具痕	
79	第59図	甕	須恵器			※ 5.9			良	鈍い黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、指頭圧痕	
80	第59図	甕	須恵器			※ 4.6			良	灰白色	密　石英含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ、当具痕	
81	第59図	甕	須恵器			※ 3.7			良	鈍い黄橙色	密　石英、白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ハケ、指頭圧痕	
82	第59図	甕	須恵器			※ 4.7			良	橙色	密　白色砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
83	第59図	甕	須恵器			※ 4.9			良	橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
84	第59図	甕	須恵器			※ 6.7			良	橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：当具痕	
85	第59図	甕	須恵器			※ 4.8			良	灰黄褐色	密　１㎜大砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ハケ後ナデ	
86	第59図	甕	須恵器			※ 5.4			良	浅黄橙色 黄灰色	密　石英、 １㎜大砂粒含	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
87	第59図	甕	須恵器	石敷周囲		※ 5.0			良	浅黄橙色	密	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	
88	第59図	鉢	須恵器			※ 4.8			良	淡灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	東播系（中世）
89	第59図	碗	青磁		※ 14.4	7.5		※ 5.6	良好	明オリーブ灰色	密	外面：施釉、底部露胎 内面：施釉	
90	第59図	碗	青磁	石敷周囲	※ 16.0	※ 4.5			良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉　貫入 内面：施釉　貫入	
91	第59図	碗	青磁			※ 2.3			良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉　貫入 内面：施釉	
92	第59図	碗	青磁	石敷周囲		※ 2.2		※ 5.0	良好	オリーブ黄色	密	外面：施釉　底部：回転糸切り 内面：施釉　貫入	
93	第59図	鉢	青磁		※ 17.6	※ 4.0			良好	灰オリーブ色	密	外面：施釉　貫入 内面：施釉　貫入	

第16表　遺物観察表（新屋川添遺跡遺構外３）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 口径	残存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
94	第59図	鉢	青磁	石敷周囲	※ 11.4	※ 2.4			良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	
95	第59図	四耳壺	白磁			※ 5.5			良好	灰白色	密	外面：施釉 内面：肩部まで施釉	
96	第59図	四耳壺	白磁			※ 6.2	※ 15.3		良好	灰白色	密	外面：施釉　把手痕有 内面：ナデ	
97	第59図	皿	白磁			※ 1.4		※ 6.2	良好	白色	密	外面：施釉　底部砂付着 畳付露胎 内面：施釉	
98	第59図	皿	白磁			※ 1.4		※ 6.4	良好	白色	密	外面：施釉　畳付露胎 内面：施釉	
99	第59図		白磁		※ 8.0	※ 2.6			良好	灰白色	密	外面：施釉　貫入 内面：施釉　貫入	
100	第59図	皿	青華	石敷周囲		※ 1.1		※ 8.5	良好	灰白色	密	外面：施釉　高台：畳付露胎、 砂目 内面：施釉	
101	第59図	天目茶碗	陶器	石敷周囲		※ 1.7		4.0	良好	褐灰色	密	外面：ケズリ 内面：施釉	
102	第59図	茶入	陶器	石敷周囲		※ 1.9		※ 2.55	良好	黒褐色	密	外面：施釉　底部：露胎 内面：露胎	
103	第59図	碗	磁器	石敷周囲	※ 14.8	※ 4.2			良好	灰オリーブ色	密	外面：施釉 内面：口縁部施釉	瀬戸焼
104	第59図	大甕	陶器	石敷周囲	※ 30.0	※ 6.0			良好	外面：暗赤褐色 内面：赤褐色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	備前
105	第59図	擂鉢	陶器	石敷周囲		※ 4.0		※ 12.0	良	外面：暗赤灰色 内面：褐灰色	密　白色砂、 2㎜以下砂粒含	外面：ナデ、指頭調整 内面：ナデ、摺り目	備前
106	第59図	擂鉢	陶器	石敷周囲		※ 4.5		※ 12.0	良好	外面：赤褐色 内面：褐灰色	密　白色砂粒含	外面：ナデ 内面：摩耗、摺り目	備前
107	第60図	染付碗	磁器			※ 3.1		※ 4.0	良好	灰色	密	外面：施釉　畳付露胎 内面：施釉	伊万里
108	第60図	染付碗	磁器			※ 4.3		※ 4.0	良好	白色	密	外面：施釉、底部一部・ 畳付露胎 内面：施釉	伊万里
109	第60図	染付碗	磁器		※ 10.0	※ 4.5			良好	白色	密	外面：施釉 内面：施釉	伊万里
110	第60図	染付碗	磁器			※ 3.2		※ 6.6	良好	灰白色	密	外面：施釉　高台畳付露胎 内面：施釉	伊万里
111	第60図	染付碗	磁器			※ 2.3		※ 4.2	良好	灰白色	密	外面：施釉　高台畳付露胎 内面：施釉	伊万里
112	第60図	筒形碗	磁器			※ 5.6		※ 7.4	良好	灰白色	密	外面：施釉 内面：施釉	伊万里
113	第60図	皿	陶器			※ 2.2		3.9	良好	灰黄色	密	外面：施釉　底部・高台露胎 内面：施釉　見込砂目有	唐津
114	第60図	皿	陶器			※ 1.9		※ 5.0	良好	灰オリーブ色	密	外面：ケズリ後ナデ、ケズリ 内面：施釉	唐津
115	第60図	碗	陶器			※ 1.8		※ 4.4	良好	黄褐色	密	外面：ナデ 内面：灰釉	唐津17C前半
116	第60図	甕	陶器		※ 26.2	※ 5.0			良好	褐色	密	外面：ナデ、鉄釉 内面：ナデ、鉄釉	口縁端部3条平行沈線
117	第60図	甕	陶器		※ 19.6	※ 3.0			良好	灰黄色	密	外面：施釉 内面：施釉	在地
118	第60図	碗	磁器	石敷周囲	※ 8.6	※ 3.9			良好	灰白色	密	外面：施釉　貫入 内面：施釉　貫入	在地
119	第60図	碗	陶器		※ 10.0	※ 3.7			良好	青緑色	密	外面：施釉 内面：施釉	在地
120	第60図	碗	磁器		※ 10.0	※ 3.3			良好	灰白色	密	外面：施釉 内面：施釉	在地
121	第60図	碗	陶器		※ 9.6	※ 3.5			良好	オリーブ灰色	密	外面：施釉 内面：施釉	在地
122	第60図	碗	陶器		※ 12.0	※ 5.4			良好	灰オリーブ色	密	外面：施釉　貫入 内面：施釉　貫入	在地
123	第60図	皿	陶器		※ 7.9	1.6		3.6	良	外面：灰黄色 内面：灰白色	密	外面：ナデ 内面：施釉　見込粘土痕有	在地
124	第60図	燈明皿	陶器		※ 7.6	1.7		※ 3.4	良好	淡黄色	密	外面：露胎　底部：回転糸切り 内面：施釉	在地
125	第60図	皿	陶器	石敷周囲	※ 9.8	1.9		※ 4.4	良好	外面：橙色 内面：暗赤褐色	密	外面：回転ナデ 底部：回転糸切り 内面：施釉	在地
126	第60図	鍋の足	土師器			※ 4.5	※ 2.4		良好	鈍い黄橙色	密　石英・白色砂粒含	外面：指頭圧調整	
127	第60図	ハセ	陶器			※ 6.6	3.1		良好	褐色	密	外面：頭部に施釉 体部施釉痕	石州瓦の窯道具
128	第60図	レンガ	土製品		※ 7.2	3.2	2.8		良	赤褐色	密		

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量（cm）※：復元値 長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
F1	第60図	耳環	金属製品		3.3	3.2	0.5	10.6	真鍮
F2	第60図	釘	金属製品		6.5	1.2	1.0	20.6	鉄製品
F3	第60図	鋏	金属製品		12.5	3.2	9.0	27.2	鉄製品
F4	第60図	簪	金属製品		※ 13.8	1.5	0.35	11.0	青銅製
F5	第60図	鎌	金属製品		12.7	10.8	0.6	33.5	鉄製品
F6	第60図	古銭	金属製品		2.3	2.3	0.1	2.9	景徳元寶（北宋　1004年）
F7	第60図	古銭	金属製品		2.4	2.4	0.15	2.5	皇宋通寶（北宋　1038年）
F8	第60図	古銭	金属製品		2.5	2.5	0.1	2.0	至和通寶（北宋　1054年）
F9	第60図	古銭	金属製品		2.5	2.5	0.15	3.0	元豊通寶（北宋　1078年）
F10	第60図	古銭	金属製品		2.5	2.5	0.12	2.1	元符通寶（北宋　1098年）
S1	第60図	砥石	石製品		※ 5.0	3.7	0.9	31.8	

第５章　まとめ

新屋地区では、平成27年に調査された新屋石浦ノ空遺跡の縄文時代晩期の竪穴建物が最も古く遡る人間の生活痕跡であり、その後、どのようにして人々が山深い新屋の地に定着していったのか、その過程は解明されていなかった。

今回の調査によって、新屋小タイ田遺跡が６世紀後半から７世紀にかけて営まれた集落であったことが判明した。また、新屋小タイ田遺跡から弥生時代の土器が出土していることや、周辺に多里古墳群、新屋古墳といった古墳が分布していることから、少なくとも調査地周辺において、弥生時代前期から中近世まで断続的に人々が生活していた状況が窺える。

新屋小タイ田遺跡から西へ100mほどの地点には、新屋道ノ上大フケ遺跡が所在している。この遺跡は、昭和56年に圃場整備に伴い発掘調査されたもので、遺構などの詳細は不明であるが、大量の土器が出土しており、大半の遺物は新屋小タイ田遺跡から検出された竪穴建物と同時期のものである。出土した土器の中には完形に近いものも含まれていることから、竪穴建物などの遺構に伴う遺物であったと考えられる。このことから、新屋道ノ上大フケ遺跡から新屋小タイ田遺跡にかけての範囲に、古墳時代後期から古代の大規模な集落が存在したと推測される。「新屋」の地名は、新しい屋(家)という意味に起因することが容易に推察されるが、集落の開始時期が古代にまで遡ることは、新屋の地名起源についても一考を促す資料であろう。

新屋川添遺跡は、出土した遺物から中世を主体とする遺跡であることが判明した。残念ながら、中世の遺構については具体的な性格を掴むことができなかったが、日南町内には中世山城が数多く分布しており、新屋・多里地区においても亀尾山城、湯谷城、多里所在城が築城されていることから、山陰と山陽を隔てる最前線に位置する新屋・多里地区は、戦略・防衛において重要な場所であったと推測される。また、亀山系の土器や貿易陶磁器、北宋銭など活発な交易を窺わせる資料が見つかっていることから、山陰と山陽を結ぶ中継地点としての役割も担っていたのであろう。恐らく、新屋川添遺跡がこれらの交易を行った中世集落の一角に相当すると考えられる。

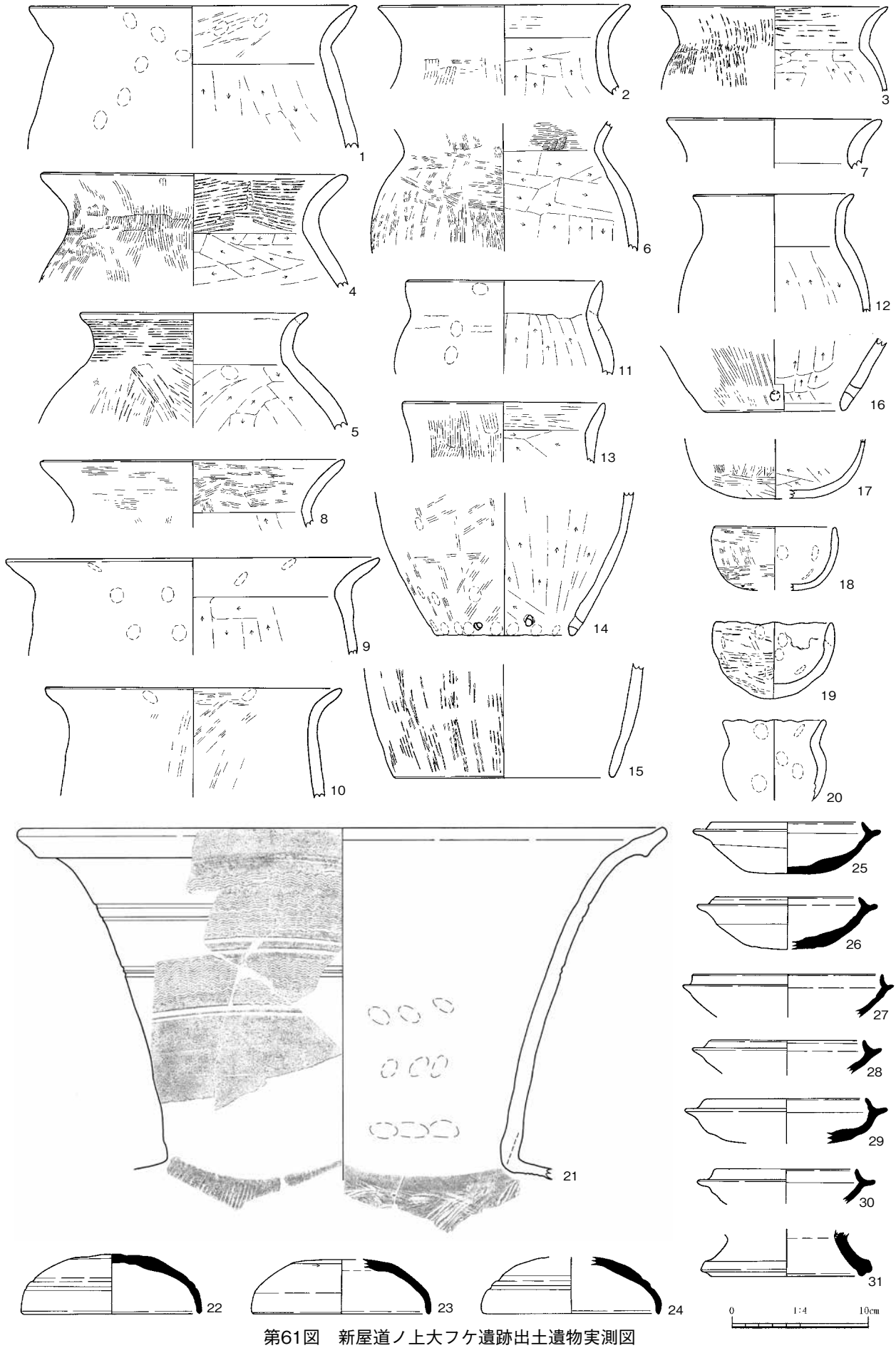
以上のことから、新屋地区では縄文時代晩期から人々が生活するようになり、古代から中世にかけて集落活動がより活発化したと推測される。特に、今回の調査では鉄滓が数多く出土していることから、この周辺に鉄生産を行う集団が存在したと考えられる。日野川の最上流域に位置する新屋地区において、鉄生産の開始時期が中世を飛び越えて古代にまで遡るのか、今後の調査によって更なる解明がなされることを期待する。

引用・参考文献

日南町史編纂審議委員会編　1984『日南町史』自然・文化　日南町

濵 隆造、中森 祥、森田結城編　2001『霞遺跡群』㈶鳥取県教育文化財団

門脇豊文編　2016『新屋石浦ノ空遺跡発掘調査報告書』日南町教育委員会



第61図　新屋道ノ上大フケ遺跡出土遺物実測図

第17表　遺物観察表（新屋道ノ上大フケ遺跡）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	法量（cm）※：復元値 口径	残存高	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	第61図	甕	土師器	※ 24.2	10.5		良	灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ハケ、ケズリ、指頭圧痕	外面煤付着
2	第61図	甕	土師器	※ 18.7	6.7		良	灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ、ケズリ	
3	第61図	甕	土師器	※ 16.6	6.2		良	橙灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ、ケズリ	
4	第61図	甕	土師器	※ 22.8	8.3		良	橙褐色	密	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ、ケズリ	
5	第61図	甕	土師器	※ 16.8	8.5		良	暗橙褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ケズリ	外面煤付着
6	第61図	甕	土師器		9.5		やや良	灰褐色	密	外面：ハケ 内面：ハケ、ケズリ	外面煤付着
7	第61図	甕	土師器	※ 15.8	3.7		良	橙灰褐色	密	外面：調整不明 内面：口縁部調整不明、ケズリ	
8	第61図	甕	土師器	※ 22.4	5.0		良	橙灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ、ケズリ	
9	第61図	甕	土師器	※ 27.7	7.2		良	橙灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ、指頭圧痕	
10	第61図	甕	土師器	※ 21.8	8.1		良	橙灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ、ハケ、指頭圧痕 内面：ハケ、指頭圧痕	
11	第61図	甕	土師器	※ 14.4	6.9		良	橙灰褐色	密　石英、1～4㎜砂粒含	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ	内面黒斑
12	第61図	甕	土師器	※ 11.8	8.7		良	橙灰褐色	密　石英、砂粒含	外面：ナデ 内面：ナデ、ケズリ	
13	第61図	甕	土師器	※ 14.9	4.5		良	淡橙褐色	密	外面：ハケ 内面：ハケ、ケズリ	
14	第61図	甑	土師器		10.6	※ 10.2	良	灰褐色	密	外面：刷毛、ナデ、指頭圧痕 内面：ケズリ、ナデ、指頭圧痕	穿孔痕残
15	第61図	甑	土師器		8.4	※ 16.2	良	黄橙褐色	密　石英、砂粒含	外面：ハケ 内面：調整不明	
16	第61図	甑	土師器		5.3	※ 10.0	良	鈍い黄橙色	密　石英、砂粒多く含	外面：ハケ、ナデ 内面：ケズリ	穿孔痕残
17	第61図	壺	土師質		4.4		良	浅黄橙色	密　石英、砂粒多く含	外面：ハケ、ナデ 内面：ケズリ後ナデ	
18	第61図	碗	土師器	※ 8.9	4.7		やや良	橙褐色	密	外面：ハケ 内面：ナデ、指頭圧痕	
19	第61図	手づくね	土師器	※ 8.7	※ 5.7		良	黄橙褐色	密	外面：ハケ、指頭圧痕 内面：ナデ、ケズリ、指頭圧痕	
20	第61図	手づくね	土師器	※ 7.6	6.0		良	橙灰褐色	密	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	
21	第61図	甕	須恵器	※ 48.0	26.0		良好	灰色	密	外面：ナデ、タタキ、指頭圧痕 内面：ナデ、当具痕、指頭圧痕	2条沈線、波状文
22	第61図	坏蓋	須恵器	※ 13.1	※ 4.4		良好	黄灰色	密　石英、白色砂粒含	外面：ケズリ、ナデ 内面：ナデ	
23	第61図	坏蓋	須恵器	※ 13.0	4.0		良好	灰色	密	外面：ケズリ、ナデ 内面：ナデ	
24	第61図	坏蓋	須恵器	※ 13.0	4.2		良好	灰色	密	外面：ケズリ後ナデ、ナデ 内面：ナデ	
25	第61図	坏身	須恵器	※ 11.2	※ 3.8		良好	灰色	密	外面：ナデ、ケズリ 内面：ナデ	
26	第61図	坏身	須恵器	※ 10.8	※ 3.9		良好	灰色	密	外面：ナデ、ケズリ後ナデ 内面：ナデ	
27	第61図	坏身	須恵器	※ 14.0	3.2		良	浅黄橙色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
28	第61図	坏身	須恵器	※ 11.4	2.5		良好	灰色	密　砂粒、黒色砂粒多く含	外面：ナデ 内面：ナデ	外面自然釉付着
29	第61図	坏身	須恵器	※ 12.0	※ 3.3		良好	灰色	密 白色砂粒含	外面：ナデ、ケズリ 内面：ナデ	
30	第61図	坏身	須恵器	※ 10.4	2.6		良好	灰色	密	外面：ナデ 内面：ナデ	
31	第61図	台付壺	須恵器		3.5	※ 11.2	良	灰色	密　石英、白色砂粒含	外面：ナデ 内面：ナデ	脚部

第６章　理化学的分析

新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

第１節　放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、新屋小タイ田遺跡と新屋川添遺跡における遺構構築年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.，の協力を得た。

２．試料と方法

測定試料は、新屋小タイ田遺跡の水路状遺構１より出土した木材（試料１）、水路状遺構２より出土した木材（試料２）、竪穴建物２より出土した炭化材（試料３，４）、新屋川添遺跡で出土した柱列の柱痕（試料６～８）、石敷遺構１より出土した炭化材（試料10）、石敷遺構２より出土した炭化材（試料11）、溝状遺構１より出土した炭化材（試料12）の計10点である。

放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

２）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去、再び塩酸（HCl）で洗浄

３）定温乾燥機内で80℃で乾燥

試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表18に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

表18　測定試料及び処理

試料名	遺跡名		遺構名	種類	前処理・調整	測定法
1	新屋小タイ田遺跡	№1188	水路状遺構１	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
2	新屋小タイ田遺跡	№1359	水路状遺構２	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
3	新屋小タイ田遺跡	№2082	竪穴建物２	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
4	新屋小タイ田遺跡	№2085	竪穴建物２	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
6	新屋川添遺跡	№622	柱痕柱列P1	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
7	新屋川添遺跡	№623	柱痕柱列P4	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
8	新屋川添遺跡	№624	柱痕柱列P5	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
10	新屋川添遺跡	№410	石敷遺構１	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
11	新屋川添遺跡	№616	石敷遺構１	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
12	新屋川添遺跡	№606	溝状遺構１	木材	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}Ｃ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表19にこれらの結果を示し、図62に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

表19　測定結果

試料番号	測定№ (PED-)	δ^{13}Ｃ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}Ｃ年代 (年BP)	暦年代（西暦） １σ（68.2％確率）	 ２σ（95.4％確率）
1	33830	−29.09±0.23	874±22	875±20	1158-1209 cal AD（68.2％）	1049-1085 cal AD（13.8％） 1124-1137 cal AD（ 2.5％） 1150-1220 cal AD（79.1％）
2	33831	−27.47±0.11	569±21	570±20	1324-1346 cal AD（39.1％） 1393-1409 cal AD（29.1％）	1313-1358 cal AD（56.1％） 1387-1417 cal AD（39.3％）
3	33832	−25.79±0.11	1472±19	1470±20	570-614 cal AD（68.2％）	556-639 cal AD（95.4％）
4	33833	−27.92±0.12	1375±20	1375±20	647-664 cal AD（68.2％）	625-675 cal AD（95.4％）
6	33834	−29.41±0.16	414±19	415±20	1444-1467 cal AD（68.2％）	1437-1489 cal AD（94.4％） 1604-1607 cal AD（ 1.0％）
7	33835	−28.40±0.12	500±18	500±20	1416-1435 cal AD（68.2％）	1410-1441 cal AD（95.4％）
8	33836	−27.96±0.11	407±18	405±20	1446-1473 cal AD（68.2％）	1440-1493 cal AD（92.0％） 1602-1611 cal AD（ 3.4％）
10	33837	−25.96±0.12	517±19	515±20	1410-1430 cal AD（68.2％）	1402-1439 cal AD（95.4％）
11	33838	−25.00±0.12	909±19	910±20	1049-1085 cal AD（43.4％） 1124-1137 cal AD（13.0％） 1150-1161 cal AD（11.8％）	1038-1169 cal AD（94.6％） 1178-1182 cal AD（ 0.8％）
12	33839	−27.31±0.15	1216±19	1215±20	770-779 cal AD（ 8.7％） 790-829 cal AD（34.3％） 836-866 cal AD（25.2％）	721-741 cal AD（ 8.5％） 766-883 cal AD（86.9％）

BP：Before Physics（Present），AD：紀元

１）δ^{13}Ｃ測定値

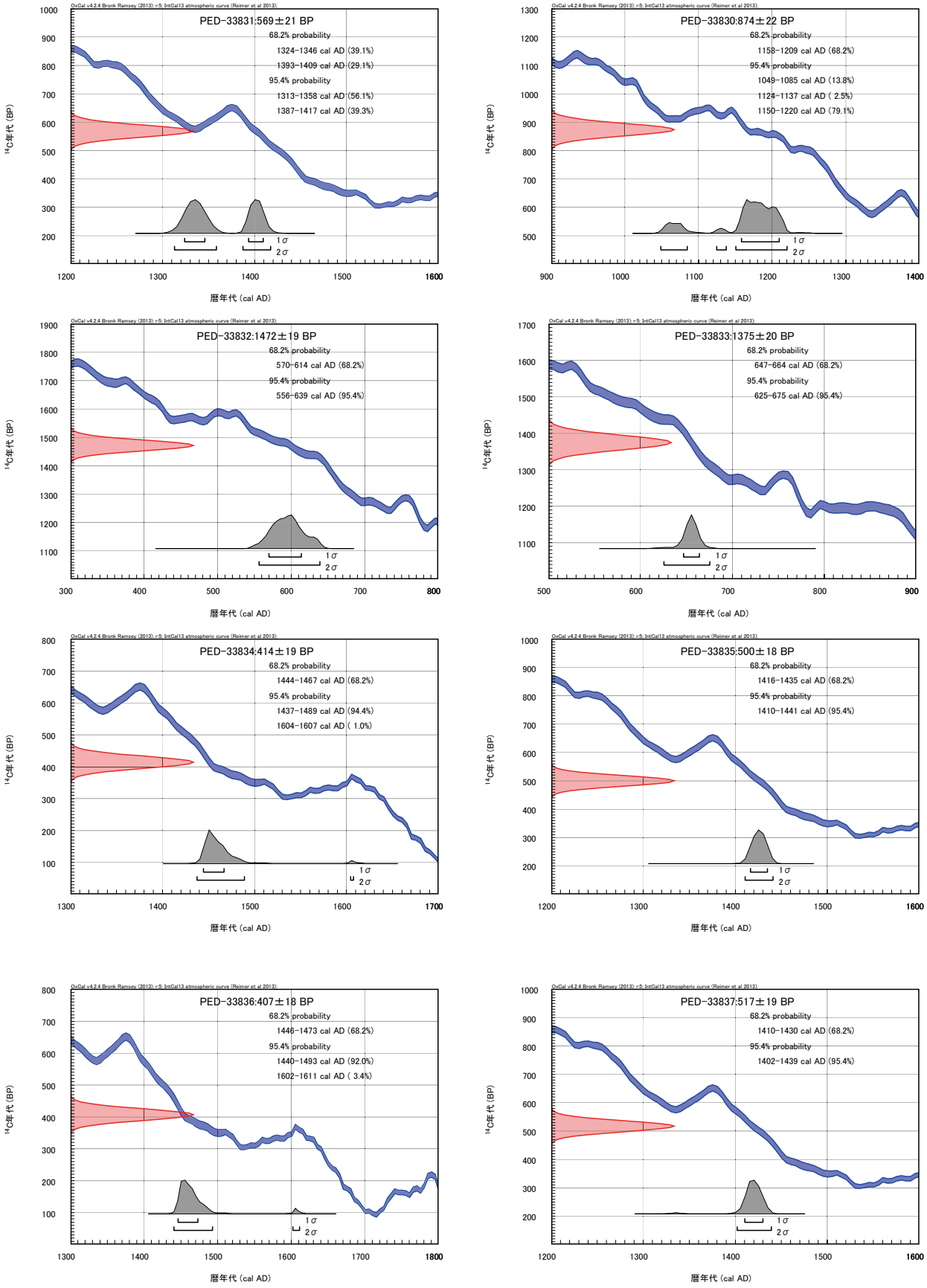
試料の測定^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}Ｃ値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

２）放射性炭素（^{14}Ｃ）年代測定値

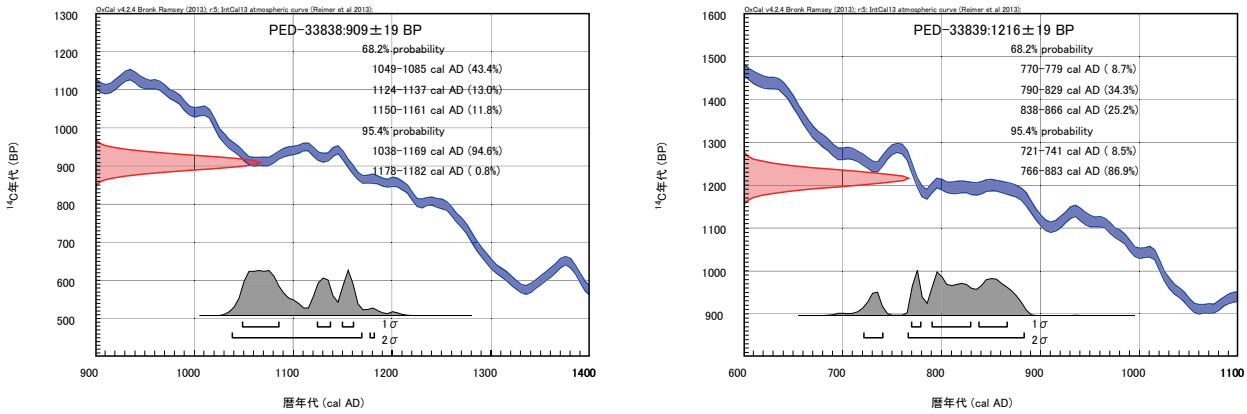
試料の^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は5730年であるが､国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差（±）は1σ（68.2％確率）である。^{14}Ｃ年代値は下１桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下１桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

３）暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動および^{14}Ｃの半減期の違いを較正することで、放射性炭素（^{14}Ｃ）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}Ｃ測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}Ｃ年代の



第62-1図　暦年較正結果



第62-2図　暦年較正結果

比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.2である。

暦年代（較正年代）は、^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ（68.2％確率）と2σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。() 内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}Ｃ年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果は、以下のとおりである。

1）新屋小タイ田遺跡

水路状遺構１より出土した木材（試料１）は、875±20年BP（２σの暦年代で1049-1085 cal AD、1124-1137 cal AD、1150-1220 cal AD）、水路状遺構２より出土した木材（試料２）は570±20年BP（同1313-1358 cal AD、1387-1417 cal AD）、竪穴建物２より出土した炭化材（試料３）は1470±20年BP（同556-639 cal AD）、竪穴建物２より出土した炭化材（試料４）は1375±20年BP（同625-675 cal AD）の年代値であった。

２）新屋川添遺跡

柱列の柱痕Ｐ１（試料６）は、415±20年ＢＰ（２σの暦年代で1437-1489 cal AD、1604-1607 cal AD）、柱列の柱痕Ｐ４（試料７）は、500±20年ＢＰ（同1410-1441 cal AD）、柱列の柱痕Ｐ５（試料８）は、405±20年BP（同1440-1493 cal AD、1602-1611 cal AD）、石敷遺構１より出土した炭化材（試料10）は、515±20年BP（同1402-1439 cal AD）、石敷遺構２より出土した炭化材（試料11）は、910±20年BP（同1038-1169 cal AD、1178-1182 cal AD）、溝状遺構１より出土した炭化材（試料12）は1215±20年BP（同721-741 cal AD、766-883 cal AD）の年代値であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」．日本第四紀学会，P.3-20.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，P.301-322.
Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, P.1869-1887.

第２節　樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。本報告では、新屋川添遺跡の発掘調査において出土した柱列の柱について樹種同定を行い、当時の木材利用について検討する。

２．試料

試料は、柱列の柱５点（Ｐ３、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ２）である。試料の詳細は、結果とともに表１に記す。放射性炭素年代測定の結果によると、Ｐ１は415±20年 BP、Ｐ４は500±20年 BP、Ｐ５は405±20年 BPの年代値が得られている。

３．方法

樹種同定の方法は、次のとおりである。カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義)、放射断面（柾目と同義)、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表20に結果を示し、基本三断面の顕微鏡写真を写真図版に示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

表20　新屋川添遺跡における樹種同定結果

試料	No.	遺構名		結果（学名／和名）
試料5	No.621	柱列の柱	P3	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　クリ
試料6	No.622		P1	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　クリ
試料7	No.623		P4	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　クリ
試料8	No.624		P5	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　クリ
試料9	No.625		P2	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　クリ

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少し、晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20ｍ、径0.4ｍぐらいであるが、大きいものは高さ30ｍ、径２ｍに達する。耐朽性・保存性が高く、水湿によく耐える材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木など広く用いられる。

５．考察

樹種同定の結果、本遺跡の柱列の柱５点はいずれもクリであった。クリは重硬かつ強靭なうえ、耐朽性・保存性が高く水湿によく耐える材で、土木材、施設材、建築材などに適している。山陰地方の

出土例を見ると、縄文時代ではクリはあまり利用されないが、弥生時代以降では柱材や杭材、板材などの木製品によく用いられている。鳥取県では福岡遺跡（弥生時代前期）や笠見第３遺跡（弥生時代後期から古墳時代初頭）などから、クリの施設材や建築材が出土している。なお、倒木などの自然木としては、山陰地方では縄文時代以降の遺跡においてクリの同定例が見られ、鳥取県の大井聖坂遺跡（縄文時代から古墳時代）や島根県の島根大学京田地区（縄文時代前期から中期）、三瓶小豆原埋没林（縄文時代後期・晩期）などからクリの自然木が出土している。

６．まとめ

新屋川添遺跡の柱列の柱について樹種同定を行った結果、いずれも重硬で耐朽性・保存性が高く水湿によく耐え、土木材や建築材に適したクリが使われている。クリは温帯に広く分布し、乾燥した台地や丘陵地を好む落葉広葉樹で、当時の本遺跡周辺地域にもクリが生育し使用されたと考えられる。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース．海青社，449Ｐ．

岡田賢（2005）大井聖坂遺跡出土木材の樹種について．大井聖坂遺跡２次調査（Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区）発掘調査報告書，（財）鳥取市文化財団，Ｐ.75-77.

古環境研究所（1993）福岡遺跡出土材の樹種．今津塚田遺跡　福岡遺跡（６区）一般国道９号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書，鳥取県埋蔵文化財調査報告書30冊，鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所，Ｐ.64-65.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，Ｐ.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296Ｐ．

能城修一（1999）島根大学構内遺跡第５・９次調査において出土した木材の樹種．島根大学構内遺跡第５・９次調査（京田地区１・諸田地区４），島根大学埋蔵文化財調査研究報告第４冊，島根大学埋蔵文化財調査研究センター，Ｐ.63-75.

古川郁夫・船橋晃（2004）笠見第３遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種．一般国道９号（東伯中山道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ，鳥取県教育文化財団調査報告書86，（財）鳥取県教育文化財団，Ｐ.483-494.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別第１号．植生史研究会，242Ｐ．

渡辺正己･古野毅（2003）（５）樹種同定結果．三瓶埋没林調査報告書Ⅲ（平成10～14年度調査まとめ），島根県景観自然課，Ｐ.49-50.

写 真 図 版

図版1（新屋小タイ田遺跡）

新屋小タイ田遺跡（北方向より）

新屋小タイ田遺跡Ｅ区（南方向より）

図版２（新屋小タイ田遺跡）

新屋小タイ田遺跡全景

新屋小タイ田遺跡Ｅ区調査前（北方向より）

新屋小タイ田遺跡Ｅ区調査前（南方向より）

新屋小タイ田遺跡全景（南方向より）

新屋小タイ田遺跡W区調査前（北方向より）

新屋小タイ田遺跡W区表土剥ぎ（南方向より）

竪穴建物1

竪穴建物1遺物出土状況

E1区遺構検出状況
（中段左右・下段右）

図版4（新屋小タイ田遺跡）

E1区全景

E1区遺物出土状況

土坑1完掘状況

土坑1断面

土坑2完掘状況

土坑2断面

竪穴建物２完掘状況

竪穴建物２検出状況

竪穴建物２遺物出土状況

竪穴建物２遺物出土状況

図版6（新屋小タイ田遺跡）

竪穴建物2遺物出土状況（P6・P7他）

E2区全景

調査状況

E3区全景（掘立柱建物1、2、柱穴）

E3区柱穴群近景

図版８（新屋小タイ田遺跡）

E4区全景

土器溜り全景

土器溜り遺物出土状況

河川状遺構（西方向より）

河川状遺構（北方向より）

自然流路（西方向より）

自然流路（東方向より）

E区調査後全景

作業状況

W2区遺物出土状況

W2区完掘状況（南方向より）

W2区完掘状況（北方向より）

W3区トレンチ

W3区トレンチ断面

水路1・2（東方向より）

水路1・2（西方向より）

水路2（東方向より）

水路2（西方向より）

水路1・2完掘状況（東方向より）

水路1・2断面

図版12（新屋小タイ田遺跡）

水路1（西方向より）

水路1（東方向より）

水路1杭検出状況

水路1杭検出状況

水路1横木検出状況

水路1断面

水路1横木検出状況

W4・5区砂利層検出状況（東方向より）

W4・5区砂利層検出状況

W4・5区鉄分沈着層検出状況（東方向より）

W4・5区鉄分沈着層検出状況（西方向より）

W4・5区道路状遺構礫検出状況

W4・5区礫内鉄滓検出状況

作業状況

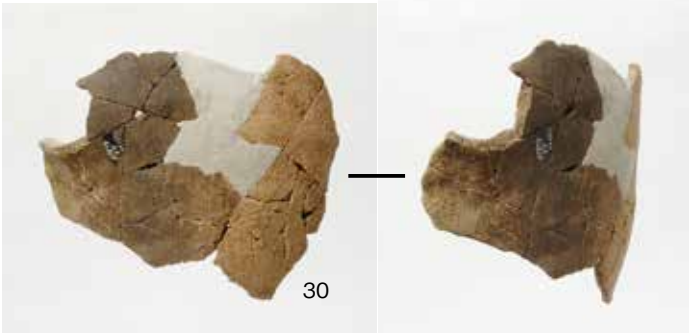
道路状遺構検出状況（西方向より）

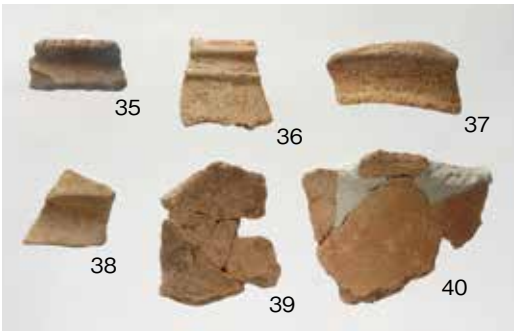
道路状遺構検出状況（東方向より）

道路状遺構礫除去完掘状況（西方向より）

道路状遺構礫除去完掘状況（東方向より）

出土遺物1（土師器、石器、鉄器）



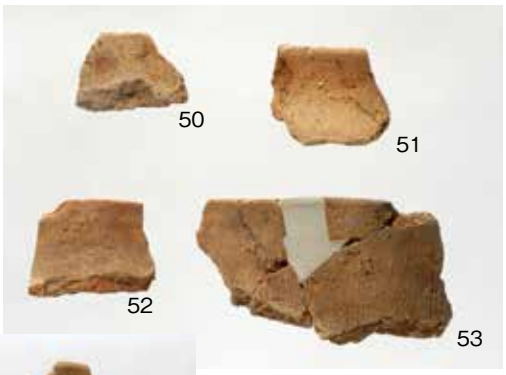


出土遺物2（土師器、須恵器、縄文・弥生、鉄器）

43

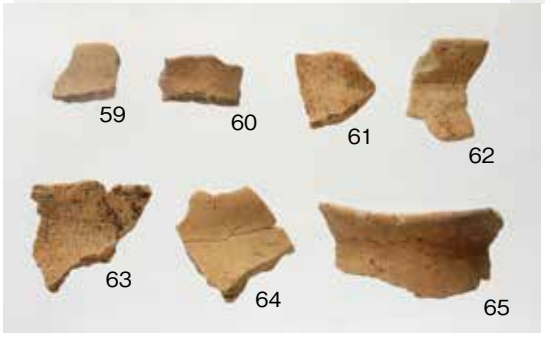
44
46
45
47
48

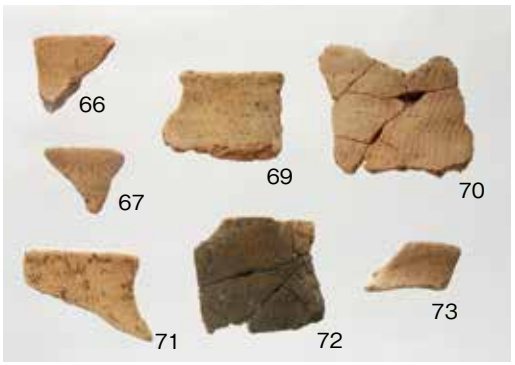
49


50
51
52
53

54
55
56
57

58

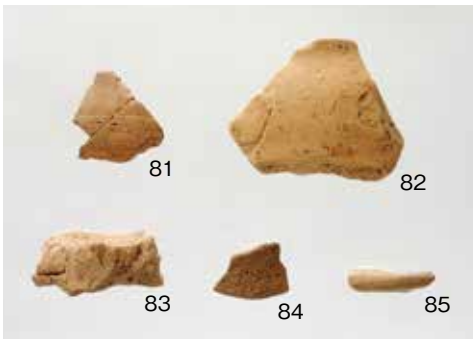

59
60
61
62
63
64
65

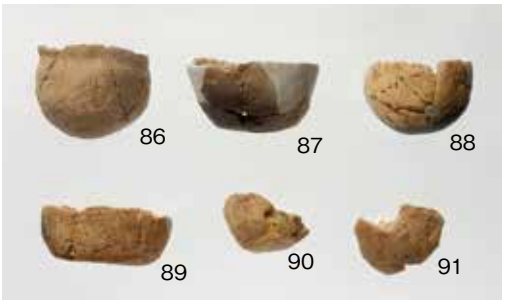

66
69
70
67
71
72
73

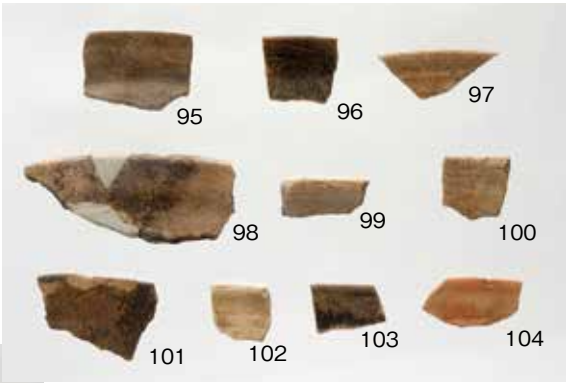
68

74
77
78
75
79

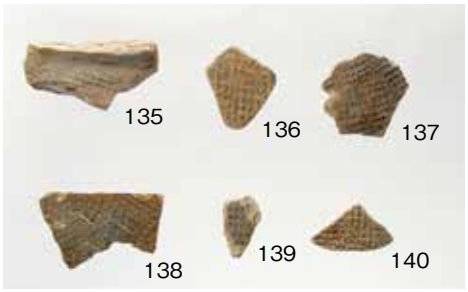
出土遺物3（土師器）

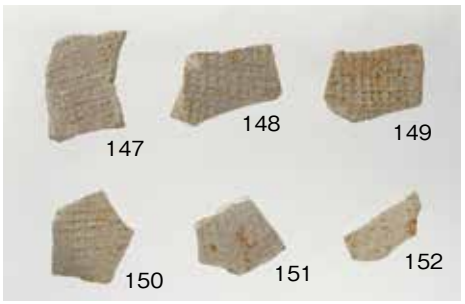


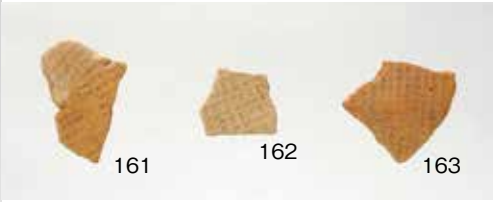


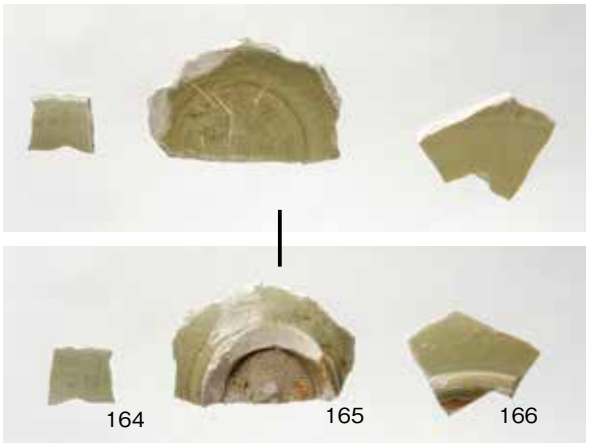


出土遺物4（土師器、須恵器）



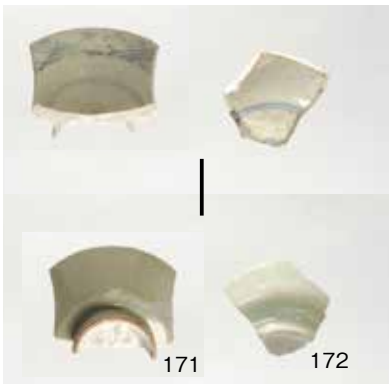


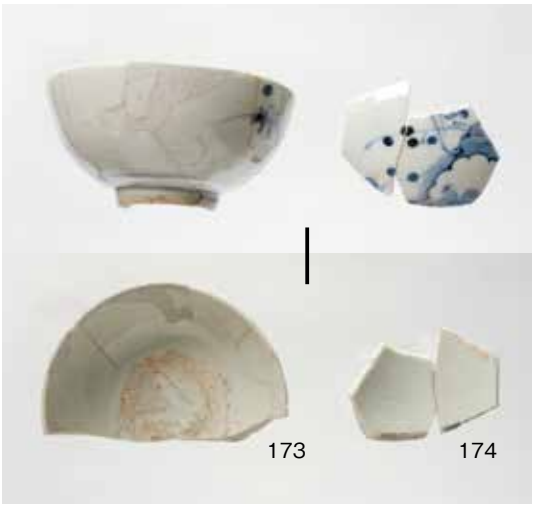


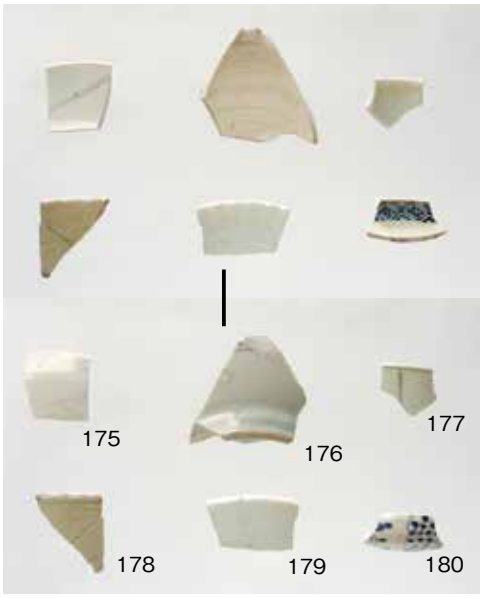


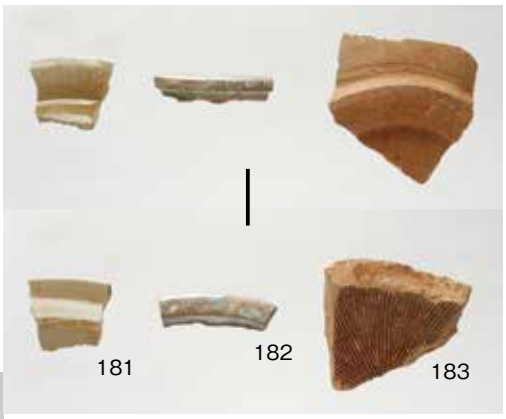
出土遺物5（瓦質土器、須恵質土器、青磁）

167
168
169
170


171
172


173
174

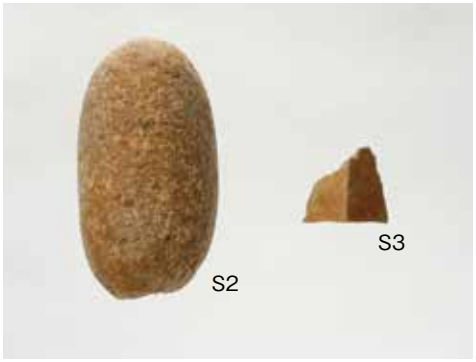

175
176
177
178
179
180


181
182
183

184
185
186

187

出土遺物6（陶磁器、羽口）



出土遺物7（石器、鉄器、煙管、銭、杭）

出土遺物8（杭）

W16

W17

W18

W20

W14

W19

W22

W21

W23

W24

W25

W26

W27

出土遺物9（杭）

W28

W31

W33

W34

W29

W32

W35

W36

W30

W37

W38

出土遺物10（杭）

新屋川添遺跡（北方向より）

新屋川添遺跡（南方向より）

図版26（新屋川添遺跡）

調査前状況

掘立柱建物1（南方向より）

柱列・掘立柱建物1

掘立柱建物1（南方向より）

柱列P4柱痕

柱列P5柱痕

柱列P3柱痕

柱列P2柱痕・根石

遺物出土状況

柱列P1柱痕

作業状況

石敷遺構１・石敷遺構２・水路状遺構

石敷遺構１（南方向より）

石敷遺構１・石列（南方向より）

石敷遺構１（北方向より）

石敷遺構１と平坦部（南方向より）

作業状況

石敷遺構2（西方向より）

石敷遺構2礫除去状況（東方向より）

水路状遺構（西方向より）

水路状遺構（東方向より）

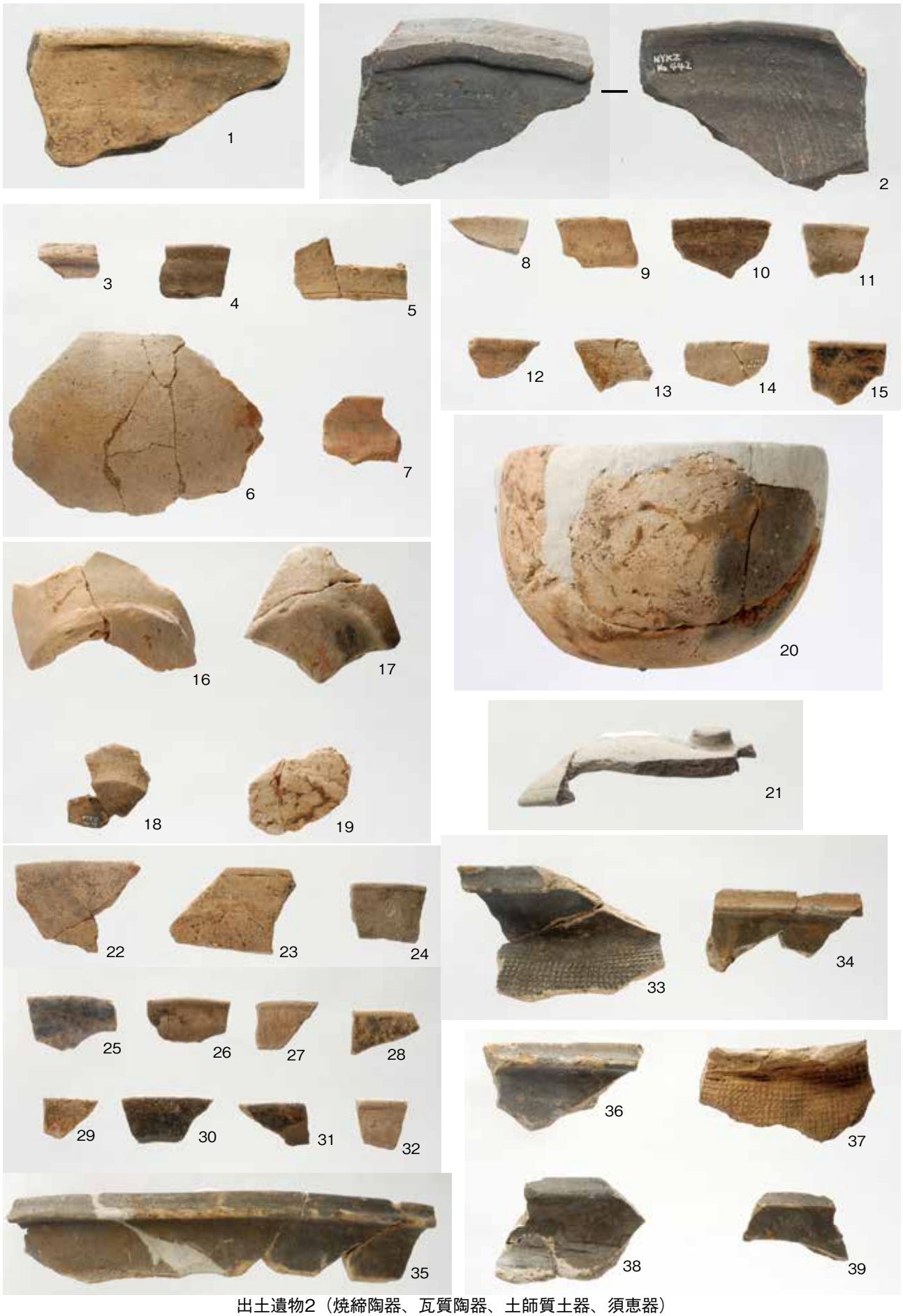
トレンチ1（南方向より）

トレンチ2（西方向より）

調査区東側断面

調査区西側断面

出土遺物1（柱）



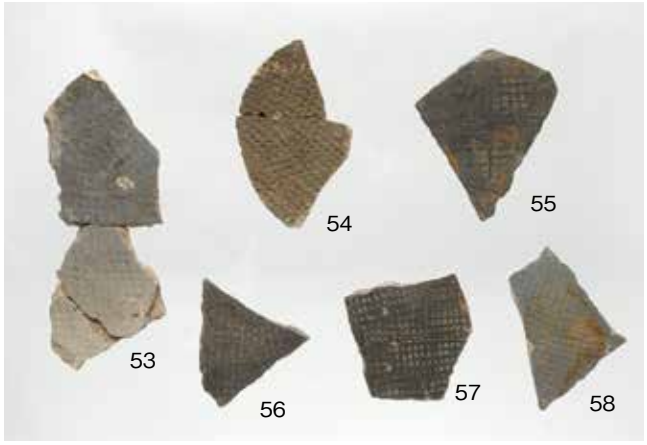
出土遺物2（焼締陶器、瓦質陶器、土師質土器、須恵器）

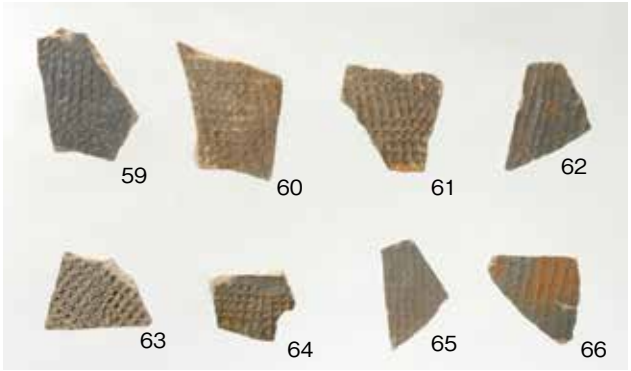
40
41
42
43
44

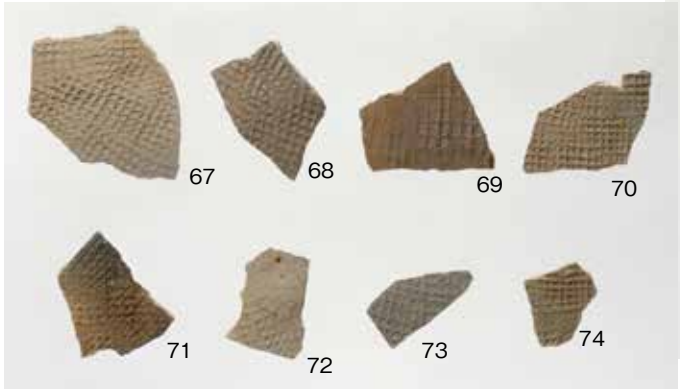
45
46
47
48

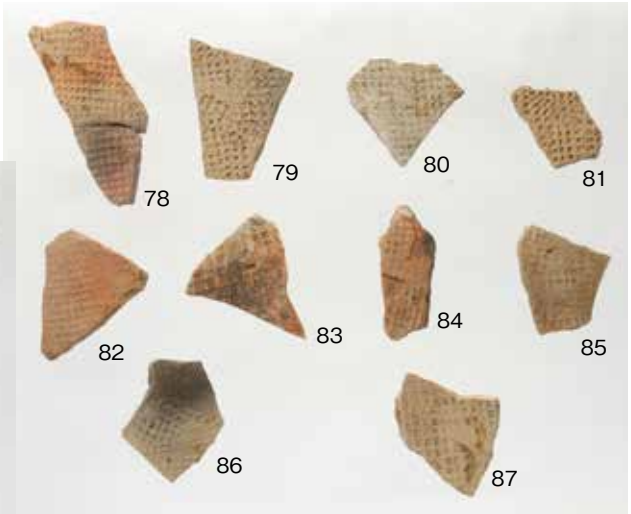
49

50
51
52


53
54
55
56
57
58


59
60
61
62
63
64
65
66


67
68
69
70
71
72
73
74

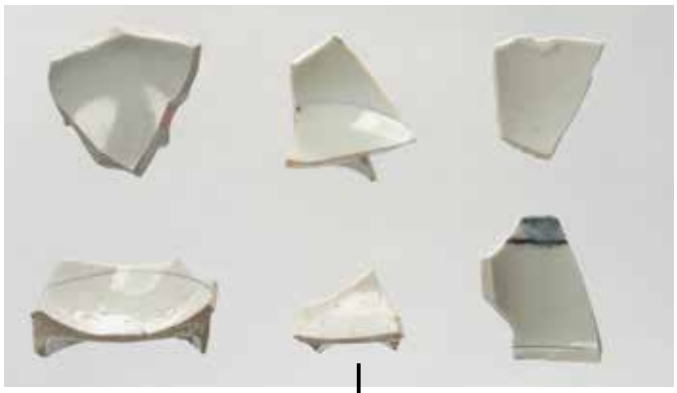

78
79
80
81
82
83
84
85
86
87

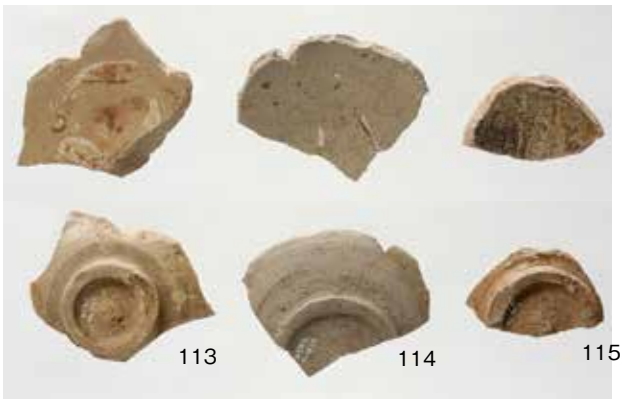
75
76
77

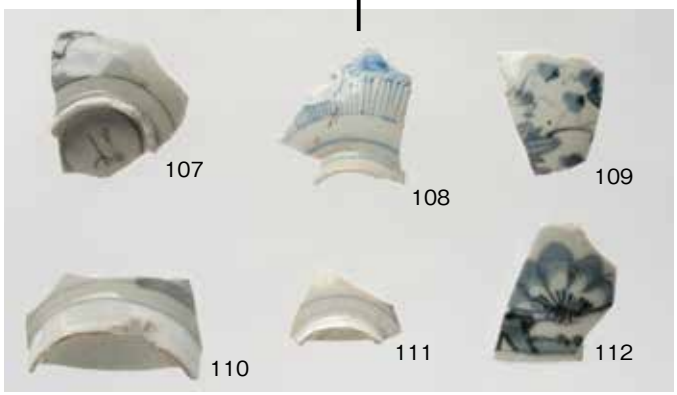
88

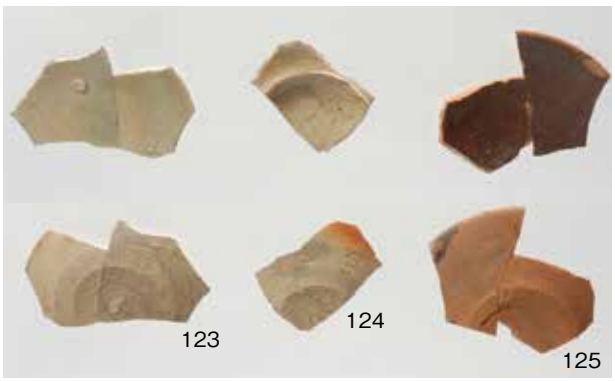
出土遺物3（瓦質陶器）

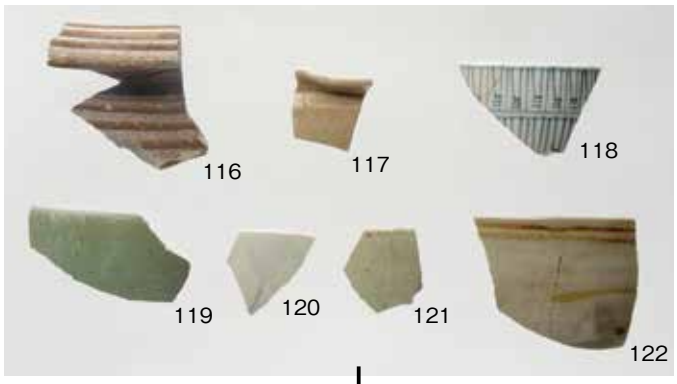
出土遺物4（青磁、白磁、青花、天目、焼締陶器）



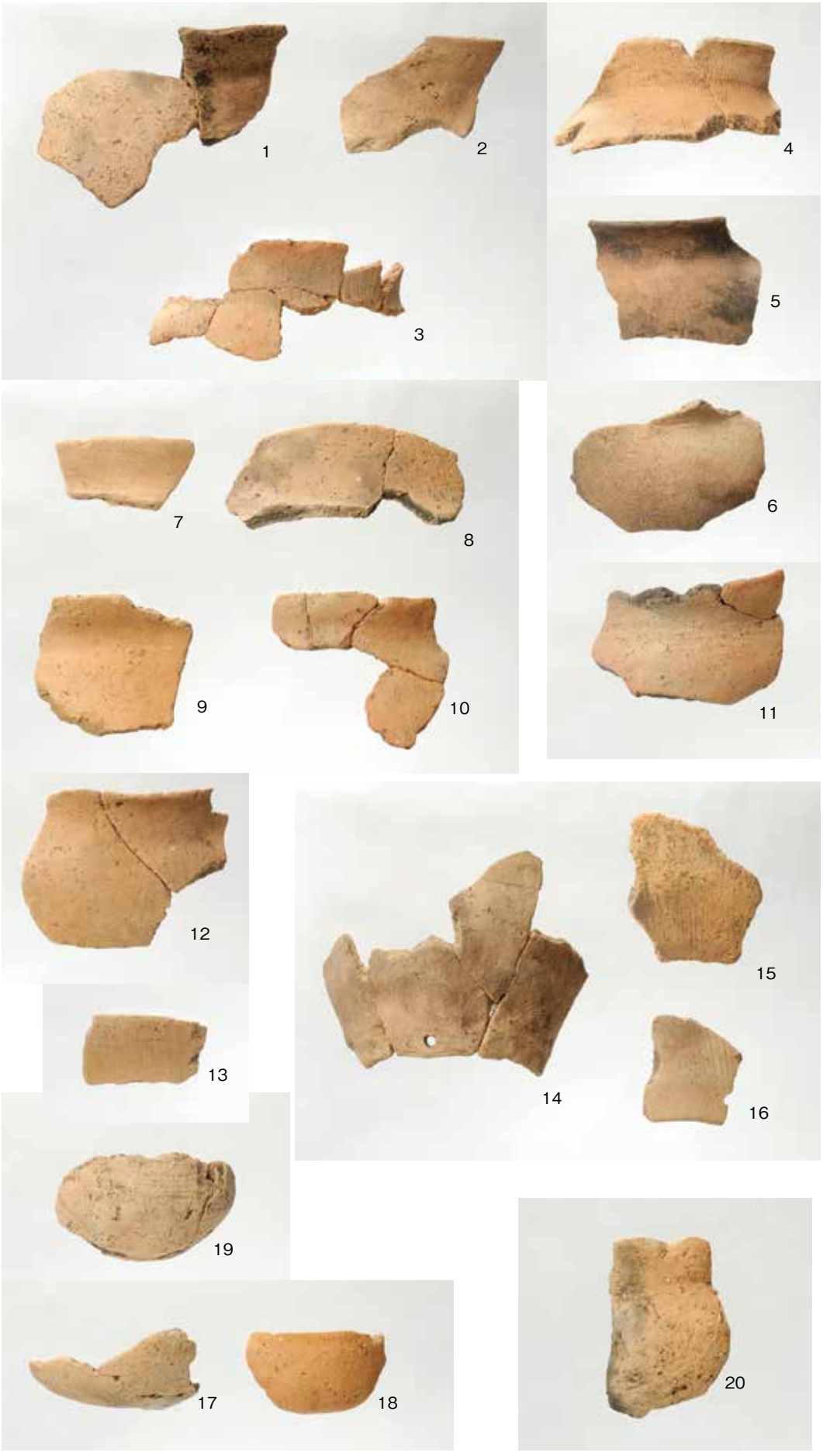




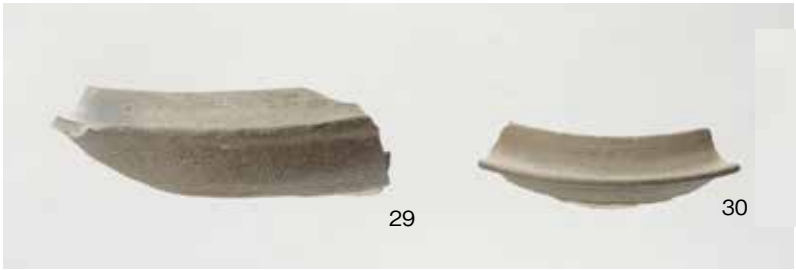




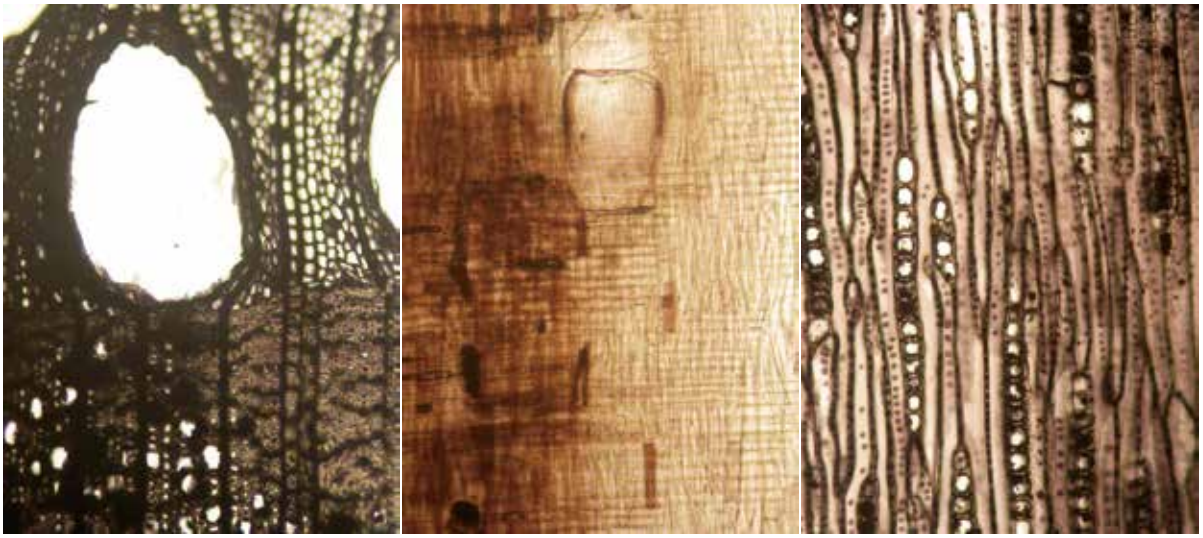
出土遺物5（陶磁器、金属器、石器、銭）



出土遺物1（土師器）

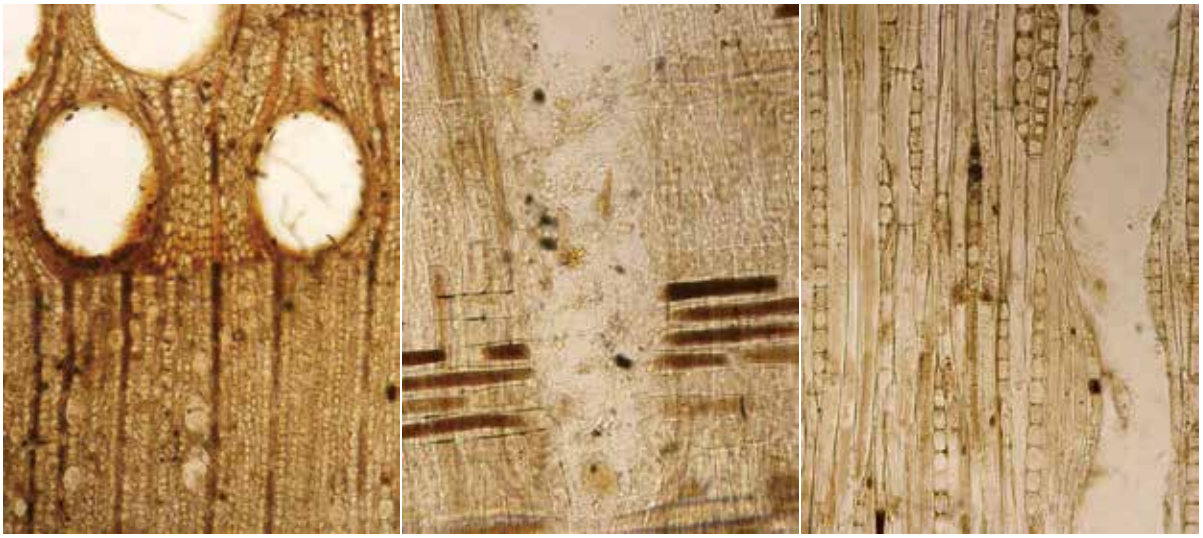


出土遺物2（須恵器）



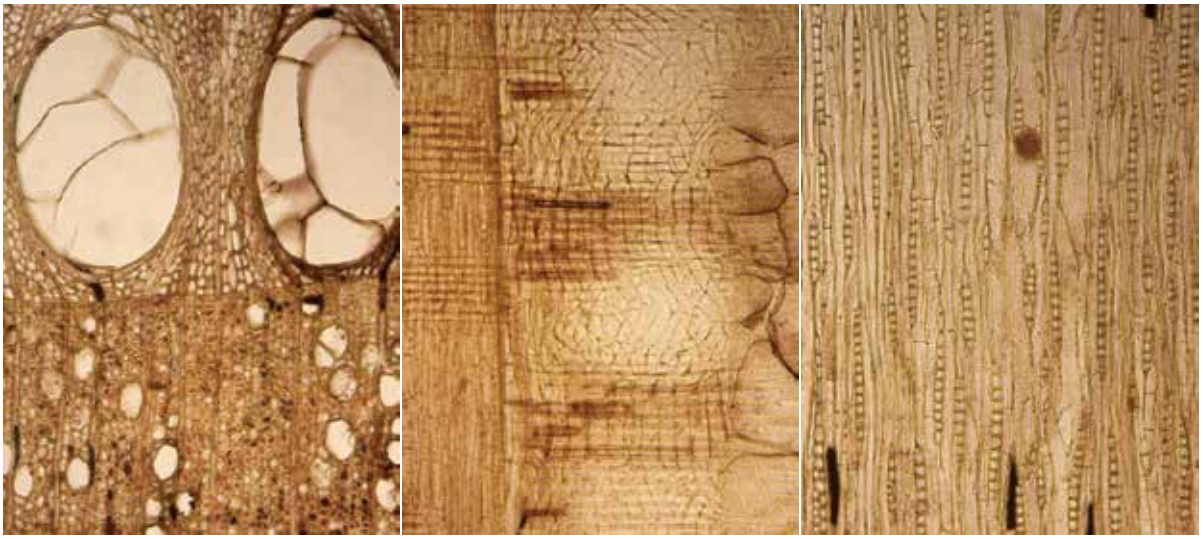
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

１．クリ　試料6 №622 杭列の柱痕 P32



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

２．クリ　試料7 №623 杭列の柱痕 P30



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

３．クリ　試料8 №624 杭列の柱痕 P7

報　告　書　抄　録

ふりがな	にいやこたいだいせき・にいやかわぞえいせき
書名	新屋小タイ田遺跡・新屋川添遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	(一財) 米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	22
編著者名	平木裕子
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室
所在地	〒683－0011　鳥取県米子市福市281番地　　ＴＥＬ・ＦＡＸ　0859－26－0455 ｅメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦２０２０年３月３１日　　令和２年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新屋小タイ田遺跡	鳥取県日野郡日南町新屋	31401	2-0318	35度6分17秒	133度11分32秒	平成28年7月25日～平成28年10月31日	3,120㎡	道路工事
新屋川添遺跡	鳥取県日野郡日南町新屋	31401	2-0317	35度6分3秒	133度11分28秒	平成28年11月13日～平成28年12月12日	1,040㎡	道路工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新屋小タイ田遺跡	集落	古墳時代	竪穴建物、掘立柱建物、土器溜、道路状遺構、水路状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土器、青磁、白磁、陶磁器、石鏃、石斧	
新屋川添遺跡	包含層	中世	掘立柱建物、柱列、石敷遺構	土師器、須恵器、中世土器、青磁、白磁、陶磁器、石鏃、銅銭、柱	

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書22

鳥取県日野郡日南町

新屋小タイ田遺跡
新屋川添遺跡

２０２０年3月

編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団
〒６８３－００１１　鳥取県米子市福市２８１番地
ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５

印　　刷　有限会社米子プリント社